豊中市文化財調査報告書　第69集

大阪府豊中市

豊島北遺跡

第6次発掘調査報告書

平成27年（2015年）3月

豊中市教育委員会

豊中市文化財調査報告書　第69集

大阪府豊中市

豊　島　北　遺　跡

第6次発掘調査報告書

豊中市教育委員会

序　文

豊中市は、工業、商業の一大都市、大阪市北郊の衛星都市として、昭和40年代以降、急速に発展を遂げてまいりました。近年、住宅都市としての成熟期を迎え、少子高齢化を見据えた高度福祉型社会への模索、災害に強いまちづくりなど、新しい都市像の模索が続けられています。

本市の歴史は古く、最初の人類の足跡はおよそ2万年前の旧石器時代にさかのぼります。以後、近代にいたるまで、地域固有の豊かな歴史が育まれてまいりました。

この地域に住む人々の生活や文化については、文献史料の乏しい古墳時代以前はいうまでもなく、中世期にあっても記録にとどめられる事象は限られています。そのため、発掘調査によって土の中から見出された数々の文化財は、地域固有の豊かな歴史像を描く上で必要不可欠のものといえます。このような意味から、今後、国民共有の財産である埋蔵文化財をいかに整理し、報告書にまとめ、活用への道筋を付けていくか、このことが大きく問われています。

市民にとって、自らが住まう土地の歴史や文化を知ることは、地域への愛着や誇り、アイデンティティの醸成につながり、潤いあるまちづくりを実現していく上で不可欠なものと考えられます。埋蔵文化財の意義を明らかにし、その価値を多くの市民に発信していくため、本書が少しでもその責の一端を果たすことにつながれば幸いです。

最後に、このたびの調査にあたりまして、事業者である（株）プレサンスコーポレーションには、調査の実施に対し格別のご協力を賜りましたことを記し、厚く感謝申し上げます。また、現地調査の遂行に際しましては、（株）島田組と現地担当の皆様には大変ご苦労をおかけいたしました。さらに、本書の作成にあたり数多くの皆様からご指導、ご教示を得ましたことを記し、上記各位に対しあらためて感謝を申し述べたいと思います。

平成27年（2015年）3月31日

豊中市教育委員会
教育長　大 源 文 造

例　言

1．調査地は、大阪府豊中市曽根東町６丁目 38 －１他６筆に所在する。
2．調査は、豊中市教育委員会事務局地域教育振興室が、事業主体者である（株）プレサンスコーポレーションから依頼を受け実施した。現地調査は同室主幹服部聡志が担当した。
3．現地調査は、平成 25 年５月 13 日～７月 31 日まで実施した。
4．現地作業は、（株）島田組が事業主体者からの依頼にもとづき、教育委員会の指示のもと重機掘削、遺構掘削、排水等作業の一切を担当した。
5．現地調査では、遺構実測等の作業を秋山研一、山岸信が行い、現地調査終了後の遺物実測と図面作成等については、地域教育振興室　浅田尚子の指導の下、榎本純子、長谷川幸恵、菅智津江が行った。
6．本書の作成にあたっては、下記の方々からご協力を得た（所属省略、順不同）。
　宮崎泰史、小浜成、藤田道子、新海正博、福永伸哉、中久保辰夫、桐井理揮、岩越陽平
7．本書の作成は、編集・執筆を服部が担当した。

凡　例

1．土色等の記載にあたっては、農林水産省農林水産技術会議事務局監修『新版標準土色帖』に依拠した。
2．座標値は世界測地系による平面直角座標系第Ⅳ系に基づき、単位はｍである。
3．全体図及び遺構平面図の北方位、本文中のＮは座標北を示す。座標北と真北との関係は、真北が座標北から東へ 18′ 振る。
4．出土遺物の年代等については、下記の書籍等を参照した。
井藤暁子「弥生土器－近畿Ⅰ－」『月刊考古学ジャーナル』№.219　1983
森田克行「摂津地域」『弥生土器の様式と編年』1990
田辺昭三『陶邑古窯址群』平安学園高校
京嶋　覚「難波地域の古代土器－土器における都市性の把握－」『大阪市文化財協会紀要』第２号　1999
小森俊寛『京から出土する土器の編年的研究』2005
中世土器研究会『概説　中世の土器・陶磁器』1995

本 文 目 次

序文
例言・凡例
本文目次
挿図目次
図版目次

第１章　遺跡の位置と環境…… 1
　第１節　地理・地形的環境…… 1
　第２節　歴史的環境…… 1
　第３節　過去の調査…… 5

第２章　調査の経緯と方法…… 7
　第１節　調査の経緯…… 7
　第２節　調査の方法…… 7

第３章　調査の成果…… 8
　第１節　基本層序…… 8
　　（１）基本層序と遺構面…… 8
　　（２）第１区北壁断面の観察…… 10
　第２節　第１区の調査…… 12
　　（１）第５層上面の遺構・遺物…… 12
　　掘立柱建物１
　　掘立柱建物２
　　掘立柱建物３
　　掘立柱建物４
　　掘立柱建物５
　　溝１
　　溝２
　　溝３
　　溝４
　　（２）第５層下部～第６層上面の遺構・遺物…… 22
　　柱穴・ピット
　　井戸１
　　土坑１
　　土坑２

土坑３
流路
溝 10
第３節　第２区の調査…… 31
（１）調査の概要…… 31
（２）第６層上面の遺構・遺物…… 32
溝１
溝２
小穴群
第４節　第５層（包含層）出土の遺物…… 33
（１）弥生時代前期…… 33
（２）弥生時代中期…… 33
（３）弥生時代後期後半～終末期…… 37
（４）古墳時代中期…… 39
（５）飛鳥・奈良時代…… 44
（６）石器…… 46
（７）その他の遺物…… 49

第４章　まとめと課題…… 51

挿 図 目 次

第 1 図　市内遺跡分布図
第 2 図　調査地点と周辺の地形
第 3 図　調査地点位置図（1：5,000）
第 4 図　調査区配置図（1：400）
第 5 図　第１区東壁断面図（1：60）
第 6 図　第１区西壁南端部断面図（1：60）
第 7 図　第１区北壁東部断面図（1：60）
第 8 図　掘立柱建物１　平面図・断面図（1：80・1：30）
第 9 図　第５層上面遺構平面図（1：120）
第 10 図　掘立柱建物２　平面図・断面図（1：80・1：30）
第 11 図　掘立柱建物・柱穴等　出土遺物（1：4）
第 12 図　掘立柱建物３　平面図・断面図（1：80・1：30）
第 13 図　掘立柱建物４　平面図・断面図（1：80）
第 14 図　掘立柱建物５　平面図・断面図（1：80・1：30）
第 15 図　掘立柱建物５　出土遺物（1：4）

第16図　柱穴・ピット　断面図（1：30）
第17図　溝　平面図・断面図（1：80・1：30）
第18図　溝１～４　出土遺物（1：4）
第19図　第５層下部～第６層上面遺構平面図（1：120）
第20図　柱穴・ピット　断面図（1：30）
第21図　井戸１・土坑３　平面図・断面図（1：30）
第22図　井戸１　出土遺物１（1：4）
第23図　井戸１　出土遺物２（1：4）
第24図　第５層下部～第６層上面遺構　出土遺物（1：4）
第25図　第２区南壁断面図（1：60）
第26図　第２区遺構平面図・断面図（1：120・1：20）
第27図　第５層　出土遺物１（1：4）
第28図　第５層　出土遺物２（1：4）
第29図　第５層　出土遺物３（1：3）
第30図　線刻土器（1：1）
第31図　第５層　出土遺物４（1：4）
第32図　第５層　出土遺物５（1：4）
第33図　第５層　出土遺物６（1：4）
第34図　第５層　出土遺物７（1：4）
第35図　石鏃・楔形石器・石斧（1：1）
第36図　敲石（1：2）
第37図　砥石（2：3）
第38図　焼夷弾（1：4）
第39図　各遺構出土の混入遺物（1：4）
第40図　第３次・第６次調査地点と条里復元ライン（1：2,500）

図版目次

図版１　第１区南部　第５層上面
a. 遺構検出状況（東から）
b. 遺構完掘状況（東から）
図版２　第１区南部　第５層上面
a. 遺構完掘状況（南から）
b. 柱穴・溝　断面
図版３　第１区北部　第５層上面
a. 遺構検出状況（東から）
b. 遺構完掘状況（南から）
図版４　第１区　第５層上面
a. 第１区北部　植物根株跡（西から）
b. 第１区南部　根跡断面（西から）
c. 柱穴等断面
図版５　第１区南部　第６層上面
a. 遺構検出状況（東から）
b. 遺構完掘状況（東から）
図版６　第１区南部　第６層上面
a. 井戸１検出状況（東から）

b.　同　完掘状況（東から）
c.　同　遺物出土状況（北から）
d.　同　遺物出土状況（北から）
図版 7　第１区北部　第６層上面
a. 遺構検出状況（東から）
b. 遺構完掘状況（東から）
図版 8　第１区北部　第６層上面
a. 掘立柱建物１（北東から）
b. 掘立柱建物１柱穴断面ほか
図版 9　第１区北部　第６層上面
a. 掘立柱建物２ほか（南東から）
b. 掘立柱建物２・３柱穴断面
図版 10　第１区北部　東壁
a. 東壁断面（南西から）
b.　同　細部　SP-36 付近（西から）
c.　同　細部（西から）
図版 11　第１区北部　北壁
a. 溝１と北壁断面（南から）
b. 水田畦畔断面（南から）
c. 溝１断面（南から）
図版 12　第２区　第６層上面
a. 遺構完掘状況（南から）
b. 南壁断面（北西から）
c. 植物根跡断面
d.　同　（c 断面）
図版 13　掘立柱建物　柱穴出土遺物
a. 掘立柱建物２（第 11 図）
b. 掘立柱建物４（第 11 図）
c. 掘立柱建物５（第 15 図）
図版 14　溝１～４・下層遺構出土遺物
a. 溝１～４（第 18 図）
b. 第５層下部～第６層上面遺構（第 24 図）
図版 15　井戸１出土遺物
a. 壺・甕（第 22 図・第 23 図）
図版 16　井戸１出土遺物
a. 甕（第 22 図・第 23 図）
図版 17　井戸１出土遺物
a. 鉢・高杯（第 23 図）
図版 18　第５層出土遺物
a. 弥生時代前期（第 27 図）
図版 19　第５層出土遺物
a. 弥生時代中期　壺（第 28 図）
図版 20　第５層出土遺物
a. 弥生時代中期　鉢・高杯（第 28 図）
b. 弥生時代中期　施文土器・線刻土器
（第 29 図・第 30 図）
図版 21　第５層出土遺物
a. 弥生時代後期後半～終末期　壺・甕
（第 31 図）
図版 22　第５層出土遺物
a. 弥生時代後期後半～終末期　鉢・手焙形・
高杯（第 31 図）
b. 古墳時代中期　土師器（第 32 図）
図版 23　第５層出土遺物
a. 古墳時代中期　土師器（第 32 図）
図版 24　第５層出土遺物
a. 古墳時代中期　須恵器・土錘（第 33 図）
図版 25　第５層出土遺物
a. 飛鳥・奈良時代　土師器（第 34 図）
b. 飛鳥～平安時代　須恵器・黒色土器
（第 34 図）
図版 26　第５層出土遺物
a. 石鏃・楔形石器・石斧・敲石
（第 35 図・第 36 図）
図版 27　第５層出土遺物　その他
a. 砥石（第 37 図）
b. 焼夷弾（第 38 図）
c. 各遺構出土の混入遺物（第 39 図）

第１章　遺跡の位置と環境

第１節　地理・地形的環境

豊島北遺跡は、豊中市曽根東町５丁目、同６丁目、曽根南町１丁目に所在し、東西 550 m、南北 400 m、面積約 170,000 ㎡の規模を有する、当市としては中規模クラスの集落遺跡である。

市域は地形の上から、北部の丘陵、西･南部の沖積低地に大きく区分される。豊島北遺跡は、南部沖積低地に立地する遺跡としては最も北部に位置する。一方、遺跡の北を限る通称豊中台地の末端部は、曽根段丘と呼ばれる急な崖面をなし、原田集落から福井集落付近まで、東西ほぼ一直線につづく極めて特徴的な地形を呈している。この崖は東の天竺川からさらに高川を横断し、吹田市側の榎坂、垂水、豊津、片山付近に至り、一般的には縄文海進期の浸食地形と理解されている。遺跡はこの崖の直下に位置している。　旧水田面の標高は海抜 4.7 mで、水系としては、西の猪名川、東の天竺川のちょうど中間付近に所在し、直接的にはいずれの水系にも属さない。

今ひとつ地形上の特徴として、遺跡北方の段丘末端部における大規模な開析谷の存在がある。水資源確保に不利ともいえる立地を示す当遺跡の成因を考える上で、この開析谷の存在は今後検討を要する。

交通関係では、遺跡東方を南北に走る能勢街道が明治以後に整備されたが、江戸中期以前は池田道あるいは大坂道などと呼ばれ、現ルートの東方、長興寺から西願寺橋、北条、小曽根から小曽根渡しで神崎川を越えるルートが主であった。しかし今西玄章の編になる豊嶋郡誌の絵地図には、この池田道とは別に、現在の中津付近から服部、岡町を経由する明治以後の能勢街道に相当する道も描かれており、もとより古道として存在したことは確実である。中世以来の穂積・服部集落や住吉市場、岡町界隈にある瑞輪寺や原田神社、遡って桜塚古墳群等の所在から、古代以来、難波から神崎、そして豊嶋、豊能方面に続く南北の古道・能勢街道につながる原初的な道がすでに存在したことは想像に難くない。一方、当遺跡の東側に隣接する服部遺跡でも、弥生終末期における他地域産土器の出土から、河津としての性格をもつ利倉西遺跡・上津島遺跡につながる東西の道が想定され、当遺跡東方において、さきの南北古道と直交することも興味深い。背後に段丘を控えるなど特異な立地を示す一方、東西、南北をむすぶこうした交通路の存在が、集落の成因を考えるうえで重要な位置を占めるものと考えられる。

第２節　歴史的環境

当遺跡の歴史的環境について、おもに市域南部の遺跡を中心に概観したい。

旧石器時代　これまで豊中南部の沖積低地において、旧石器時代の遺物の出土は皆無である。一方、市域北部の丘陵部を中心に旧石器の出土地が集中する。しかし、蛍池遺跡からまとまった資料がみられる以外、石器が単体で出土するなど、その内容は極めて限定的である。南部低地で当該期の遺跡が発見されない理由として、丘陵南端部が縄文海進による浸食を受け段丘地

1．太鼓塚古墳群
2．野畑春日町古墳群
3．野畑遺跡
4．野畑春日町遺跡
5．小路遺跡
6．武蔵国岡部藩安部氏桜井谷陣屋跡
7．桜井谷石器散布地
8．羽鷹下池南遺跡
9．待兼山古墳
10．待兼山遺跡
11．内田遺跡
12．柴原遺跡
13．北刀根山遺跡
14．桜井谷窯跡群
15．蛍池北（宮の前）遺跡
16．蛍池東遺跡
17．蛍池西遺跡
18．蛍池遺跡
19．麻田藩陣屋跡
20．南刀根山遺跡
21．御神山古墳
22．上野遺跡
23．青池古墳
24．熊野田遺跡
25．金寺山廃寺
26．新免宮山古墳群
27．金寺山廃寺塔刹柱礎石
28．本町遺跡
29．新免遺跡
30．箕輪東遺跡
31．箕輪遺跡
32．山ノ上遺跡
33．勝部北遺跡
34．走井遺跡
35．岡町北遺跡
36．岡町遺跡
37．岡町南遺跡
38．桜塚古墳群
39．下原窯跡群
40．長興寺遺跡
41．梅塚古墳
42．埴輪散布地
43．大坂城鉄砲奉行支配焔硝蔵跡
44．原田西遺跡
45．勝部遺跡
46．勝部東遺跡
47．原田城跡（北城）
原田城跡（南城）
48．原田遺跡
49．曽根遺跡
50．曽根東遺跡
51．原田中町遺跡
52．曽根埴輪窯跡
53．豊島北遺跡
54．曽根南遺跡
55．城山遺跡
56．服部遺跡
57．若竹町遺跡
58．石蓮寺廃寺
59．石蓮寺遺跡
60．寺内遺跡
61．利倉北遺跡
62．利倉遺跡
63．利倉南遺跡
64．利倉西遺跡
65．椎堂の前遺跡
66．服部西遺跡
67．穂積遺跡
68．穂積村囲堤
69．小曽根遺跡
70．春日大社南郷目代今西氏屋敷
71．北条遺跡
72．小曽根南遺跡
73．上総国飯野藩保科氏浜陣屋跡
74．上津島川床遺跡
75．上津島遺跡
76．上津島南遺跡
77．穂積ポンプ場遺跡
78．島田遺跡
79．庄内遺跡
80．島江遺跡
81．庄本遺跡

★は調査地点

第１図　市内遺跡分布図

形を大きく変化させていること、洪積層が厚い沖積層に覆われ、深部にある遺跡を容易に検出できないこと、などがあげられる。ただし、北部における旧石器の出土から、南部低地を含む市域の広い範囲が旧石器人の活動エリアとなっていたことは想像に難くない。

縄文時代　縄文時代の遺跡は、丘陵部の千里川流域と沖積低地北部に主として分布する。千里川流域の縄文集落は、早期から終末期のほぼ全期間に及ぶが、いずれも長期の定住は認められない。流域内での数グループの移動が想定されている。一方、沖積低地の遺跡として、穂積遺跡、原田西遺跡、勝部遺跡などが知られるが、少量の遺物が出土したにすぎず、性格は必ずしも判然としない。ただし穂積遺跡第14次調査では、中期後半（住吉式）の土器、土錘などが出土し、干満が顕著な遠浅の海を生産の場として活動した縄文集落の存在が想定される。また服部遺跡第２次調査では、前期（北白川下層式）の土器が出土し、段丘上もしくはその直下に営まれた集落の存在を推定させる。

弥生時代　南部沖積低地における弥生時代の遺跡は、縄文時代に比して飛躍的にその数を増す。当遺跡の東方に展開する服部遺跡では中期～終末期の集落が、南方には後期後半～終末期の大規模集落・穂積遺跡が所在し、ここからは住居跡に伴って加工途中の銅鏃や鞴羽口などが出土している。また天竺川より東方には前期～中期の拠点集落及び終末期の集落が営まれた小曽根遺跡、終末期～古墳時代前期の北条遺跡がある。遺跡南西方の猪名川沿岸には、利倉西、利倉南、上津島など後期後半から終末期、さらに古墳前期に続く集落群があり、猪名川河岸の津とも目される遺跡を含む。一方、当遺跡北方の段丘上でも、曽根遺跡、原田遺跡など、いずれも後期から終末期に規模が拡大する。このように、南部沖積低地では、弥生時代後期後半以降、集落数が増加するとともに、規模が拡大する集落が多いという傾向が看取できる。鉄器普及などを背景とした生産力の向上とそれに伴う人口増、人・モノ・情報など流通ネットワークの整備、その延長としての地域社会再編の動きが、弥生時代後期後半～終末期に加速度的に進んだことが想定される。

古墳時代　穂積遺跡では、弥生終末期から継続する古墳時代前期集落があり、初期須恵器や韓式系土器を伴う中期集落へとつづく。南西部の利倉西遺跡も弥生終末期から古墳時代前期を経て、初期須恵器を伴う古墳時代中期の集落に継続し、さらに海浜に近い島田遺跡も古墳時代前期を代表する集落である。いずれも他地域産土器の出土が顕著にみられ、流通の要となる遺跡である。ただし当遺跡東方に位置する服部遺跡では、弥生終末期に当地域有数の集落及び墓域が営まれたにもかかわらず古墳時代集落に継続しない。古墳時代開始期における各地域、各集落の様相は一様ではなかったことを示している。

古代・中世　段丘上に位置する曽根遺跡では、８世紀から９世紀を中心とする大型建物群が計画的に営まれ、官衙もしくは新興在地豪族の居館の可能性が想定されている。小曽根遺跡では、６世紀末～７世紀中頃の小区画水田や、春日大社荘園垂水西牧五ヶ村の一つ小曽根村の平安後期～鎌倉期の屋敷跡が多数検出されている。中世服部村は穂積村からの分村とも考えられているが、服部遺跡第１次調査において比較的早い10世紀の遺構・遺物も検出されている。また、利倉西遺跡では井籠組井戸などに伴い、８～９世紀の瓦、墨書土器を含む宮都系の土器、円面硯、施釉陶器などが出土し、猪名川河岸という立地から地域と外界への窓口としての港湾的機能が想定されている。上津島南遺跡でも、難波宮固有の重圏文軒丸瓦をともなう井籠組井戸を

第２図　調査地点と周辺の地形

はじめ、宮都型土器を伴う８世紀の建物群、瀬戸内海の物資流通を跡づける多量の遺物とそれを伴う 10 ～ 12 世紀の建物群が検出されており、利倉とともに港湾的機能が想定されている。

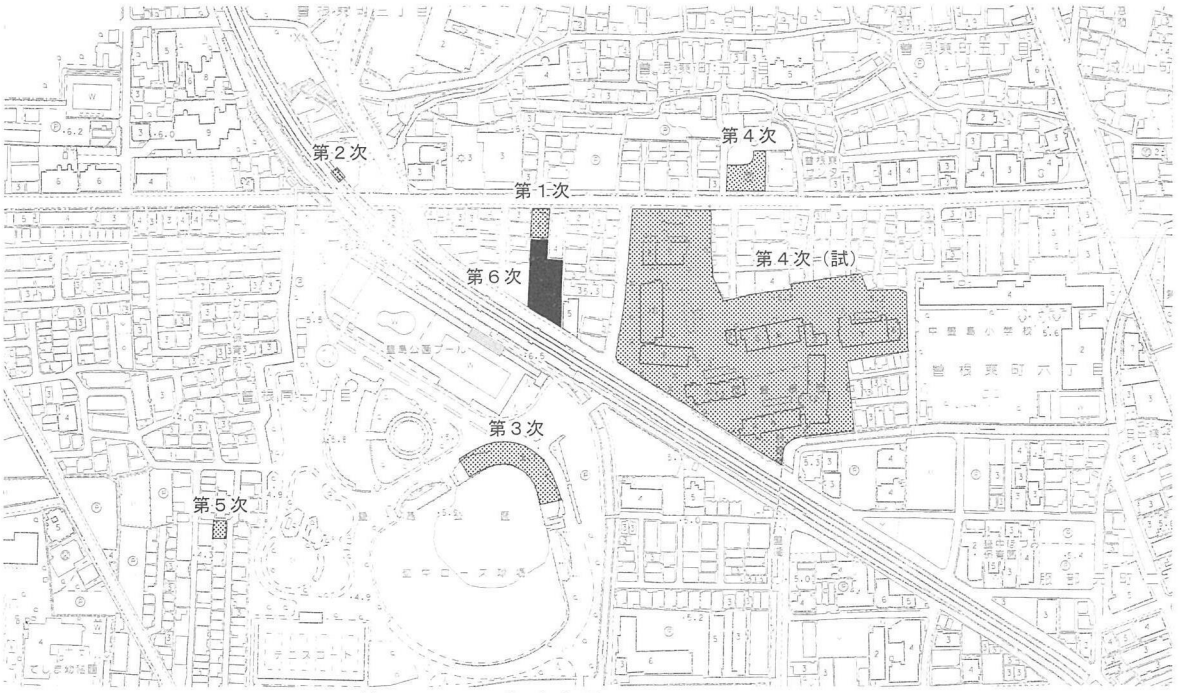
第３節　過去の調査

豊島北遺跡における既往の調査について概要を記しておく。

第１次調査では、今回の調査地の北側隣接地において、マンション建設に先立ちトレンチ調査を実施した。弥生時代終末期に属する溝２条などが検出され、中でも山陰系甕の出土は特筆される。

第２次調査では、阪急宝塚線連続立体交差事業に伴い橋脚部分の約 30 ㎡を調査した。東西、南北に直交する２条の溝を検出し、うち東西方向の１条は深さ 64㎝ の２段掘り状を呈する。下層に中粒～粗粒砂の堆積が見られ、人工水路の一部である可能性が高い。調査地は、現在、市民ホールなど公共施設が集中するもと開析谷（芦田ヶ池）の谷口付近に位置することから、沢水からの引水を目的とした灌漑用水路の可能性も考えられる。出土遺物から、いずれも弥生時代終末期の所産と見られる。

第３次調査は、豊中市立ローズ球場の観覧席リニューアル工事に伴い実施したもので、弥生時代終末期の円形周溝墓５基をはじめ、方形掘形の柱穴を伴う８世紀（推定）の建物、数度の建て替えが想定される９世紀の建物柱穴群、11 世紀以降の条里遺構、牛耕の痕跡が明瞭な 13 世紀の水田遺構などが検出された。中でも５基の円形周溝墓は、一部周溝を共有しつつ、径８ｍ～ 10 ｍの等質的ともいうべき規模、内容を示す。服部遺跡第４次調査の前方後円形を含む周溝墓群とはやや性質を異にしつつも、円形を基調とした当地域・当該期墓制の一端を明らかにした。単独で検出した８世紀と推定される小規模な建物（3.6 ｍ× 2.6 ｍ）は、今回同時期と目される建物の検出により、当該期集落の一定の広がりを想定させる。また従来、市域では



第３図　調査地点位置図（1：5,000）

必ずしも明確ではなかった９世紀集落の一端を明らかにした。

第４次調査は、マンションの建設に伴う調査で、弥生時代中期末～後期初頭の土坑６基、溝、７世紀以降の建物跡などが検出された。Ⅳ様式を中心とした遺物が今回調査地や服部遺跡第５次調査などでも確認されているが、これにつづく市域でも調査例が少ないⅣ様式末～Ⅴ様式初頭の遺構・遺物が注意を引く。

第５次調査は、遺跡でも西端に近い位置にあたり、９世紀後半～10世紀中頃を中心とした井戸、柱穴、溝が検出された。中でも緑釉陶器をはじめ、長沙窯製陶器片、白色土器などが出土し、集落の性格の一端を示している。

次数	成果	弥生時代			古墳時代			飛鳥	奈良	平安				鎌倉
		前	中	後	前	中	後	7ｃ	8ｃ	9ｃ	10ｃ	11ｃ	12ｃ	13ｃ
第１次調査	弥生時代終末期の溝２条、土坑など			▬										
第２次調査	弥生時代後・終末期の溝２条、ピットなど			▬										
第３次調査	弥生時代終末期の円形周溝墓５、８～９世紀の建物、11世紀の条里遺構		▬	▬		▬		▬	▬	▬			□	□
第４次調査	弥生時代中期末～後期初頭の土坑６基、溝３条、７世紀以降の建物跡		▬	▬ ▬				▬	▬ ▬					
第５次調査	10世紀後半の井戸、11世紀の条里遺構									▬	▬		□	□
第６次調査	弥生時代終末期の井戸、古墳時代中期の柱穴、７～８世紀の建物、11世紀の条里遺構	▬	▬	▬		▬		▬	▬		▬		□	□

▬ 集落　□ 耕作地

豊島北遺跡調査一覧

＜参考文献＞

「豊島北遺跡」『新修豊中市史』第４巻　考古　平成17年９月

「豊島北遺跡第２次」『豊中市埋蔵文化財年報』Vol. 1　平成５年３月

「豊島北遺跡第３次」『豊中市埋蔵文化財年報』Vol. 4　平成８年３月

「豊島北遺跡第４次調査」『豊中市埋蔵文化財発掘調査概要』平成19年度　平成20年３月

「豊島北遺跡第５次調査」『豊中市埋蔵文化財発掘調査概要』平成21年度　平成22年３月

第２章　調査の経緯と方法

第１節　調査の経緯

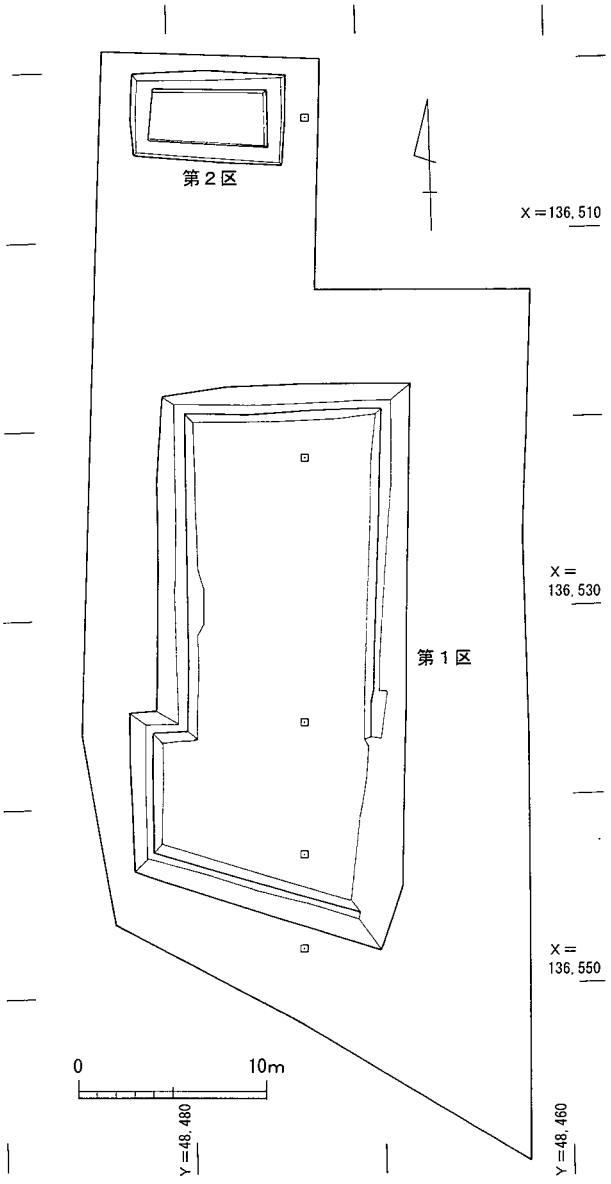
今回の調査は、共同住宅の建設に先立つ事前発掘調査として実施したものである。平成24年２月５日、事業主より豊中市教育委員会に対し、共同住宅の建設にともなう埋蔵文化財発掘届が提出された。教育委員会は当該土木工事による遺跡への影響を鑑み、平成25年１月10日、事業者側の協力に基づき確認調査を実施した。その結果、３ヶ所のトレンチでは、いずれも現地表から1.75～2.2ｍの深度において遺物包含層を、うち１ヶ所のトレンチではピット１個を検出し、調査地点の全域にわたり遺跡が所在することが明らかとなった。建物の基礎工事は、現地表から深さ230cmの掘削が予定されており、遺跡に影響が及ぶことが明らかなため、事業者側との協議にもとづき、住宅部分及び立体駐車場の基礎掘削範囲454㎡を対象に本発掘調査を実施する運びとなった。

第２節　調査の方法

調査は、排土置き場の確保の必要性から、住宅部分の調査範囲を南北の２区に分割し、立体駐車場部分と合わせ３つの調査区に分けて実施した。調査期間は、住宅南側部分（第１区南部）と立体駐車場部分（第２区）を５月13日～６月16日、住宅北側部分（第１区北部）を６月17日～７月31日として、前後２回に分けて実施した（第４図）。

掘削作業は、遺物包含層（第５層）上面までを重機により掘削し、第５層より以下の調査掘削をベルトコンベアーによる手掘り作業により慎重に実施した。第１区北部の掘削に際しては、排土置き場の制約と、梅雨の時期とも重なったことにより、結果として第５層上部を大きく削り込むこととなった。そのため、第５層上面の溝１など、残存深度の浅い遺構については、十分な調査結果を得ることができなかった。

遺構のベース層となる第６層の直下には、湧水層があり、調査は終始、降雨と湧水による水対策と並行しながら進捗した。



第４図　調査区配置図（1：400）

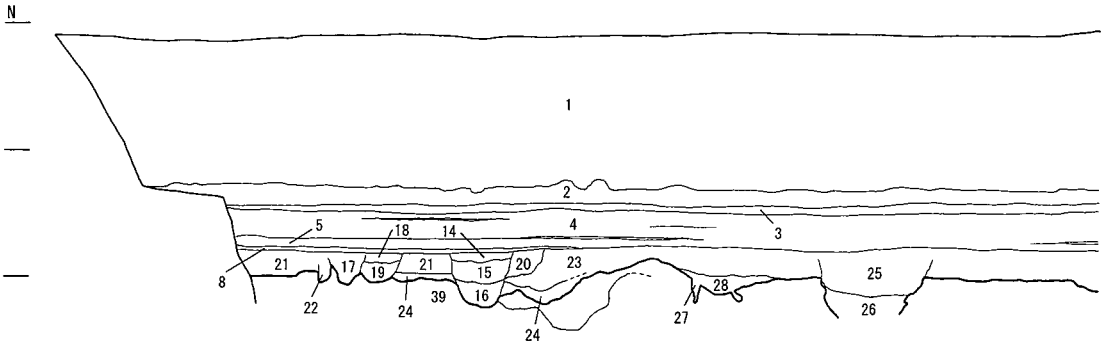
第３章　調査の成果

第１節　基本層序

（１）基本層序と遺構面

まず、調査地の基本層序について述べる。現地表面より約 1.2 mの深さまでは現代の盛土層（第１層）であり、盛土層の直下に、近世～近代の耕作土（第２層）が約 20cm の厚さで堆積する。第３層上部はそれ以前の耕作土と見られ、概ね近世に対応するものと推定される。

第３層下部は、灰オリーブもしくは黄灰色の比較的均質な細粒砂～中粒砂から構成される。この層中には、厚さ１～２cm の薄い灰白色極細粒砂の堆積が観察され、第１区南西部の土層断面では上下におよそ 10cm 程度の間隔をあけながら、おおむね３層程度が認められた。また第１区北東部の断面では、上の灰白色砂層の間にも、厚さ 0.1 ～ 0.6cm の極めて薄い白色極細粒砂が複数ラミナ状に堆積する状況が観察された。これらの薄層は、粒径が均質であることから、その生成は水に起因するものと想定される。第３層は遺物が少なく、帰属する時代や性格はなお判然としないが、おそらく鎌倉～戦国期を中心とした耕作土に相当するものと推定され



1．盛土　…第１層
2．旧耕作土①(近代)：オリーブ黒色（5Y3/1）シルト～細粒砂　…第２層
3．旧耕作土②(近世以前)：暗灰黄色（2.5Y4/2）細粒砂
4．灰黄色（2.5Y6/2）細～中粒砂。白～灰色極細粒砂の薄層（0.1 ～ 0.6mm 厚）多数が水平ラミナ状に入る　…第３層（４～７）
5．黄褐色（2.5Y5/3）中～粗粒砂。中礫（φ0.5cm）含む
6．暗灰黄色（2.5Y5/2）シルト～細粒砂に黄褐色（2.5Y5/6）粘土 60%含む
7．灰色（N4/1）細～中粒砂
8．オリーブ褐色（2.5Y4/3）細～中粒砂に暗褐色（10YR3/4）マンガン粒 30%含む　…第４層
9．灰色（10Y4/1）シルト～中粒砂。褐色（10YR4/6）鉄分粒上部に密集　…SD-1 と同質
10．黒（2.5Y3/2）細～中粒砂・黄灰（2.5Y5/1）中粒砂 20%含む
11．黄灰（2.5Y4/1）細～中粒砂・褐（10YR4/6）鉄分粒上部に密集　…第４層
12．灰色（10Y4/1）シルト～中粒砂
13．褐色（2.5Y3/1）細～中粒砂。砂分多い
14．暗オリーブ褐色（2.5Y4/3）細～中粒砂。マンガン粒少量含む　…SP-3 埋土（９～ 11）
15．黒褐色（2.5Y3/2）細～中粒砂
16．黒褐色（2.5Y3/2）細～中粒砂 50%に黒色（2.5Y2/1）シルト～極細粒砂、灰砂含む
17．黒褐色（2.5Y3/2）細～中粒砂 40%・暗灰黄色（2.5Y5/2 ～ 4/2）シルト～中粒砂 30%・黒褐色（2.5Y3/1）シルト～中粒砂 30%
18．暗灰黄色（2.5Y5/2）極細～中粒砂に暗オリーブ褐色（2.5Y3/3）マンガン粒 15%含む
19．褐灰色（10YR4/1）シルト～極細粒砂に暗灰黄色（2.5Y5/2）細～中粒砂 30%含む
20．暗灰黄色（2.5Y4/1 ～ 4/2）細～中粒砂

第５図　第１区東壁断面図（1：60）

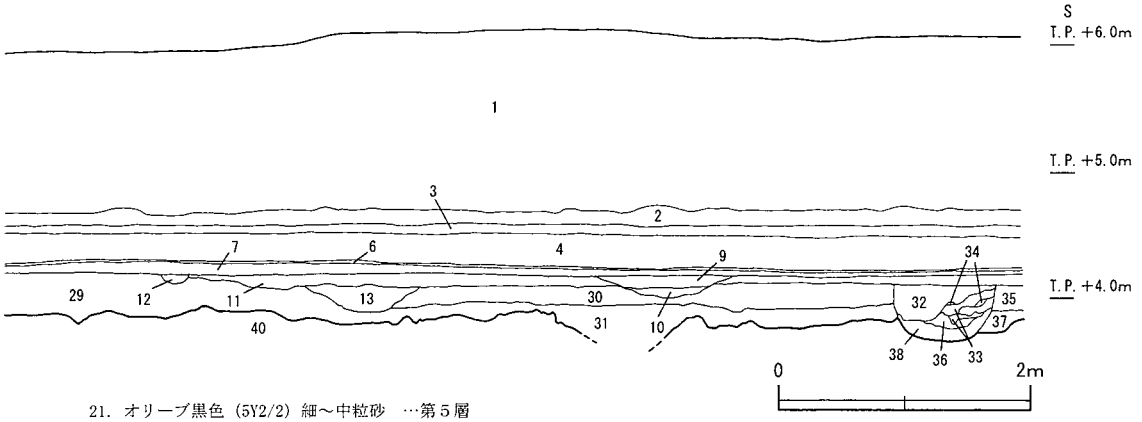
る。土層の構成物は北部段丘層に由来する洪水性の堆積物を基本とし、上述の砂層なども母材の一部としつつ数百年の間に形成されたものと推定される。砂の薄層が部分的に途切れ、水平面として必ずしも連続しないこともこの証左と見られる。

第４層は、第３層と同質の土を基本とし、条里に関係する溝１や掘立柱建物５の柱穴埋土もほぼ同質である。層中に第５層と同様の遺物を含むことから、第５層を母材の一部としつつ形成された耕作土層とみられる。第１区北半部では、第４層～第５層上面において直径 10 cm内外の植物の根株とみられる痕跡多数が検出された（図版４a)。また第１区南半部でも、第５層に直径１cm 未満の無数の根跡（図版４b）が確認されている。第４層からの出土遺物に瓦器を全く含まない点から、建物５の廃絶から 11 世紀代までに形成された耕作土と推定される。

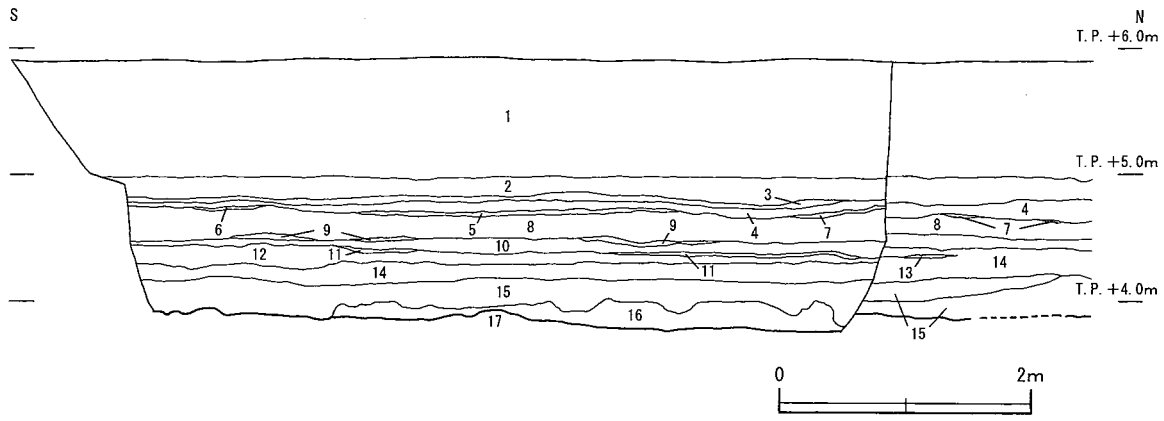
第５層は多量の遺物を含む包含層で、層厚 30 ～ 40cm を計る。出土遺物は、弥生時代前期から古代までの長期に及ぶ。第１区北部の最下層に弥生前～中期の密度が高い点を除くと、層序の上下にかかわりなく各時期の遺物が包含される。比較的緩い傾斜地とはいえ、背後に段丘崖という明確な地形変換点を控える場所であることを勘案すると、北部集落域からの遺物の流入・再堆積の結果として形成された土層である可能性が高い。

第６層は最終遺構面のベースとなる層序である。これより下部は、中粒砂～粗粒砂層が粘土層を挟みながら堆積し、ベース層のおよそ 50cm 下の砂層から湧水が顕著となる。

遺構面の理解としては、７世紀の遺物の帰属になお不明確な点もあるが、第５層上面は飛鳥



21. オリーブ黒色（5Y2/2）細～中粒砂　…第５層
22. 灰色（5Y4/1）細～中粒砂
23. 21 と同　…第５層
24. 黒褐色（10YR3/1）シルト～極細粒砂に灰黄褐色（10YR5/2）シルト～極細粒砂（地山ブロック）30%含む
25. 黒褐色（2.5Y3/1）極細～細粒砂。弥生土器多量に含む
26. オリーブ黒色（5Y3/1）極細～細粒砂。弥生土器含む
27. 黒褐色（2.5Y3/1）シルト～極細粒砂
28. 黄灰色（2.5Y4/1 ～ 3/1）極細～細粒砂
29. 黒色（2.5Y2/1）シルト～細粒砂。第６層（地山ベース層）含む　…第５層
30. 黒褐色（2.5Y3/1）シルト～中粒砂　…第５層
31. 黒色（5Y2/1）シルト～極細粒砂・黄灰（2.5Y3/1）極細粒砂。地山ベース層 40%含む
32. オリーブ黒色（5Y3/1）細～粗粒砂　…SP-36 埋土（34 ～ 40）
33. 黄灰色（2.5Y4/1）細～中粒砂
34. 黄灰色（2.5Y5/1）中～粗粒砂
35. 暗灰黄色（2.5Y5/2）中粒砂
36. 黒色（2.5Y3/1）極細～細粒砂に黄灰色（2.5Y4/1）中粒砂 40%含む
37. 黄灰色（2.5Y4/1）細～中粒砂
38. 黒色（5Y2/1）粘土～中粒砂
39. 黄褐色（2.5Y5/6 ～ 5/4）粘土～粗粒砂　…第６層（地山ベース層）
40. 黄灰色（2.5Y4/1）中～粗粒砂　…第６層（地山ベース層）



1．盛土　…第１層
2．旧耕作土：褐灰色（10YR7/1）極細～中粒砂　…第２層
3．床土：灰黄色（2.5Y7/2）極細～粗粒砂
4．黄褐色（10YR5/6）細～粗粒砂に黄灰色（10YR6/1）細～粗粒砂40％含む　…第３層（４～13）
5．にぶい黄橙色（10YR6/3）極細～粗粒砂に灰白色（7.5Y8/1）細粒砂含む。明黄褐色（10YR6/6）鉄分斑含む
6．にぶい黄色（2.5Y6/3）極細～粗粒砂に灰白色（7.5Y8/1）細～粗粒砂を含む
7．灰黄色（2.5Y7/2）極細～粗粒砂に灰白（7.5Y8/1）細～粗粒砂を含む
8．褐灰色（10YR4/1）極細～粗粒砂。明黄褐（10YR6/6）鉄分斑が上部2/3に顕著
9．灰黄色（2.5Y6/2）極細～粗粒砂。灰白色（7.5Y8/1）細～粗粒砂を含む
10．灰オリーブ色（5Y5/2）極細～粗粒砂
11．灰オリーブ色（5Y5/2）極細～粗粒砂。灰白色（7.5Y8/1）細～小礫含む
12．灰オリーブ（5Y5/2）極細～粗粒砂　土質４と同じ　少ししまりよい
13．灰オリーブ色（5Y5/2）極細～粗粒砂。灰白色（7.5Y8/1）細～小礫含む
14．灰オリーブ（5Y5/2）極細～中粒砂に灰黄褐色（10YR5/2）極細～粗粒砂を30％含む　…第４層
15．黒褐色（10YR3/1）シルト～粗粒砂。小礫含む。弥生時代前期～７世紀の土器を多く含む　…第５層
16．黒褐色（10YR2/2）シルト～粗粒砂。小礫含む。上部にわずかに土器含む　…第６層
17．にぶい黄褐（10YR4/3）極細～粗粒砂。小礫含む

第６図　第１区西壁南端部断面図（1：60）

時代（7世紀）～平安時代（10世紀）、第６層上面は弥生時代前期～古墳時代中期（5世紀後半）とし、以下の記述はこの理解に従う。

（２）第１区北壁断面の観察

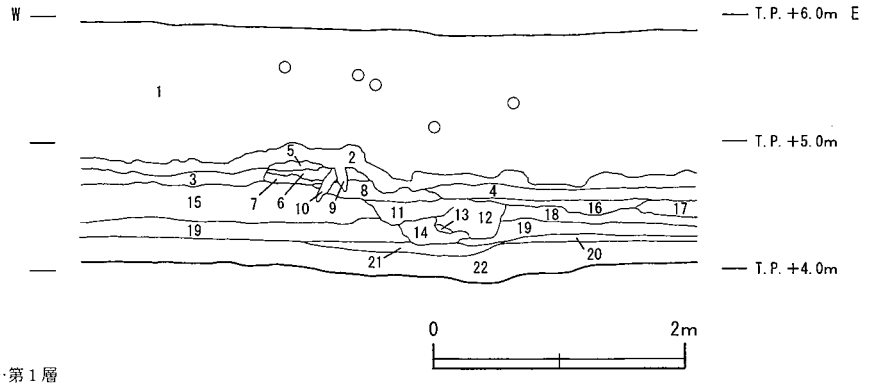
第１区北壁の断面について、特筆すべき状況が観察されたのでここに記述する。

第５層上面で検出された、条里に関係するとみられる溝１は、ほぼ正方位を採る南北の溝であるが、その上部の状況を北壁断面で観察すると、いくつかの留意すべき点が指摘できる。一つは、溝１の上部にあたる近・現代の耕作土（第２層）において、この溝の位置の東西で約15cmの高低差が生じており、その境界に幅約１ｍの畦畔が設けられていること。第２点として、この畦畔に重複して、盛土で構築されたより古い時期の畦畔が存在すること。第３点は、第３層下部の一部に、粗粒砂層を挟みながら還元性の青い色調を呈するやや乱れた土層が観察されること。４点目として、第１層の盛土中で、溝１と重なる範囲に瓦斯、水道、下水など現代の配管が埋設されているが、その直上は最近まで幅の狭い通路となっており、明確な敷地境界であったこと、などを挙げることができる。

溝１は、後にも述べるように、11世紀頃の条里に関係する溝とみられるが、このラインが中・近世を経て、現代に至るまで土地境界として認識され続けたことを発掘調査で確認できたことは重要である。さらに、第３次調査で検出した南北溝の延長部に相当する可能性が高く、溝１

が当該地域における主要な土地区画ラインの一つであった蓋然性は高い。

付け加えるならば、溝１は、第６層上面で検出した弥生中期以降の流路とも重複する。偶然の可能性が高いが、条里区画の位置を決める要素の一つに、それ以前から続く部分的な凹所（流路）が影響するような可能性があるかどうかについては、広域的な土地制度にかかわる問題でもあり、今後の留意点の一つとしてのみ取り上げておきたい。



1．盛土　…第１層
2．旧耕作土①(近代)：オリーブ黒色（5Y3/1）シルト～細粒砂　…第２層
3．旧耕作土②(近世以前)：にぶい黄褐色（2.5Y6/4）シルトにオリーブ褐色（2.5Y4/6）シルトブロック 30%を含む
4．旧耕作土②(近世以前)：暗灰黄色（2.5Y4/2）細粒砂
5．灰オリーブ色（5Y5/2）シルト～細粒砂（５～７は旧耕作土②に伴う畦畔）
6．灰オリーブ色（5Y6/2）細粒砂にオリーブ褐色（2.5Y4/6）シルトブロック 20%含む
7．５に灰黄色（2.5Y7/2）細粒砂 40%含む
8．灰黄色（2.5Y6/2）細粒砂に黄褐色（2.5Y5/6）鉄分斑を 30%含む　基本的に３と同じ土
9．２と６の混合。畦畔を補強する杭痕跡
10．９と同。ただし６の割合多い
11．にぶい黄橙色（2.5Y6/3）細～中粒砂に暗緑灰色（7.5GY4/1）シルト～中粒砂 15%、黄褐色（2.5Y5/6）班５%を含む
12．乾土：灰色（7.5Y4/1）細粒砂・湿土：暗青灰色（10BG4/1）細～中粒砂。水分多く、還元性の色調
13．灰オリーブ色（5Y6/2）細～中粒砂。流水の痕跡で、12 とともに水の通り道であることを示す
14．灰オリーブ色（5Y5/2）細～中粒砂。シルト含むが比較的均質な土質
15．乾土：灰黄色（2.5Y6/2）・湿土：暗青灰色（5BG4/1）粗～中粒砂。上部ほど鉄分斑の発色（黄褐色（2.5Y5/6））が強く、酸化が進む　…第３層
16．灰色（5Y6/1）細～中粒砂 70%に灰オリーブ色（5Y6/2）細～中粒砂、灰白色（5Y8/1）極細粒砂、黄褐色鉄分斑５%を含む。
17．16 とほぼ同。灰色（5Y5/1）細～中粒砂が 70%
18．灰色（5Y6/1）細粒砂に黄褐色（2.5Y5/3）シルト～細粒砂 35%、灰色（10Y5/1）シルト 15%を含む
19．灰色（5Y5/1）細粒砂でシルト含む
20．灰色（5Y4/1）細～中粒砂でシルト含む　上部にマンガン粒密集　…第４層
21．乾土:暗灰黄色（2.5Y4/2)・湿土:暗緑灰（7.5GY4/1）細～中粒砂。上部にマンガン粒（暗オリーブ褐色（2.5Y3/3)）50%含む。…SD-1 埋土
22．オリーブ黒色（5Y2/2）細～中粒砂。上部はやや淡い色調で灰色（5Y4/1 ）に近い。この上面から水の浸み出しが多い。弥生時代前期～７世紀の土器を含む　…第５層

第７図　第１区北壁東部断面図（1：60）

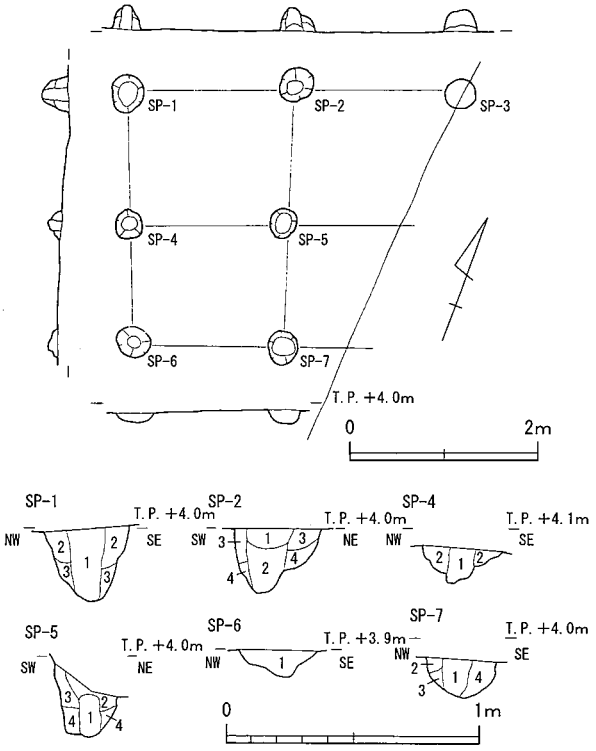
第２節　第１区の調査

（１）第５層上面の遺構・遺物

ここでは、第５層の上面で検出した遺構の他、第５層掘削途中及び第６層上面で検出した遺構のうち、明らかに７世紀以降の遺物を含む遺構を取り上げる。掘立柱建物５棟、溝４条、その他耕作に伴う小溝、ピットがある。

掘立柱建物１　東西２間（3.6ｍ）以上、南北２間（2.7ｍ）の規模を持つ建物跡で、柱間は東西1.7ｍ、南北1.25～1.45ｍを計る。第５層下部において検出したが、東壁断面にかかる柱穴の一つは明らかに第５層上面を検出面とする。柱穴は円形を呈し、直径は26～35cm、深さ10～25cmで、柱痕から推定される柱の直径は約10～15cmを計る。建物の主軸方位はN-20°05′-Wである。建物中心部の柱穴も、他の柱穴と遜色のない規模であることから、およそ２間×２間の総柱の倉庫となる可能性が高い。掘形の埋土は第５層に第６層のブロック土が若干混じる。

柱穴からの遺物は極めて少なく、SP-33、35から土器片５点が出土しているにすぎない。混入品である弥生土器以外では須恵器、土師器がある。須恵器甕の小破片は外面平行タタキ、内面ナデ、焼成はやや軟質で５世紀後半、土師器の薄い甕体部破片は、外面ハケ、内面ナデ、厚さ３mmで５世紀以前の所産とみられる。ただし、当建物は同時期の須恵器を含む第５層の上面を本来の検出面とすることは明らかであり、掘立柱建物２との主軸の共通性などから、７世紀以降に属する可能性が高い。



SP-1
1．黒色（2.5Y2/1）シルト…（柱痕）
2．黒色（2.5Y2/1）シルトに黄灰（2.5Y5/1）シルト～中粒砂50％含む
3．黒褐色（2.5Y3/1）粘土～中粒砂

SP-2
1．オリーブ黒色（5Y3/2）シルト～粗粒砂…（１、２柱痕）
2．オリーブ黒色（5Y2/2）シルト～細粒砂。炭化物含む
3．オリーブ黒色（5Y3/1）シルト～粗粒砂。炭化物含む
4．オリーブ黒色（5Y3/1）シルト～粗粒砂

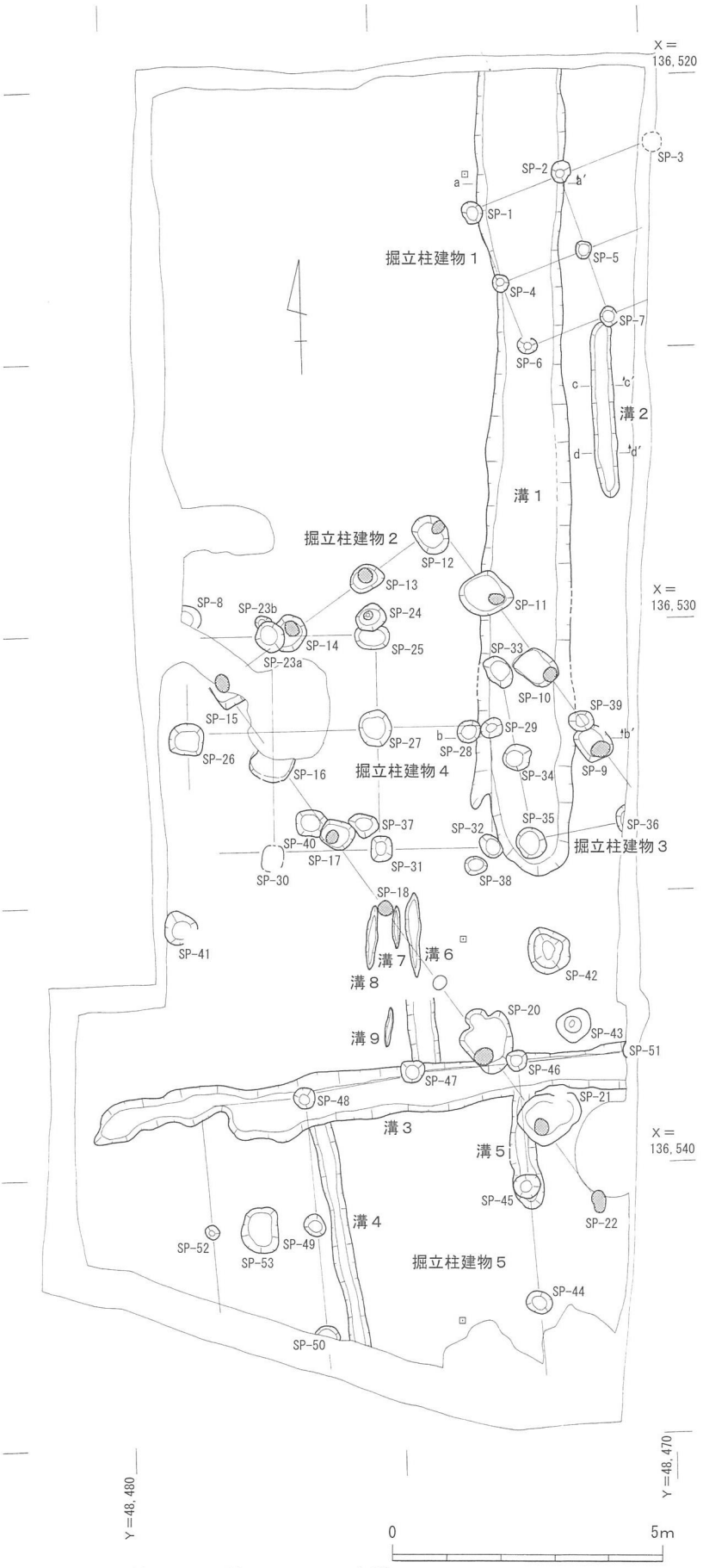
SP-4
1．黒褐色（2.5Y3/2）極細～粗粒砂…（柱痕）
2．黒褐色（2.5Y3/1）極細～粗粒砂

SP-5
1．黒色（7.5YR2/1）シルト～粗粒砂…（柱痕）
2．黒色（7.5YR7/1）シルト～粗粒砂
3．褐灰色（7.5YR4/1）シルト～粗粒砂
4．黒色（7.5YR2/1）シルト～粗粒砂

SP-6
1．黒色（2.5Y2/1）シルト～粗粒砂

SP-7
1．褐灰色（10YR4/1～5/1）極細粒砂…（柱痕）
2．褐灰色（10YR6/1）極細粒砂
3．褐灰色（10YR4/1～5/1）極細粒砂
4．褐灰色（10YR4/1～5/1）シルト～極細粒砂

第８図　掘立柱建物１　平面図・断面図（1：80・1：30）



第９図　第５層上面遺構平面図（1：120）

掘立柱建物２　梁行３間（3.3ｍ）、桁行７間（7.9ｍ）以上の建物で、１棟の規模としては比較的大きなものである。桁行方位はN-34°55′-Wで、今回検出した建物の中では最も振り幅が大きい。柱穴の掘形の形状は、いびつな円か、もしくは方形を志向するものが多く、直径もしくは一辺60～110cm、深さ28～44cm。掘形埋土は、第５層と同質の土を基本に第６層の暗灰色細粒砂ブロックが混じる。この埋土は第５層と基本的に同質のため、いずれの掘形も第５層上面において検出できなかった。ただし、柱痕と見られる部分には、何れの柱穴にも黄色粘土が混入するという特殊な状況がみられ、第５層上面検出時には、この黄色粘土で充たされた柱痕部分のみが並んで検出された。井戸１と重複するSP-18も、土層観察畦において黄色粘土（柱痕）は確認されたものの、周囲の掘形はまったく確認できなかった。黄色粘土は、段丘層に含まれる粘土と同様の明るい色調を呈し、通常、柱穴に見られる柱痕の腐植土とは明らかに異なる。黄色粘土の範囲から推定される柱の直径は約20～30cm、柱間は約1.66ｍである。

当建物の柱穴から出土した遺物は小破片に限られる。混入品とみられる弥生土器や須恵器の他、わずかに７世紀以降の所産かともみられる須恵器、土師器の破片がある（第11図１～10）。

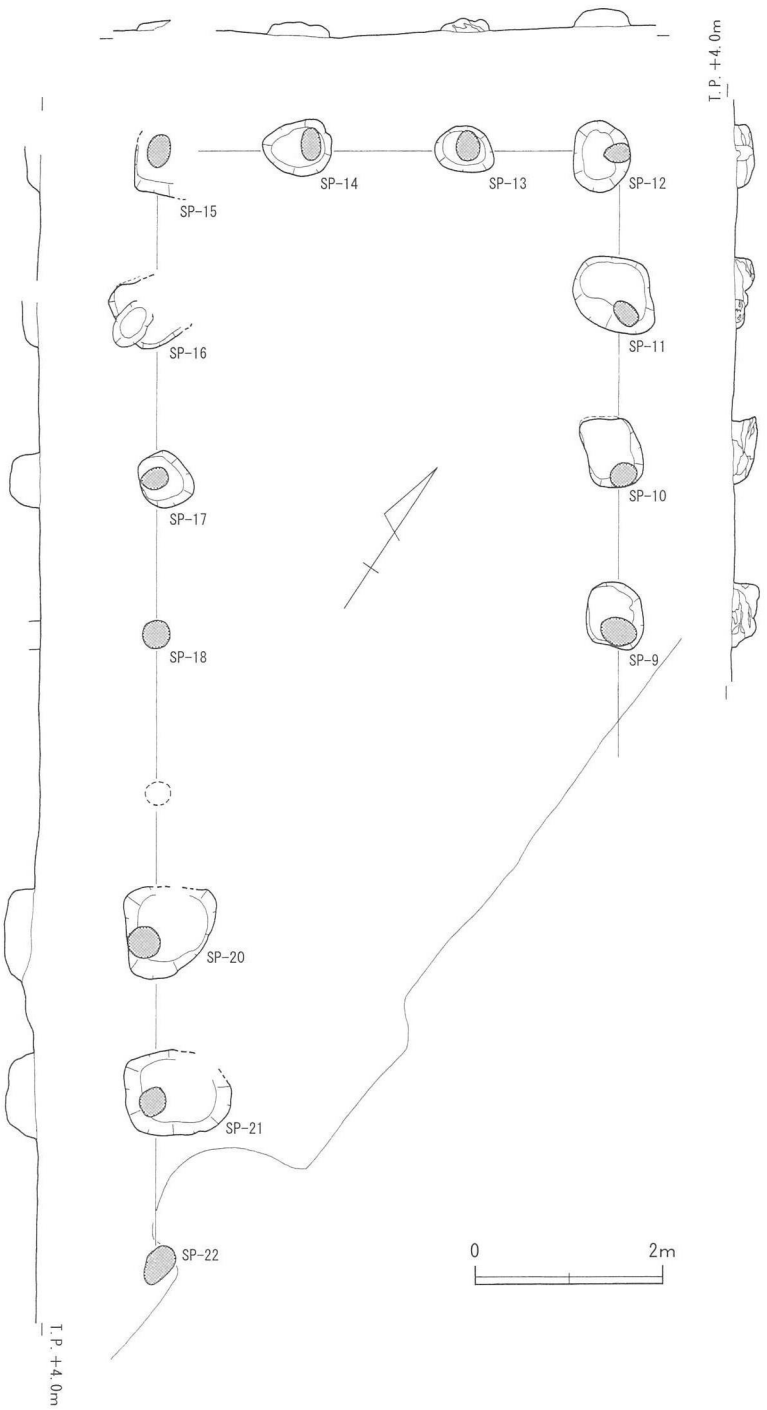
１は須恵器の壺体部から口縁部にかけての破片で、大きさは推定による。灰白色の密な胎土を有し、焼成はやや甘く、外面は回転によるカキメ風の調整、内面は丁寧なナデ調整が行なわれる。２～４は土師器である。２は体部破片とみられるが、板状に近いため大型の長胴甕と推定される。内面は斜め方向の粗いハケ調整、外面はナデ調整が行なわれる。３、４も甕の破片で、とくに３は器壁が厚く、内外ともに粗いハケ調整が行なわれており、古墳時代の土師器とは相当印象を異にする。１～４は７世紀以降の所産とみられる。

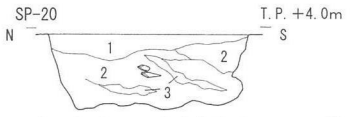
５は土師器の甕破片とみられ、下部は格子目タタキ、上部は回転によるハケ状の痕跡を残し、須恵器技法の導入を認める。６～９は須恵器の甕体部破片で、胎土は密、色調は灰白色～灰黄褐色を呈し、器壁は薄くつくられる。やや甘い焼成のものが目立つが、外面はシャープな平行タタキ、内面は丁寧なナデ調整が行なわれる。これらは５の土師器を含め、第５層出土の須恵器と同様、TK208を前後する時期のものと推定される。10は土師器の鍋もしくは甑の把手とみられる。

遺構の時期は、上の遺物に加え、第５層中から出土した７世紀の遺物、及び建物４との重複関係により、７世紀を中心に８世紀中頃までの時期を想定しておきたい。

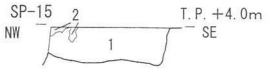
掘立柱建物３　中央部付近で検出した４個の柱穴で、北西－南東に並ぶ３個の柱穴と東壁ぎわで検出した１個の柱穴からなる。南北２間（3.25ｍ）以上、東西１間以上の規模を有する。桁行方位はN-9°20′-Wで、桁行の柱間は1.6ｍ、梁行では1.9ｍを計る。柱穴の直径50～60cm、深さ35cmで、何れも第５層下部において検出した。埋土は第５層と同質の土を主体に第６層の暗灰色細粒砂をブロック状に含む。調査区東壁断面の観察によると、本来の検出面は第５層上面である。

柱穴からの出土遺物として、弥生土器、土師器、須恵器の小片39点があり、須恵器の甕破片では、外面を幅の狭いシャープな平行タタキ、内面を丁寧なナデ調整を行なうものが多く、５世紀中頃から後半の所産とみられる。土師器には外面に粗いハケ調整を施す甕破片があり、７世紀以降に下る可能性もあるが、遺構の時期を特定する根拠に乏しい。

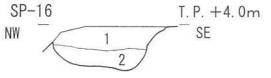




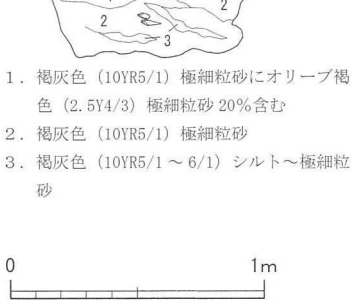
1．褐灰色（10YR5/1）極細粒砂にオリーブ褐色（2.5Y4/3）極細粒砂 20%含む
2．褐灰色（10YR5/1）極細粒砂
3．褐灰色（10YR5/1～6/1）シルト～極細粒砂

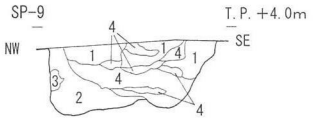


1．黒色（2.5Y2/1）極細～粗粒砂
2．黄色（5Y8/6～8/8）粘土

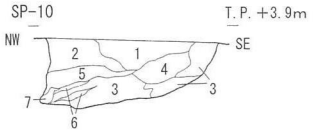


1．黒褐色（10YR3/1）極細～粗粒砂
2．黒褐色（10YR2/1）極細～粗粒砂

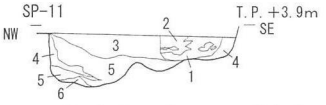




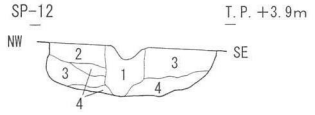
1．褐灰色（7.5YR4/1）極細粒砂に暗褐色（7.5YR3/3）極細粒砂 10%含む
2．褐灰色（7.5YR4/1）シルト～極細粒砂に褐灰色（10YR5/1）極細粒砂 10%含む
3．褐灰色（10YR5/1）シルト～極細粒砂
4．褐灰色（7.5YR4/1～5/1）シルト～極細粒砂



1．黒色（10YR2/1）極細～粗粒砂
2．黒褐色（10YR3/1）極細～粗粒砂
3．黒褐色（10YR3/1）極細～粗粒砂に褐灰色（10YR4/1）極細粒砂 20%含む
4．にぶい黄褐色（10YR5/3）極細～粗粒砂
5．褐灰色（10YR5/1）極細～中粒砂
6．褐灰色（10YR4/1）極細～粗粒砂
7．黄灰色（2.5Y5/1）極細～粗粒砂

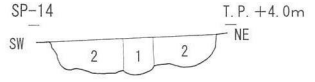


1．オリーブ黒色（5Y2/2）シルト～細粒砂
2．黄色（5Y8/6～8/8）粘土
3．黒色（2.5Y2/1）細粒砂
4．黒褐色（2.5Y3/2）細～中粒砂
5．灰オリーブ色（5Y5/3）中～粗粒砂
6．オリーブ黒（5Y3/2）中粒砂



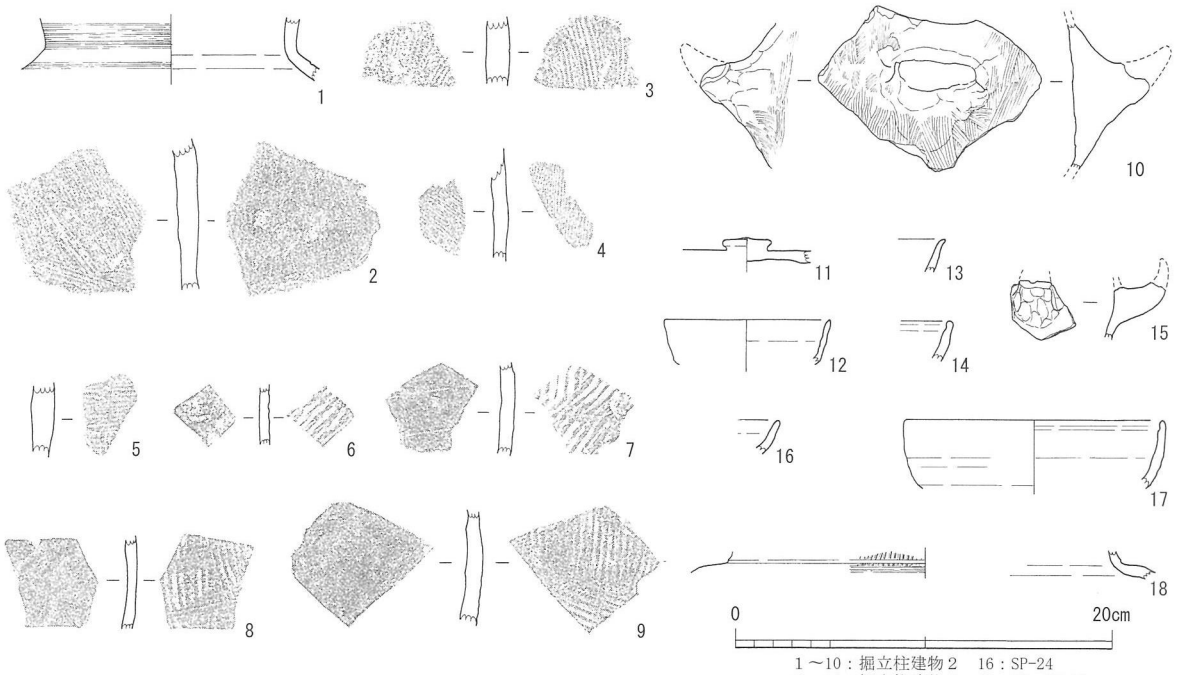
1．黒褐色（10YR3/1）極細～粗粒砂に黄色（2.5Y8/6）粘土ブロック含む
2・4．黒褐色（10YR3/1）極細～粗粒砂に褐灰色（10YR4/1）含む
3．黒色（10YR2/1）極細～粗粒砂

1．黒褐色（7.5YR3/1）極細粒砂に明黄褐色（10YR6/8）粘土ブロック含む
2．黒褐色（7.5YR3/1）極細粒砂に褐灰色（7.5YR5/1）極細粒砂 10%含む
3．黒褐色（7.5YR5/1）極細粒砂に褐灰色（7.5YR5/1）極細粒砂 25%含む



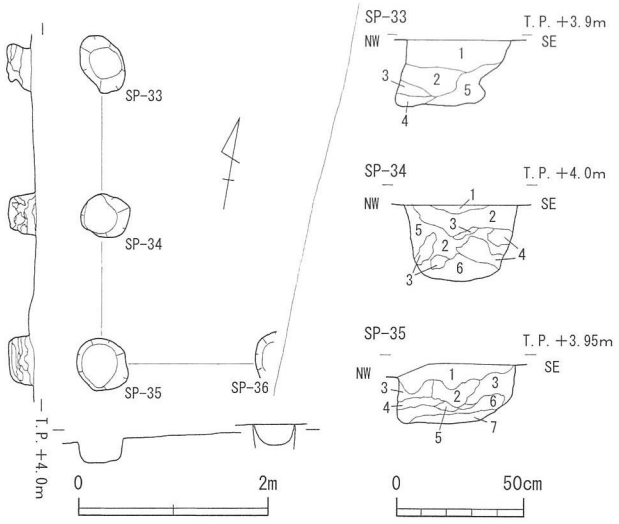
1．黒褐色（10YR3/1）極細～粗粒砂
2．黒色（10YR3/1）極細～粗粒砂

第10図　掘立柱建物２　平面図・断面図（1：80・1：30）



1～10：掘立柱建物２　16：SP-24
11～14：掘立柱建物４　17・18：SP-39
15：SP-53

第 11 図　掘立柱建物・柱穴等　出土遺物（1：4）



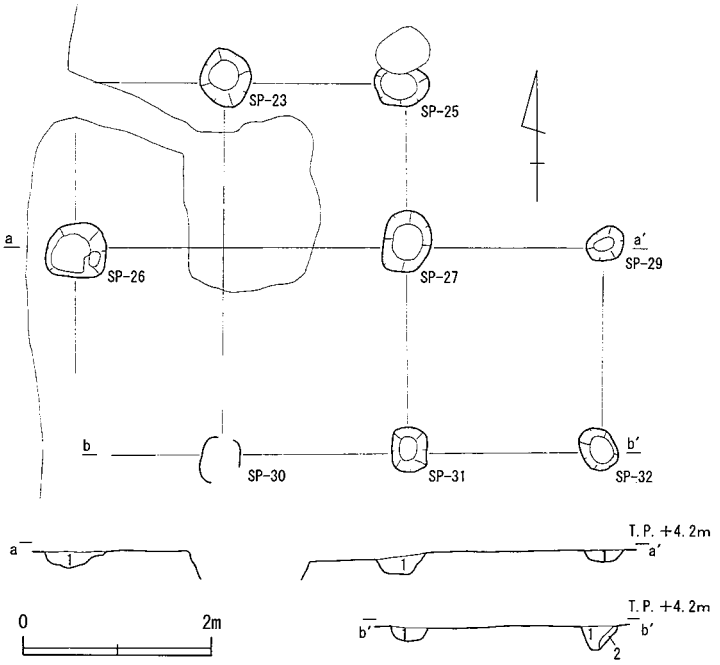
SP-33
1．オリーブ黒色（7.5Y2/2）シルト～細粒砂と灰色（7.5Y4/1）細粒砂が細かな水平ラミナ状に堆積
2．オリーブ黒色（7.5Y2/2）シルト～細粒砂に灰色（7.5Y4/1）細粒砂 15%をラミナ状に含む
3．黒色（7.5Y2/1）粘土～シルト
4．灰（7.5Y4/1）細粒砂に黒色（7.5Y2/1）粘土～シルト 30%含む
5．オリーブ黒色（7.5Y2/2）粘土～細粒砂に灰色（7.5Y4/1）シルト 10%含む

SP-34
1．灰白色（5Y7/2）細～粗粒砂
2．オリーブ黒色（5Y2/2）シルト～細粒砂に灰色（7.5Y5/1）細粒砂 60%含む
3．オリーブ黒色（5Y2/2）シルト～細粒砂に灰色（7.5Y4/1）細粒砂 10%含む
4．オリーブ黒色（5Y2/2）シルト～細粒砂
5．灰～灰白色（7.5Y6/1～7/1）細粒砂にオリーブ黒色（7.5Y3/1）シルト～細粒砂 30%含む
6．５に中～粗粒砂 10%含む

SP-35
1．褐灰色（10YR5/1）極細粒砂に明黄褐色（2.5Y6/6）・オリーブ褐色（2.5Y4/3）極細粒砂を各 10%含む
2．褐灰色（10YR5/1）極細粒砂に褐灰色（10YR6/1）極細粒砂５%含む
3．２と同。ただし褐灰色（10YR6/1）極細粒砂 10%
4．褐灰色（10YR5/1）シルト～極細粒砂
5．４と同。ただし褐灰色（10YR6/1）極細粒砂 10%含む
6．褐灰色(10YR5/1)極細粒砂に褐灰色(10YR6/1)極細粒砂 15%、オリーブ褐色（10YR6/1）極細粒砂５%含む
7．６とほぼ同。中～粗粒砂を含む

第 12 図　掘立柱建物３　平面図・断面図（1：80・1：30）

掘立柱建物４　掘立柱建物２と重複して検出された建物である。東西３間（5.7 m）以上、南北２間（3.96 m）の総柱の建物と見られる。梁行方位は N-1°30′-E で、真北に近い。柱穴の掘形は不整円形もしくは方形志向で、直径もしくは一辺 40 ～ 55cm、深さは 11 ～ 25cm でばらつきが多い。比較的浅いものが多いことから、本来の掘り込み面はより高いレベルにあったと推定される。また北西コーナーなど一部検出できなかった柱穴もある。SP-23 は掘立柱建物２



SP-26a
1．黄灰色（2.5Y5/1）極細粒砂にオリーブ褐色（2.5Y4/4）極細粒砂10%、褐灰色（10YR5/1）極細粒砂15%含む
SP-27
1．黄灰色（2.5Y5/1）極細粒砂に暗オリーブ色（5Y4/3）極細粒砂10%、にぶい黄褐色（10YR4/3）極細粒砂15%含む
SP-29
1．褐灰色（10YR4/1）極細粒砂に褐灰色（10YR5/1）極細粒砂15%、暗褐色（7.5YR3/3）極細粒砂３%含む
SP-31
1．黄灰色（2.5Y5/1）極細粒砂に暗オリーブ色（5Y4/3）極細粒砂25%、にぶい黄褐色（10YR4/3）極細粒砂３%含む
SP-32
1．褐灰色（10YR5/1）極細粒砂にオリーブ褐色（2.5Y4/4）極細粒砂７%、褐色（10YR4/4）極細粒砂２%含む
2．褐灰色（10YR4/1）極細粒砂にオリーブ褐色（2.5Y4/4）極細粒砂７%、褐色（10YR4/4）極細粒砂１%含む

第13図　掘立柱建物４　平面図・断面図（1：80）

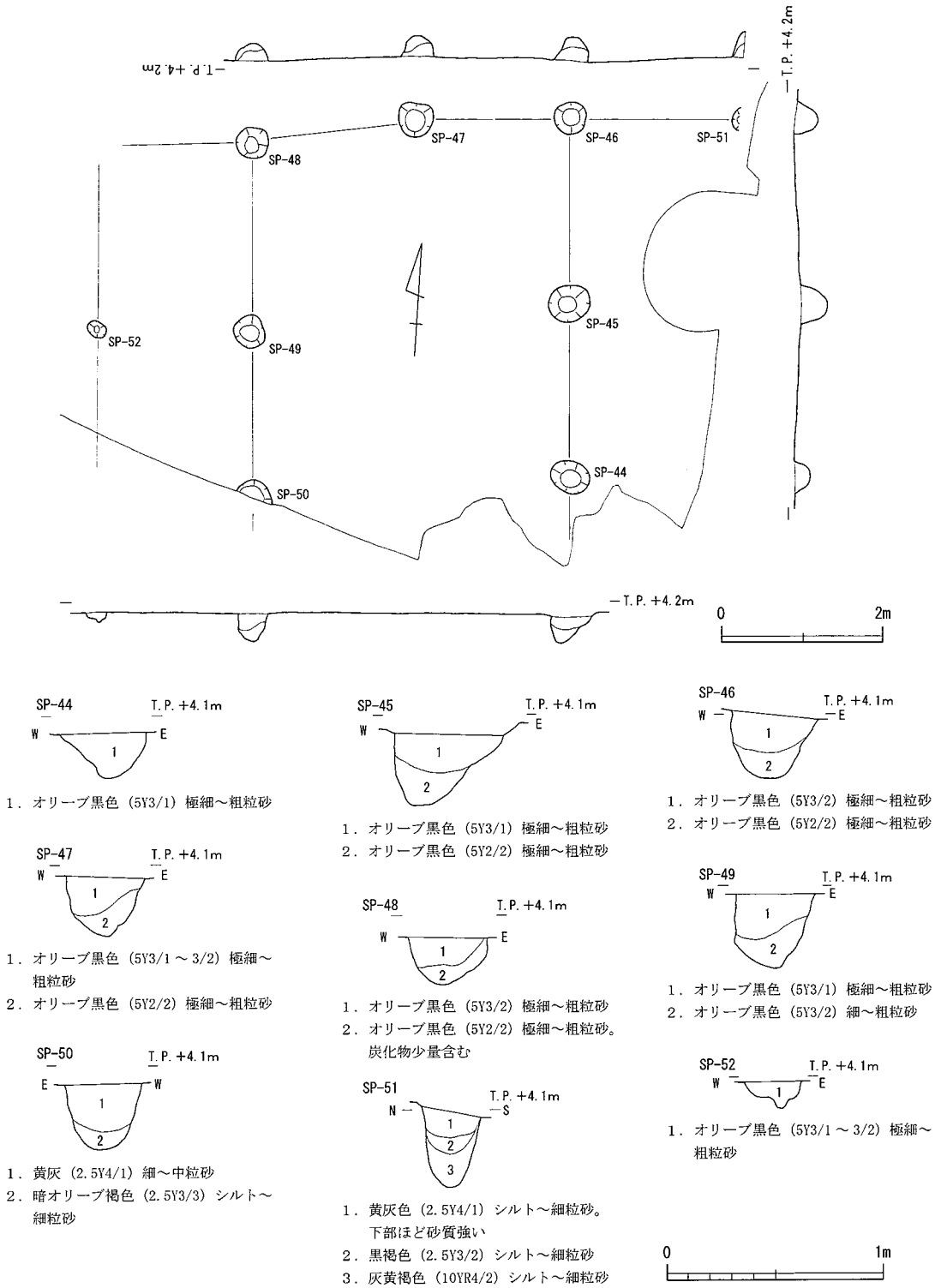
のSP-14と重複し、明らかに掘立柱建物４が掘立柱建物２より新しいと判断できる。

柱穴から出土した遺物として須恵器杯、土師器杯の破片がある（第11図11～14）。11はSP-26から出土した須恵器杯蓋で、水平な天井部に低平な宝珠形のつまみが付く。12～14はSP-27から出土した。12は須恵器の杯（杯G）とみられ、推定口径約８cm、内外ともに回転ナデ調整による。13は土師器の杯で、精良な胎土でにぶい橙色を呈し、口縁端部はわずかに開く。14は土師器の杯で、やや粗い胎土で橙色を呈し、口縁端部内面ににぶい凹線を巡らす。11の杯蓋をはじめ、いずれも８世紀の所産である。

掘立柱建物５　調査区南端で検出した東西２間（3.94 m）、南北２間（4.4 m）以上の規模を持つ建物である。東壁にかかるピットや西側の小ピットを庇の一部とすれば、最大東西４間の両面庇の付いた建物が復元できる。柱間は東西2.0 m、南北2.2～2.4 mを計り、南北方位はN-3°45′-Wである。柱穴は直径40～50cm、深さ35～46cmで、埋土は第４層と同質のオリーブ黒色（5Y3/1）細粒砂を基本とする。溝１や溝３とともに、第５層上面において最も明瞭に検出できた遺構である。溝１や溝３と重複するが、いずれの柱穴も溝の完掘後に検出していることから、溝の方が新しい可能性が高い。

第15図１～４はSP-44から出土した。１は土師器の皿で、精良な胎土で灰白色を呈し、推定径9.8cmを計る。いわゆる「て」字状口縁を有するもので、口縁端部は上方に短くつまみ上げ、端部外面に細い凹線が入る。口縁部内外はヨコナデ、内面は丁寧なナデ、外面はナデを施す。２は浅い椀で口径13.6cm、細粒砂をやや多く含む胎土で淡い橙色を呈する。口縁部に横方向の強いナデを行なうことで体部との境界に段を生じる。口縁端部内面は浅くくぼませ、端部はシャープに仕上げる。口縁部内外はヨコナデ、体部内面は丁寧なナデ、外面は指頭成形のままの雑な仕上げとなっている。３は土師器の高台付椀とみられ、精良な胎土で灰黄色を呈し、推定口径16.8cmを計る。口縁部外面に強いヨコナデを行なうことにより体部との境界に段が生

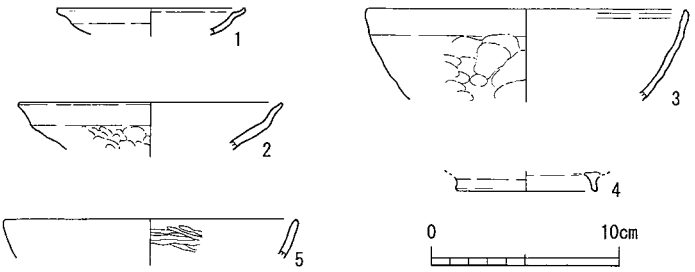
じている。体部外面は指頭成形のままの凹凸を残し、内面は上部をヨコナデ、下半はナデ調整を行なう。４は土師器の高台で、底径7.3cm、高台の高さ0.8cmを計る。胎土は精良で、淡い赤褐色を呈する。５はSP-50から出土した。黒色土器A類の口縁部で、推定口径15.4cm。胎土に１mm以下の砂粒を含むが全体として精良で、色調は外面は灰黄色、内面は黒褐色を呈する。



第14図　掘立柱建物５　平面図・断面図（1：80・1：30）

外面はナデ、内面はミガキを行い、光沢を発する。

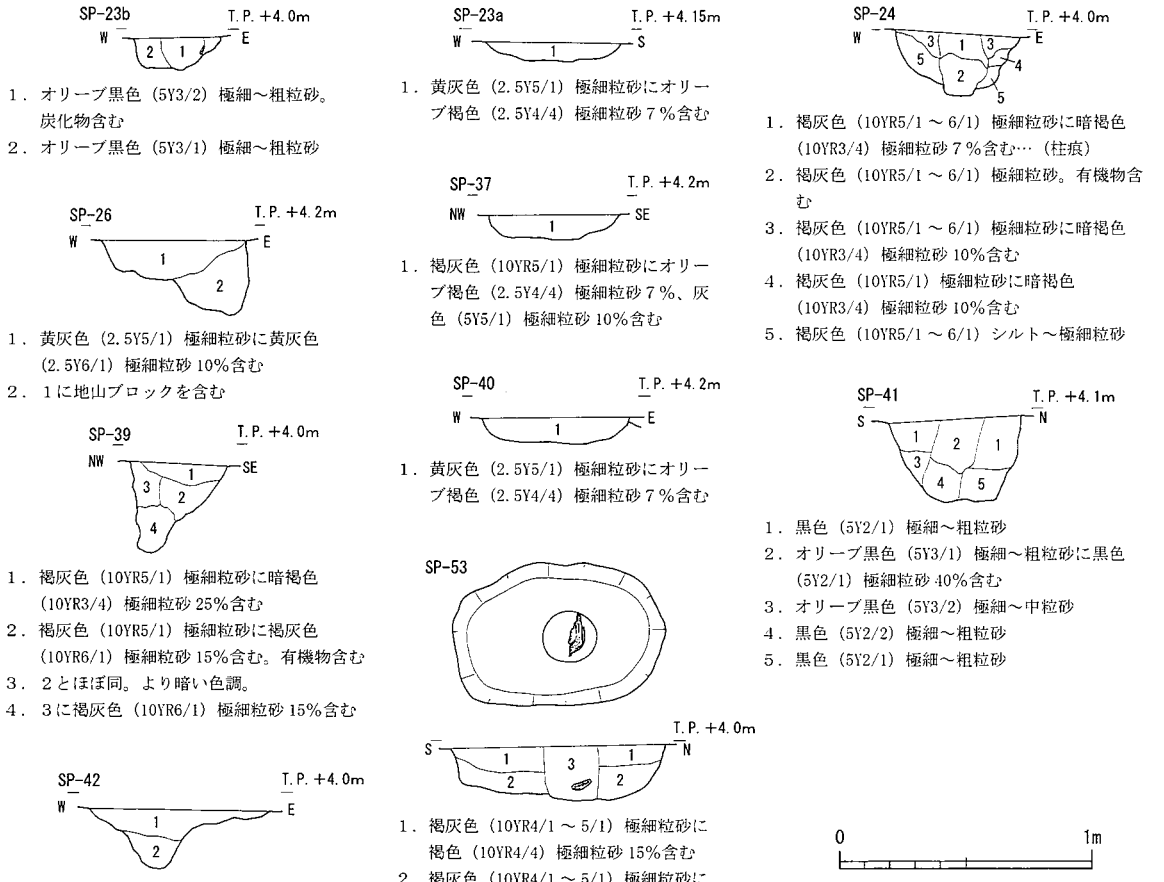
以上の遺物は、「て」字状口縁の早い段階のものを含むこと、土師器椀や高台の形状などから10世紀の所産とみられる。



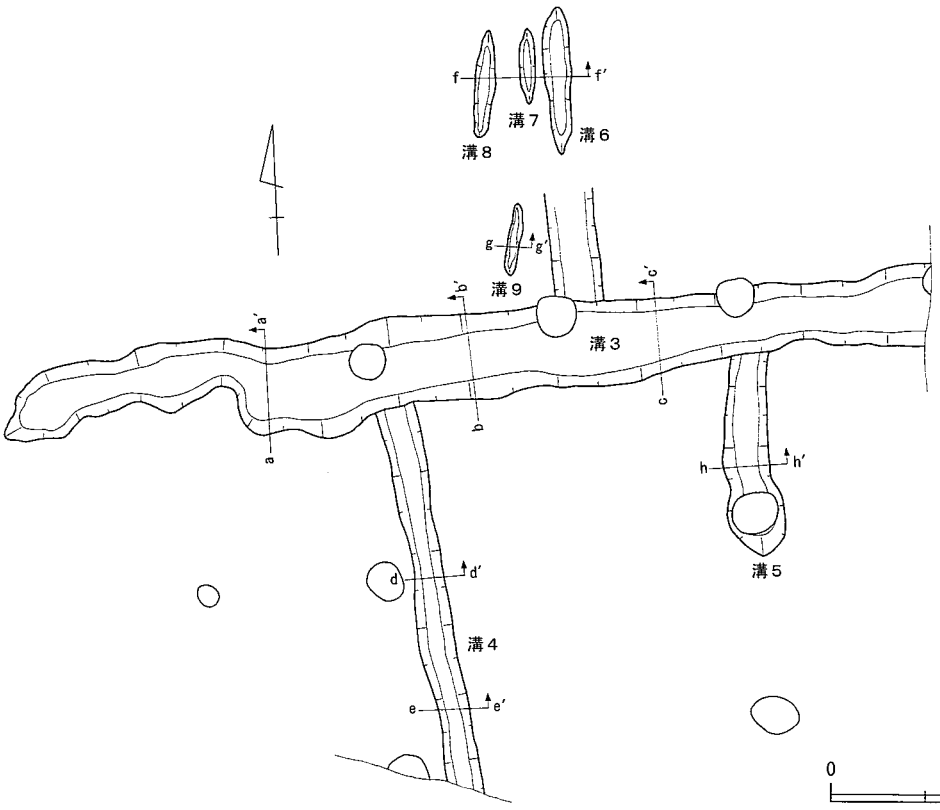
第15図　掘立柱建物５　出土遺物（1：4）

溝１　調査区東側を南北にはしる溝で、幅1.1～1.7ｍ、検出した深さ５cm前後を計測する。中央付近で一旦途切れるが、SP-45と重複する南側の溝５も位置関係から溝１の延長部である可能性が高い。検出した長さ14.4ｍ、走行方位はN-0°50′-Eで、掘立柱建物３と同様、ほぼ真北方向である。溝の断面形状は緩やかな弧状を示し、第４層と同質の灰オリーブ色（5Y4/2）細粒砂を埋土とする。最も新しい掘立柱建物５の柱穴の残存深度が浅い点を勘案すると、耕作にともなう削平や撹乱が、第５層上部に相当程度及んだものとみられる。このことは、第４層中に第５層と同様の遺物を多量に含むこととも符合する。

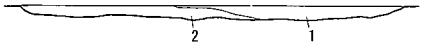
溝１からの出土遺物は極めて少ない。７世紀以前の土器片が散見されるが、いずれも細片で、管状土錘が実測できた唯一のものである（第18図１）。灰黄色の精良な胎土を有し、直径2.8cm、



第16図　柱穴・ピット　断面図（1：30）



溝1　a-a′ 断面（第9図）　T.P.+4.3m

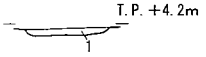


1．褐灰色（10YR5/1）極細粒砂に褐色（7.5YR4/6）極細粒砂10%含む
2．褐灰色（10YR5/1）極細粒砂に褐色（7.5YR4/6）極細粒砂30%斑状に含む

溝1　SP-28　b-b′ 断面（第9図）　T.P.+4.2m

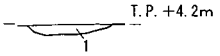
1．黄灰色（2.5Y5/1）極細粒砂にオリーブ褐色（2.5Y4/3）極細粒砂10%含む
2．黄灰色（2.5Y5/1）極細粒砂にオリーブ褐色（2.5Y4/3）極細粒砂25%含む

溝2　c-c′ 断面（第9図）　T.P.+4.2m



1．褐灰色（10YR4/1）極細粒砂にオリーブ褐色（2.5Y4/4）2%含む

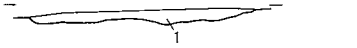
溝2　d-d′ 断面（第9図）　T.P.+4.2m



1．褐灰色（10YR4/1）極細粒砂にオリーブ褐色（2.5Y4/4）2%含む

0　1m

溝3　a-a′ 断面　T.P.+4.1m



1．灰オリーブ色（5Y4/2）極細～粗粒砂

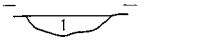
溝3　b-b′ 断面　T.P.+4.1m

1．褐灰色（10YR5/1）極細粒砂に黄褐色（10YR5/6）極細粒砂3%含む

溝3　c-c′ 断面　T.P.+4.1m

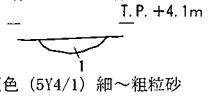
1．黄灰色（2.5Y4/1）極細粒砂に黒褐色（2.5Y3/1）極細粒砂10%含む

溝4　d-d′ 断面　T.P.+4.1m



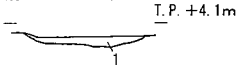
1．灰色（5Y4/1）細～粗粒砂

溝4　e-e′ 断面　T.P.+4.1m



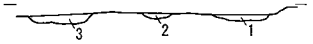
1．灰色（5Y4/1）細～粗粒砂

溝5　h-h′ 断面　T.P.+4.1m



1．オリーブ黒色（5Y3/2）極細～粗粒砂

溝6、7、8　f-f′ 断面　T.P.+4.2m



1．灰色（7.5Y5/1）極細粒砂に褐色（10YR4/5）極細粒砂15%含む
2．灰色（7.5Y5/1）極細粒砂に褐色（10YR4/6）極細粒砂25%含む
3．灰色（7.5Y5/1）極細粒砂に暗オリーブ色（5Y4/3）極細粒砂7%含む

溝9　g-g′ 断面　T.P.+4.1m

1．黄灰色（2.5Y5/1）極細粒砂に褐色（7.5YR4/6）極細粒砂2%含む

第17図　溝　平面図・断面図（1：80・1：30）

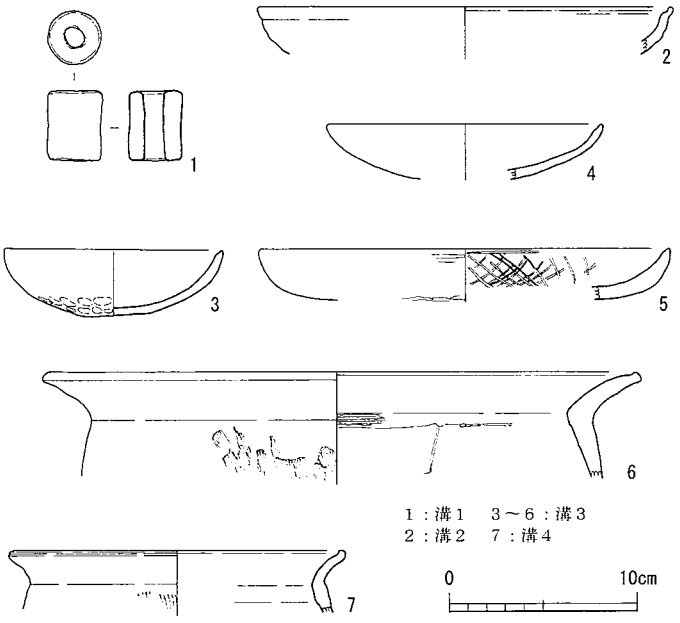
長さ 3.65cm、径約 1 cm の孔をもつ。古墳時代以前の紡錘形のものとは異なり、非常に丁寧なつくりで、7 世紀以降の所産とみられる。したがって遺物から遺構の時期を特定することは難しいが、重複する掘立柱建物 5 が 10 世紀と推定されることから、建物の廃絶後、おそらく 11 世紀以降に掘り込まれた溝である可能性が高い。条里に関連するものであることはほぼ明らかで、その規模から水路もしくは耕作地の区画を目的としたものと推定される。なお、当溝は南方に位置する第 3 次調査地点東部で検出した南北溝につながる可能性が高い。

溝 2　溝 1 と平行にはしる同時期とみられる溝で、幅 30 ～ 40cm、深さ 5 cm、検出した長さ 3.1 m を計る。溝 1 が水路もしくは耕地区画を目的としたものであるのに対し、当遺構及び溝 6 ～ 8 は、鋤溝など直接的な耕作の痕跡と推定される。埋土は溝 1 と同様、第 4 層とほぼ同質である。

第 18 図 2 は土師器の杯で、推定口径 21.6cm、精良な胎土を有し淡い橙色を呈する。口縁部はやや外反し、端部内面に 1 条の凹線を巡らして明瞭な段をつくる。内外ともにヨコナデを行い、内面に暗文は認められない。8 世紀の所産であり混入品とみられる。

溝 3　調査区南部を東西にはしる溝で、幅 50 ～ 90cm、検出長 4.9 m、深さ 5 cm 前後、走行方位は N-84°50′-E である。断面形状は緩い弧状を示し、他の溝と同様、第 4 層と同質の土を埋土とする。掘立柱建物 5 の北側柱穴列と重複するが、耕作に伴う溝と推定する。西端部は調査区内で途切れ、西壁断面において溝 3 を検出できなかったことから、溝 3 掘削以後の耕作による削平が当遺構の一部を消滅させる程度にまで及んでいたことが確認できる。遺構の時期は、掘立柱建物 5 の廃絶直後から溝 1 の掘削まで、10 世紀後半～ 11 世紀と推定される。

溝 3 の出土遺物として、土師器の杯、高杯、甕がある（第 18 図 3 ～ 6）。3 の杯は、口径 11.4cm、器高 3.5cm。精良な胎土を有し、浅黄橙色の色調を呈する。体部は丸く、口縁端部内面に内傾する面をもつ。口縁部外面から内面はヨコナデ、底部外面は指頭による成形痕をとどめる。無文の簡素なつくりである。4 は高杯の杯部で、推定口径 14.4cm。精良な胎土で淡い橙色を呈する。直線的に開く体部から口縁部がやや内弯して伸び、端部は丸くおさめる。口縁部内外はヨコナデ、その他をナデで丁寧に調整する。3 と同様、暗文はない。5 は皿で、推定口径 21.5cm、器高 2.7cm を計り、器壁は 0.9cm の厚さがある。胎土に細粒砂をやや多く含み、色調はにぶい橙色を呈する。内外ともに丁寧なナデが行なわれ、内面には格



第 18 図　溝 1 ～ 4　出土遺物（1：4）

子状の暗文が施される。６は甕で、推定口径31.6cm、浅黄橙色の色調を呈する。張りのない体部から口縁部が屈曲して開き、口縁端部にはヨコナデによる面をつくる。体部外面は細かいハケ、内面はハケもしくは板ナデによる調整を行なう。３、４は７世紀、５、６も８世紀以前の所産とみられ、いずれも混入品である。

溝４　溝３とほぼ直交して走る溝で、幅30～40cm、検出長４ｍ、深さ５cmを計る。断面は緩い弧状を呈し、埋土は第４層とほぼ同質である。走行方位はN-8°45′-Wで、検出した溝の中では走行方位が最も大きく西に振る。耕作に伴う溝と推定する。

第18図７は土師器の甕で、推定口径17.2cm。張りの弱い体部から口縁部が丸く外反して開く。口縁端部内面には段を有する。外面にタテ位のハケ、それ以外はナデ、ヨコナデによる。７～８世紀の所産で、混入品とみられる。

（２）第５層下部～第６層上面の遺構・遺物

ここでは第５層下部および第６層上面で検出した遺構を取り上げる。前項で述べたとおり、第５層下部以下で検出した遺構のうち、明らかに７世紀以降の遺物を含む遺構はすでに第５層上面の遺構として取り上げた。

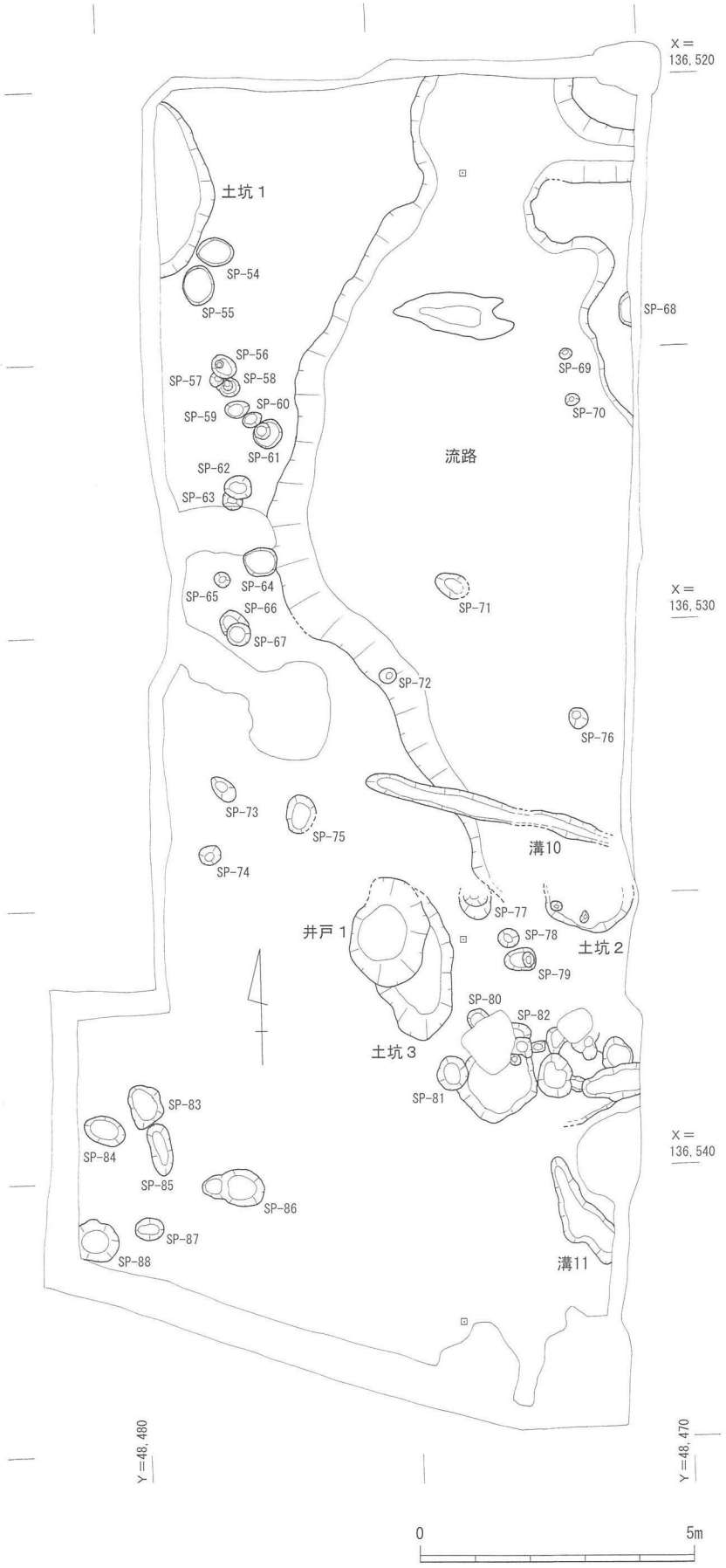
検出した遺構として柱穴、ピット、井戸、土坑、流路、溝などがある。時期的には、概ね弥生時代～古墳時代中期に相当する。

柱穴・ピット　柱穴、ピットは約40個を検出した。規模は直径20～80cm、深さは40cm未満のものが多い。規模、形状、埋土、出土遺物等において特段の留意点はないが、柱痕が確認できたSP-61、埋土中から敲石が出土したSP-64などが注意を引く程度である。ただSP-61を含む調査区北西部のピット群は、規模、断面形状ともに柱穴として遜色ないものが多く、かつ古墳時代中期の土師器、須恵器、製塩土器などを伴うものが散見されることから、同時代の建物遺構が調査区から西方に向かって展開している可能性が高い。

ピットから出土した遺物のうち、図示できたものとしてSP-58出土の土師器甕の口縁部（第24図１）がある。推定口径21.5cmで、端部は内側に肥厚して内傾する面をなし、明瞭な段をつくる。第５層の須恵器と同じ古墳時代中期の所産とみられる。

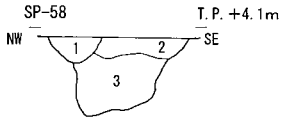
井戸１　第１区中央付近で検出した素掘りの井戸である。東西1.5ｍ、南北2.0ｍの楕円形を呈し、深さ１ｍで断面Ｕ字状を呈する。埋土は大きく２層に分かれ、下層の堆積後、多量の遺物が一括廃棄されていた。土坑３及び掘立柱建物２の柱穴SP-18と重複し、何れの遺構にも先行する。

井戸１からは弥生時代後期後半～終末期の特徴を有する多くの遺物が出土した（第22・23図１～57）。２、13、52の他はすべて上層の廃棄土器である。１～５は広口壺の口頸部である。１は口径18.3cm、２は19.8cm、３は推定口径13.2cmで、いずれも口縁部が大きく外反して開き、端部は面もしくは凹面をなす。１、２は口縁部外面にタタキの痕跡がみられ、いずれも内面は

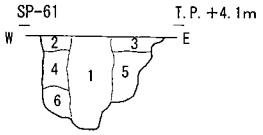


第19図　第５層下部～第６層上面遺構平面図（1：120）

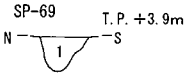
1．オリーブ黒色（5Y3/1）極細～粗粒砂



1．オリーブ黒色（5Y3/2）極細～粗粒砂
2．オリーブ黒色（5Y3/1）極細～粗粒砂。炭化物含む
3．オリーブ黒色（5Y2/2）極細～粗粒砂。中央付近に地山ブロック多く含む

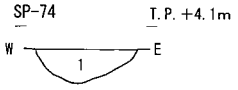


1．褐灰色（10YR4/1）極細粒砂に黒褐色（10YR3/1）極細粒砂50%含む…（柱痕）
2．褐灰色（10YR4/1）極細粒砂に明黄褐色（2.5Y6/6）極細粒砂25%含む
3．褐灰色（10YR4/1）極細粒砂に暗褐色（10YR3/4）極細粒砂15%含む
4．２に明黄褐色（2.5Y6/8）粘土ブロック20%含む
5．３とほぼ同
6．５とほぼ同。粘質が強い。

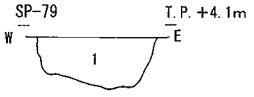


1．黒褐色（2.5Y3/1）シルト～細粒砂

1．黒色（5Y2/1）極細～粗粒砂

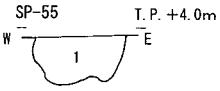


1．黄灰色（2.5Y4/1）極細～粗粒砂

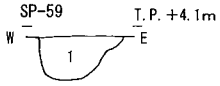


1．褐灰色（10YR4/1）極細粒砂に暗オリーブ色（5Y4/3）極細粒砂７%、褐灰色（10YR6/1）極細粒砂10%含む

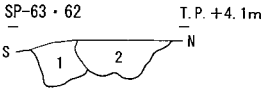
1．黒色（2.5Y2/1）極細～粗粒砂



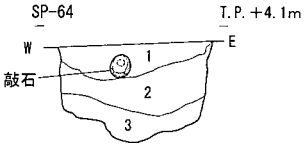
1．黒褐色（5YR2/1）極細～粗粒砂



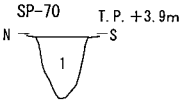
1．褐灰色（10YR4/1～5/1）極細粒砂に暗褐色（10YR3/4）極細粒砂10%含む



1．褐灰色（10YR5/1～6/1）シルト～極細粒砂に暗褐色（10YR3/3）極細粒砂３%含む
2．褐灰色（10YR6/1）シルト～粗粒砂

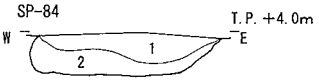


1．褐灰色（10YR4/1）極細粒砂に暗褐色（10YR3/4）極細粒砂15%含む。敲石混入
2．褐灰色（10YR4/1）極細粒砂に暗褐色（10YR3/4）極細粒砂10%含む。有機物含む
3．褐灰色（10YR4/1）極細粒砂に黄灰色（2.5Y5/1）極細粒砂７%含む

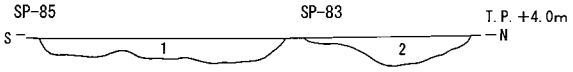


1．黒褐色（2.5Y3/1）シルト～細粒砂。下部ほど粘質強い

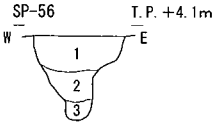
1．黒褐色（10YR3/2）極細～粗粒砂。炭化物含む



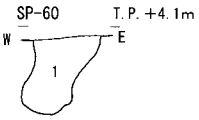
1．黒褐色（2.5Y3/1）極細～粗粒砂
2．黒褐色（2.5Y3/1）極細～粗粒砂に黒褐色（2.5Y3/2）極細～粗粒砂40%含む



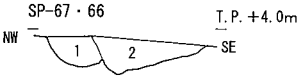
1．オリーブ黒色（5Y3/1）極細～粗粒砂
2．黒褐色（7.5YR2/2）極細～粗粒砂



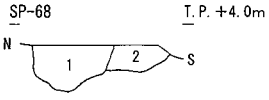
1．オリーブ黒色（5Y3/1）極細～粗粒砂。炭化物含む
2．オリーブ黒色（5Y2/2）極細～粗粒砂
3．黒色（5Y2/1）極細～粗粒砂



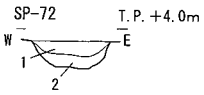
1．褐灰色（10YR4/1～5/1）極細粒砂に暗褐色（10YR3/4）極細粒砂10%含む



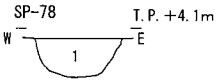
1．オリーブ黒色（5Y3/1）極細～粗粒砂
2．黒色（5Y2/1）シルト～粗粒砂



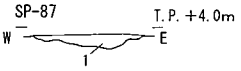
1．オリーブ黒（5Y2/2）シルト。下部ほど細～中粒砂多い
2．オリーブ黒（5Y3/2）シルト



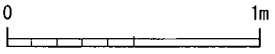
1．褐灰色（10YR4/1～5/1）極細粒砂に暗褐色（10YR3/4）極細粒砂10%含む
2．褐灰色（10YR4/1～5/1）極細粒砂に褐灰色（10YR5/1）極細粒砂40%含む



1．褐灰色（10YR4/1）極細粒砂に暗褐色（10YR3/3）極細粒砂10%、褐灰色（10YR6/1）極細粒砂15%含む



1．灰色（5Y4/1）極細～粗粒砂にオリーブ黒色（5Y3/1 ）極細～粗粒砂50%含む



第20図　柱穴・ピット　断面図（1：30）

ハケにより調整する。１、２は灰白色、３は浅黄橙の色調を呈し、ほぼ直立する頸部から口縁部が外反する。４は推定口径 17.4cm で、外反する頸部から口縁部が鈍く屈曲して立ち上がり、端部はまるくおさめる。外面はハケ、頸部内面は横方向の丁寧なミガキが施される。５は口径 20cm で、口縁部が大きく外反し、上下に拡張した端面には幅が不揃いの５条の凹線を巡らす。頸部外面は縦方向のミガキ、内面は横方向の丁寧なミガキを施す。

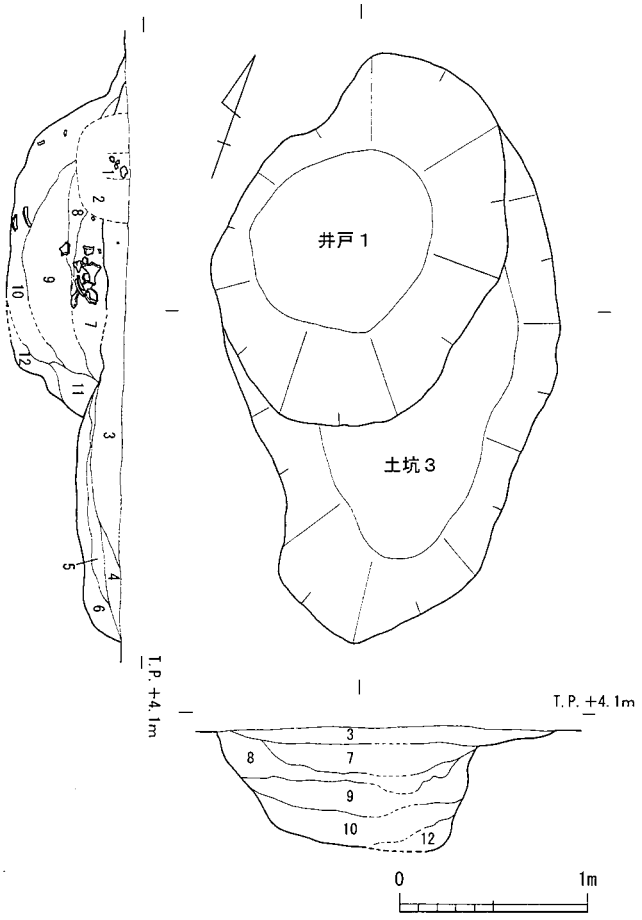
６～８は二重口縁壺の口縁部及び頸部である。６は口径 23cm、口縁部の稜は明瞭で、口縁端部は外傾する面をなす。口縁部外面はハケののちミガキを行なう。７は頸部径 8.3cm で、やや内傾気味に直立する頸部から大きく屈曲して開く口縁部をもつ。外面は丁寧なミガキ、内面もミガキの痕跡を残す。８はやや内傾気味に直立する頸部をもち、頸部径 11.9cm、短く屈曲して開く口縁部から、さらに上部が緩やかに屈曲して外反するとみられる。内外ともにミガキが施される。

９は小形の壺で、口径 4.6cm、器高 7.7cm。体部中位に最大径があり、短く外反する口縁部をもち、底部は小さな平底をなす。

10 ～ 13 は壺の底部とみられる。何れも突出度が高く、上げ底につくられる。外面はナデもしくはミガキ、内面もナデかミガキを行なう。図示した底部は全て灰白色の色調を呈する。

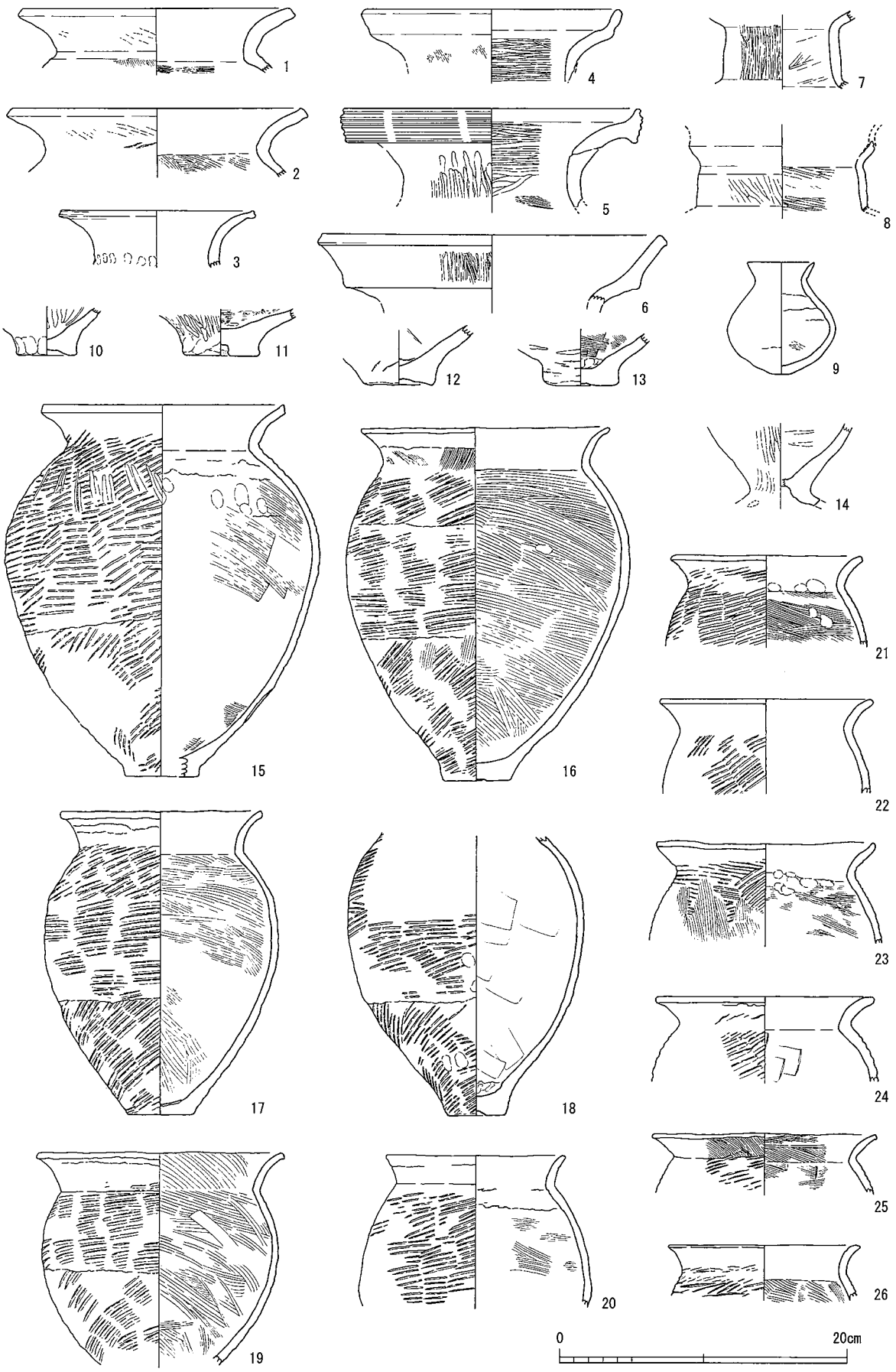
14 は台付壺で、直線的にすぼまる体部下半からハ字に広がる脚部を有する。体部外面は縦方向のミガキ、内面も一部ミガキの痕跡を残す。脚部には３方程度の透かし孔を開ける。

15 ～ 37 は甕である。おおむね大・中・小の３種に分類できる。大型のものは口径 16 ～ 17cm、器高 24 ～ 26cm（15、16）、中型のものは口径 14 ～ 15cm（19 ～ 25、30）、小型のものは口径 12 ～ 13cm（26、29、30 ～ 32）である。形態の特徴としては、まず完形に近い



1．明黄褐色（10YR7/6）粘土～極細粒砂を小ブロック状に含む。SP-18（建物２）の柱痕部分
2．SP-18 の掘形。３との識別困難
3．褐灰色（10YR5/1 ～ 6/1）極細粒砂に暗褐色（10YR3/3）極細粒砂 20%含む。
4．褐灰色（10YR4/1）極細～中粒砂。４～６須恵器片含む。
5．黒褐色（10YR2/2）極細～中粒砂
6．黒褐色（7.5YR2/1）極細～中粒砂
7．褐灰色（10YR5/1 ～ 6/1）シルト～極細粒砂に暗褐色（10YR3/3）極細粒砂７%含む。廃棄土器多量に含む
8．褐灰色（10YR5/1 ～ 6/1）シルト～極細粒砂に暗褐色（10YR3/3）極細粒砂 10%含む
9．褐灰色（10YR5/1）シルト～極細粒砂に暗褐色（10YR3/3）極細粒砂５%　褐灰色（10YR6/1）極細粒砂 10%含む　小礫極少量含む
10．褐灰色（10YR5/1）粘土～極細粒砂に褐灰色（10YR6/1）極細粒砂 20%ブロック状に含む
11．９とほぼ同。ただしオリーブ褐色（2.5Y4/3）極細粒砂３%含む
12．褐灰色（7.5YR5/1）シルト～極細粒砂に黒褐色（7.5YR3/1）極細粒砂５%含む

第 21 図　井戸１・土坑３　平面図・断面図（1：40）



第22図　井戸１　出土遺物１（1：4）

15 ～ 18 が、いずれも口径に対し器高が高く、最大径が体部上半にあり、形態的にはやや古い様相を残す。これに対し 19、20 は、体部が丸みを帯び、口径に対し器高が低いといった特徴をもち、新しい要素といえる。口縁部形態は、体部から屈曲して外反し、端部を丸くおさめるものが大半を占めるが、その他、端部をやや上方につまみ上げ、外傾する端面をもつもの（15、27）がある。以上の甕は、いずれも外面を粗いタタキ、内面はハケもしくは板ナデ、ナデにより調整される。ただし、16、23、25 は口縁部外面及び体部外面の一部にハケ調整が認められ、ハケの多用傾向も新しい要素である。

以上は伝統的弥生後期型甕の系譜上のものであるが、これ以外に、体部から口縁部がくの字に屈曲して直線的に開き、口縁端部をつまみ上げて垂直の面をなすもの（28）が目を引く。体部形態は不明ながら庄内甕の影響も考慮すべきであろうか。33 ～ 37 は口縁端部を上方に引き伸ばし、外側に強いナデによる凹面をなす、有段もしくは受口状の口縁を有するものである。バリエーションがみられるが、強いて言えば 37 は瀬戸内系、33、34 は北近畿に多い形態とみられ、35、36 などただちに系譜を明確にできないものもある。

38 ～ 41 は甕もしくは鉢の底部で、平底、上げ底のものがある。外面は粗いタタキ、内面はハケによるが、40、41 など掻き上げ風の調整を認めるものがある。

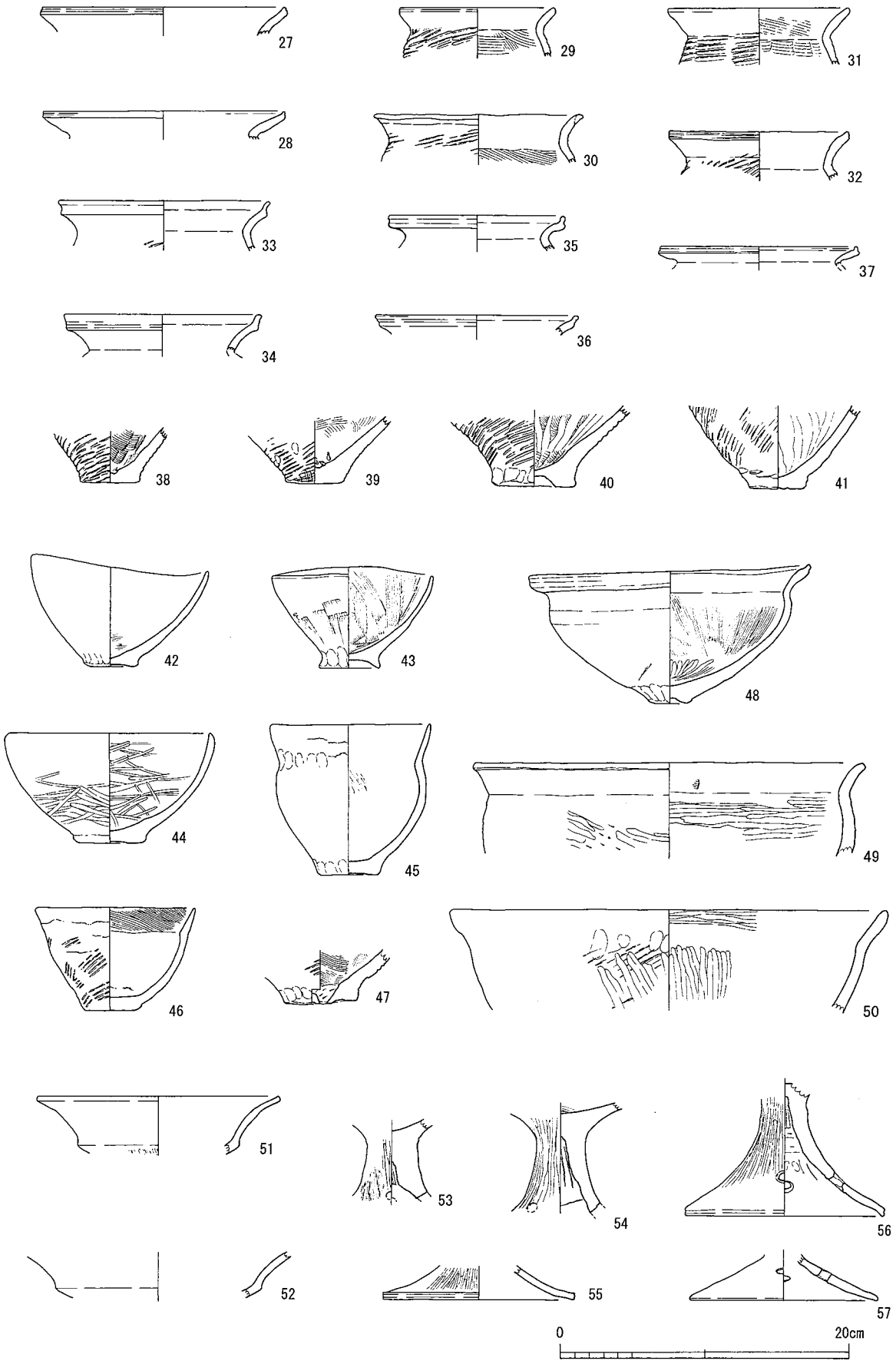
42 ～ 50 は鉢である。大きさにより大・中・小の３種があり、口縁部の有無・形態においても個体差がみられる。小型の鉢（42 ～ 46）は口径 11.9 ～ 13.8cm、器高 7 ～ 10.4cm を計る。42 ～ 44 は平底もしくは上げ底の底部に半球状の体部をもち、口縁部は体部から内弯したまま丸くおさめる。内外面ともナデ、ハケを基本とするが、42 のようにミガキによる調整を行なうものがある。45、46 は底部に半球状の体部をもち、口縁部が外反する。48 は中型の鉢で、口径 19.4cm、器高 9.6cm。上げ底状の底部に半球状の体部をもち、体部上半で一旦すぼまり口縁部が強く外反する。口縁端部は小さくつまみ上げ、端面はわずかに凹線状にくぼむ。外面はハケのちナデ、内面はハケで調整し、底部付近にのみミガキを行なう。49、50 は大型の鉢で、49 の口径 26.6cm、50 の推定口径 29.4cm。体部の形状、口縁部の外反の程度など異なるが、いずれの内外ともに丁寧なミガキが施されている。

51、52 は高杯の杯部である。51 は口径 16.6cm、52 は推定口径 19cm で、いずれも体部と口縁部を分ける稜は明瞭で、丸い体部から口縁部が大きく外反する形態をもつ。53 ～ 57 は高杯の脚部で、脚柱部が中空のものが多い反面、53 のように中実に近いものもある。外面には細かいミガキを行ない、透かし孔を伴う。これらの高杯は庄内式古相併行期に比較的多い形態とみられる。51、52 の杯部はそれぞれ上層、下層から出土したが、大きな型式差は認められない。

井戸１から出土した土器の編年的な位置について再度整理すると、タタキ甕に対するハケの多用傾向、甕口縁部破片の一部に庄内甕に類似する特徴を認めるものがあること、有稜高杯の形態などから、弥生時代終末期古相（庄内式期古相）に位置づけることが可能とみられる。

また、甕の口縁部に北近畿などの影響が看取されるものがあり、近年、豊中市域においても蛍池西、利倉西、服部、小曽根など後期後半～終末期の主要な集落遺跡で確認されている。猪名川、園部川などを介した豊中地域と北近畿地域との交流の実態を窺わせる。

なお、壺の色調において白色系のもの（１、２、４、10 ～ 12）と橙系（左記以外）の二種



第 23 図　井戸１　出土遺物２（1：4）

の存在が指摘できる。白壺、赤壺とも称すべきものであり、土器が有する機能差を示す可能性もあり、今後、他集落出土土器についても見直しが必要である。

後期型甕の器面にみられる特殊な状況について

16、17、19の土器表面において興味深い点が観察されたのでここで触れておきたい。これらの土器のタタキの痕跡は、メリハリに乏しく一見風化を受けたような質感をともなう。いわば表面が荒れたような印象である。仔細に観察すると、タタキの凹凸とは別に、径0.5～4㎜の細かな凹凸が重複して認められ、結果的にこれらがタタキのシャープさを打ち消している。また、凹部にはいくつかの特徴的な形が見出され、タタキと一体となって繰り返されている状況が看取される。つまり、成形後の器面の荒れなどではなく、タタキ原体そのものに、凹部とは逆の凸部（雄型）が存在したことを示している。この細かな凹凸の成因については現時点では不明であるが、一見、小石や砂粒のような質感をもつ。そして、この特徴ある凹凸の繰り返しを追うことでタタキの単位を把握することが可能となる。

さて、16、17はタタキの方向や内面の粘土紐継ぎ目から大きく３分割の成形が想定されるが、上述のタタキは上２段に限られ、最下段は通有のタタキである。つまり、これらの甕を成形するに際し使用したタタキ原体は２種存在し、異なるタタキ原体を使用する二人の製作者がこれらの土器の製作に関わっていた可能性が高い。やや小ぶりの19についても、同じ特徴を有するタタキが認められるが、体部全体に及んでおり、一人の製作者を想定できる。以上のように、タタキ原体の特徴を把握することで、弥生後期型甕の分割成形には、複数の製作者が関わる場合があったことを指摘できる。

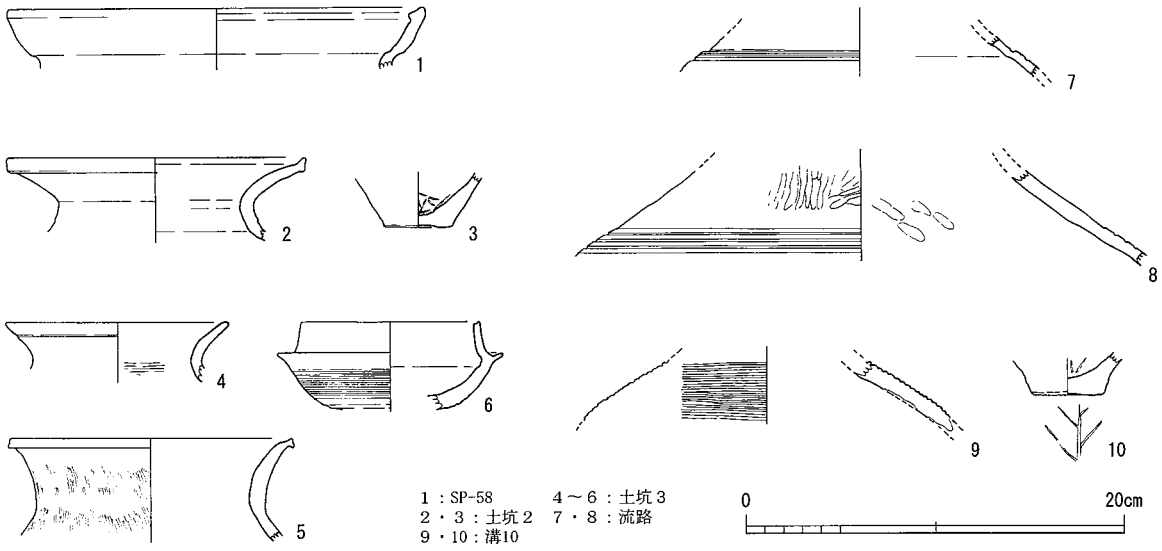
土坑１　調査区北西コーナー付近で検出した南北3.2ｍ、東西1.1ｍ以上、深さ20cmの規模を有する平面円形を呈するとみられる土坑である。断面は浅く緩やかな摺鉢状を呈し、褐灰色極細粒砂を埋土とする。

遺物は土器の細片が含まれる程度で、時期は大半が弥生中期であるが、少量ながら土師器甕の破片などを含み、遺構の時期は古墳時代以降とみられる。

土坑２　東西1.6ｍ、南北１ｍ以上、深さ22cmの平面円形の土坑である。黒褐色（2.5Ｙ3/1）シルト～細粒砂を埋土とし、土器片をやや多く含んでいた。

図示できた出土遺物として広口壺と底部がある（第24図２、３）。２は口径15.6cmで、上にすぼまる頸部から口縁部が大きく外反し、端部は上下に若干拡張して垂直な面をなす。調整は磨滅により不明。３は底径3.6cmで、やや上げ底ぎみの底部から直線的に体部へつづく。内外とも丁寧なナデを行なう。 図示できなかった破片を含め、すべて弥生時代後期後半～終末期の所産とみられる。

土坑３　井戸１と重複する南北2.9ｍ、東西1.7ｍ、深さ25cmの不整形土坑である。褐灰色極細粒砂～中粒砂、黒褐色細粒砂～中粒砂を埋土とし、弥生土器のほか、須恵器、土師器の破片が多く出土した。



第24図　第5層下部～第6層上面遺構　出土遺物（1：4）

図示できた出土遺物として土師器の壺、須恵器の杯身がある（第24図4～6）。4は口径11.4cmで、直線的に開く口縁部の上方に細い沈線状の段が巡る。内面の一部にハケを残すが、全体に回転によるとみられる丁寧なナデが施されている。5は口径14.8cmで、ゆるやかに外反する長い頸部から口縁部がわずかに開く。口縁端部は少し下方に拡張し端面をつくる。外面は細かいハケ、口縁端部から内面にかけて回転によるとみられるナデが施される。4、5は在来の土師器の系譜から外れるもので、口縁端部の形状や回転によるナデを行なうなど、須恵器の技法を取り入れた土師器とみられる。6は口径9.4cm、器高約4.7cmで、深い体部から口縁部が内傾して立ち上がり、口縁端部には明瞭な凹線と段をつくる。受部は斜め上方に薄く引き伸ばされる。体部外面はカキメ状の調整後、三分の二の範囲にケズリを施す。陶邑編年（田辺編年）によるTK208～23型式に比定され、5世紀後半～末葉の所産とみられる。

流路　調査区の東側を南北に走る流路で、北端部はややすぼまり、幅約3m、深さ13cmの溝状を呈する。南部に向かって幅が広がり、調査区東側全体が約20cmの落差で落ち込んでいる。北端部付近には東方より延びる幅1m、深さ15cmの別の溝が合流する。流路底部の高低差は南北で約15cmにとどまり、埋土には滞水環境を示す黒褐色シルト～細粒砂が堆積していた。埋土からは弥生時代前期～終末期の遺物が多数出土した。とくに調査区北端部付近の流路下層から出土した遺物は、弥生時代前期～中期に限られることから、形成時期もおそらくその頃と推定される。なお偶然かもしれないが、この流路と重なる位置に11世紀の溝1がある。

流路内からの出土遺物は、第5層下部～最下部として取り上げたものが多く、厳密には第5層の遺物と峻別できない。そのため第5層出土遺物の項目で一括して取り上げるが、ここではとくに北端部付近から出土した前期の遺物についてのみ取り上げる（第24図7、8）。7は弥生前期の壺肩部の破片で、頸部寄りの浅い段と沈線により幅8mmの突帯を巡らす。器壁は薄く中型の壺とみられる。8も弥生前期の壺肩部とみられ、頸部寄りの浅い段と沈線3条を巡らす。外面はミガキ、内面はナデによる。7，8はいずれも小破片のため、法量、傾斜は推定による。

溝 10　幅 30 ～ 40cm、検出長 4.5 m、深さ 13cm 前後の小規模な溝で、黒褐色シルト～細粒砂を埋土とする。遺構の時期は弥生時代後期後半～終末期とみられる。

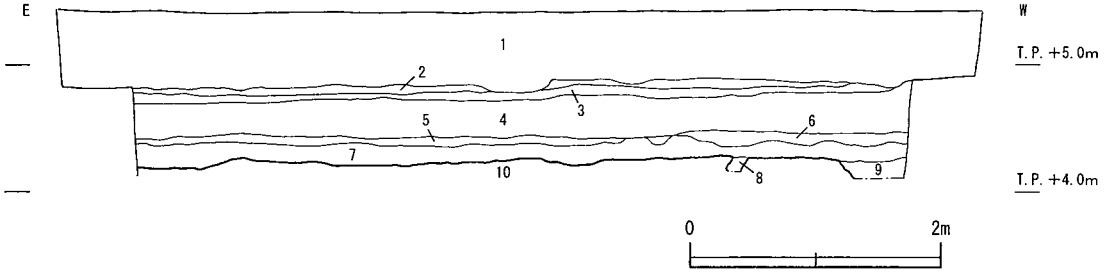
図示できた出土遺物のうち、第 24 図 9 は弥生中期初頭の壺肩部とみられる破片で、法量、傾斜ともに不明。外面に 5 条を 1 単位とする櫛描直線文を上下に間隔を設けず 3 回連続で施す。櫛描は極めてシャープで、一本の幅 1.3 mm前後、深さ 0.7 mmに達し、おそらく沈線などで用いる工具を 5 本前後束ねて施文した可能性が高い。文様が随所でぶれているのは、施文時の工具にかかった圧によるものであろう。類例として、蛍池北遺跡第 12 次調査の方形周溝墓 2 から単体で出土した壺の櫛描がある。9 は形態的には弥生時代前期壺に近いが、櫛描手法の成立を様式編年の画期とする限り、今回出土した弥生中期の土器の中で、唯一第Ⅱ様式に遡る資料である。10 は甕もしくは鉢の底部で、底径 4 cm を計る。内面はハケ、底面に広葉樹の葉脈の圧痕を残す。弥生時代後期後半～終末期の所産とみられる。

第 3 節　第 2 区の調査

（1）調査の概要

当調査区は、敷地北端に位置する立体駐車場建設計画地にあたる。調査区の規模は、東西 5.8 m、南北 2.5 m で、有効調査面積 14.5 ㎡である。

基本層序は、第 1 区と概ね変化はなく、上部に厚さ 60cm の盛土層、その下に近世～近代の耕作層、さらに洪水堆積層、黒褐色シルトを主体とした遺物包含層がつづき、地表下 1.2 m、標高 4.2 m付近に最終遺構面の第 6 層がある。



1．盛土　…第 1 層
2．旧耕作土：褐灰色（10YR4/1）　極細粒砂 40%細粒砂 30%中粒砂 25%粗粒砂 5 %　…第 2 層
3．灰黄色（2.5Y6/2）細～中粒砂。白～灰色極細粒砂の薄層がラミナ状に入る　…第 3 層
4．灰オリーブ色（5Y5/3）極細粒砂 20%細粒砂 30%中粒砂 40%粗粒砂 10%（10YR5/6 黄褐 2 付近全体的 20%土質同じ）・
　灰オリーブ色（5Y5/3）極細粒砂 20%細粒砂 30%中粒砂 40%粗粒砂 10%
5．オリーブ褐色（2.5Y4/3）細～中粒砂に暗褐色（10YR3/4）マンガン粒 30%含む　…第 4 層
6．灰色（Hue5Y5/1）極細粒砂に明黄褐色（Hue2.5Y6/6）極細粒砂を 1 %含む
7．オリーブ黒色（5Y2/2）細～中粒砂　…第 5 層
8．オリーブ黒色（5Y3/1）極細粒砂に明黄褐色（Hue2.5Y6/6）極細粒砂を 0.5%含む
9．8 とほぼ同。やや黒っぽい
10．黄褐色（2.5Y5/6 ～ 5/4）粘土～粗粒砂　…第 6 層（地山ベース層）

第 25 図　第 2 区南壁断面図（1：60）

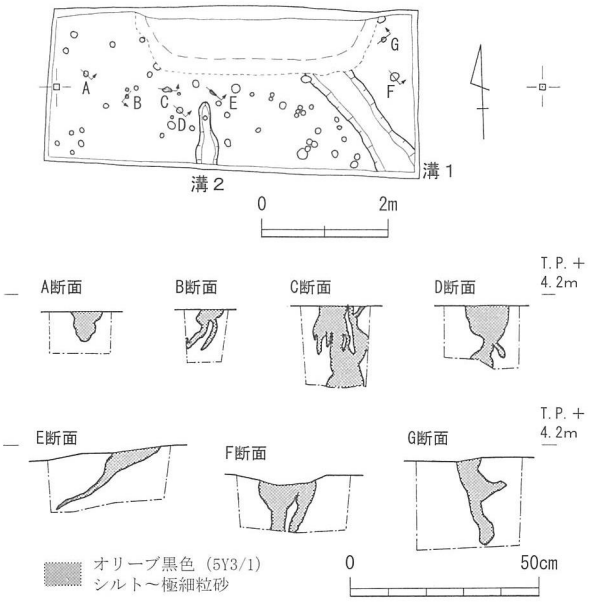
（2）第６層上面の遺構・遺物

第２区では、南側の第１区と異なり、第５層上面において遺構は確認できなかった。第６層上面においても、検出できた遺構は溝２条を数えるにとどまる。調査面積が小さいとはいえ、第１区に比べると遺構密度は低い。ただし、当調査区北側の第４次調査地点では、溝２条のほか山陰系を含む多量の弥生土器を伴う落ち込みが検出され、遺跡内でも遺構分布に粗密があることを示している。また第６層上面からは２条の溝の他、直径 10cm 内外の植物に由来するとみられる小穴多数を検出した。遺構が希薄であることも勘案すると、当調査区を中心に植物などが繁茂する低湿な環境が存在したことが想定される。

溝１　幅 0.45m ～ 0.7m、深さ約９cm の小規模な溝で、走行方位は N-35°40′-W である。埋土は第５層と同じ黒褐色シルトである。出土遺物は弥生土器の小片４点を数えるに過ぎない。弥生時代後期後半～終末期に属すると見られる。

溝２　幅 0.35 m、深さ６cm の小規模な溝で、走行方位はほぼ真北である。出土遺物は溝１と同様、弥生土器の小片２点を数えるに過ぎない。黒褐色シルトを主体とした埋土の状況から、溝１と同じ弥生時代後期後半～終末期の遺構と推定される。

小穴群　径 10cm 内外の不整円形の小穴を約 55 個検出した。規模、形状に大差はなく、調査区全体にまばらに分布する。埋土は第５層と同じ黒褐色シルトである。小穴間に配列は認められず、平面形状、規模から明らかに柱穴など人為的な遺構とはみなし難い。断面観察の結果、地下で分岐するもの、先端に行くほど細くなるもの、斜めにくい込んでいくものなどがみられた。よって、これら小穴群は植物の根の浸食に由来するものと判断する。



第 26 図　第２区遺構平面図・断面図
（１：120・１：20）

第４節　第５層（包含層）出土の遺物

第５層より多量の遺物が出土した。時期は弥生時代前期から奈良時代までの長期に及ぶ。ただし、弥生時代中期前半、同後期前半、古墳時代前期、同後期など明らかな空白期も認められる。第５層にみる出土遺物の様相は、当地点とその周辺に展開した集落の消長を如実に示すものとみられる。ここでは第５層を母材の一部とする耕作土層（第３層下部及び第４層）からの出土遺物も交え記述したい。

（１）弥生時代前期

壺、甕の破片 18 点があり、第５層のあらゆる層位から出土した（第 27 図１～ 18、図版 18)。下部に比べ上層のものほど転磨や風化が著しいという傾向を示す。

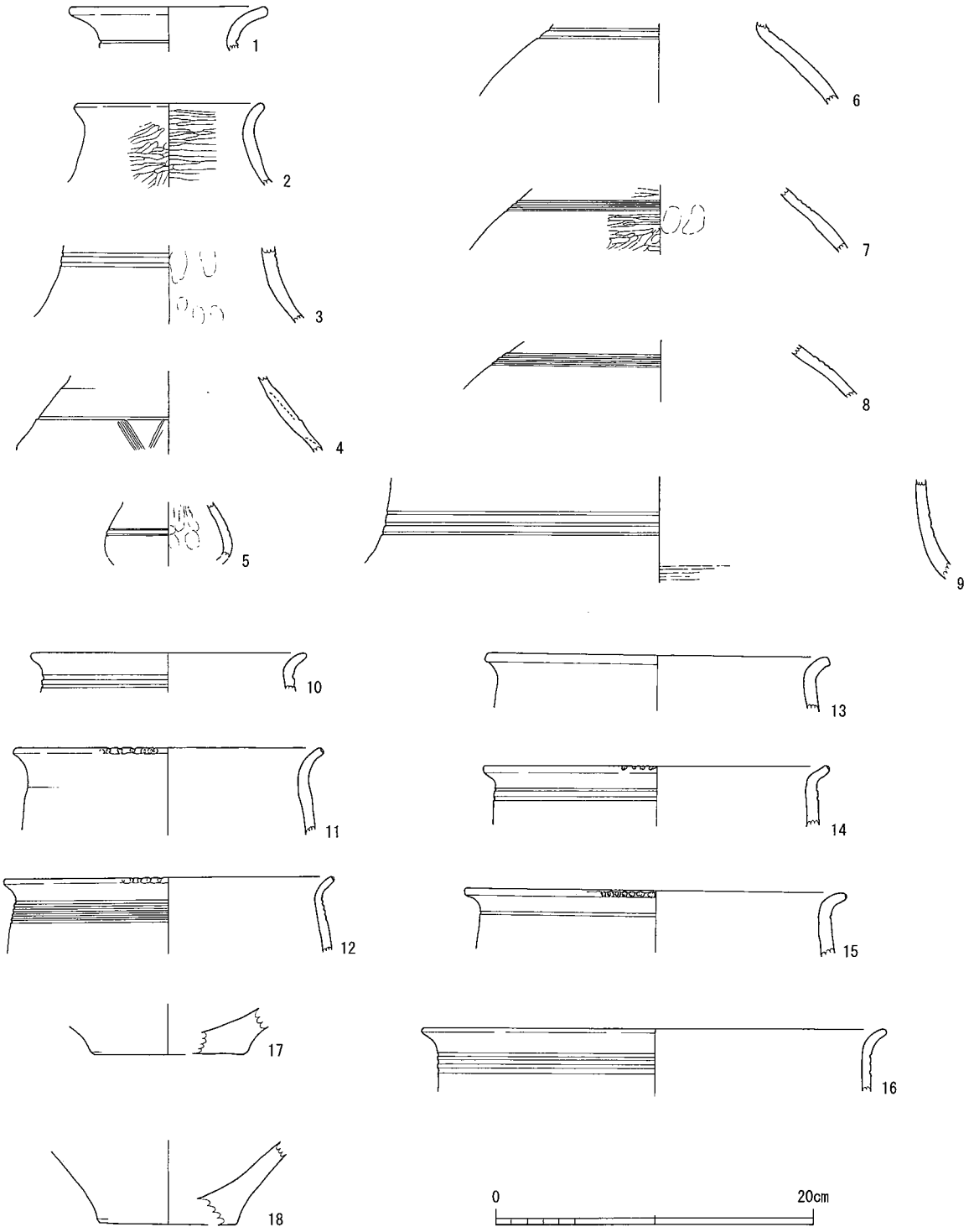
１～９は壺である。１～３、５以外は小破片のため推定復元による。１は口径 12.6cm で、口縁部は大きく外反し、頸部との境に箆描沈線を１条認める。２は口径 12.2cm で、短く外反する口縁部からハ字状にやや長くのびる頸部を有し、内外面とも丁寧なミガキを施す。傾きは推定で、もう少し下方に開く可能性がある。頸部上方に径３㎜の孔を焼成前に穿つ。３は頸部上半に２条の箆描沈線を施す。４は体部上半に１条の沈線及びそれに接して３条の沈線による連続三角文が施文される。５は体部径 8.1cm、残存高 3.4cm の小形の壺で、下膨れの丸い体部のやや上方に２条の細い沈線を施す。６～８は肩部の破片で、いずれも細片のため径、傾きは不明。いずれも頸部下端と見られる位置に箆描沈線を２～３条施すが、とくに７、８は沈線の上端に強いミガキを施すことにより浅い段をつくる。９は推定頸部径 33.6cm の大型の壺で、頸部下方に３条の箆描沈線を施す。

10 ～ 16 は甕の口縁部から体部上半の破片で、10 ～ 12、14、15 は小破片のため径、傾きともに推定である。いずれも口縁部が短く外反するいわゆる如意形口縁を有するものである。口径は 13 が 21.6cm、16 は大型で 28.8cm である。口縁部直下の箆描沈線や、口縁端部の刻み目を有するもの、有さないものがある。箆描沈線は少条が卓越するが、中には 12 のように５条を数えるものがある。14、15 は内外面ともにナデ調整による以外は、表面の転磨により調整は不明である。17、18 は大型の壺もしくは甕の底部で、推定底部径は 9.8cm、8.6cm を計る。いずれも径１～３㎜の砂粒を多く含む。

以上、弥生前期の遺物についてまとめると、色調は全体としてにぶい黄橙色を呈し、胎土に径１～３㎜の砂粒を多量に含むものが顕著に認められる。壺、甕ともに明瞭な段や削り出し突帯は認められないが、短く外反する壺の口縁部形態や、箆描沈線が 12 の５条を最多としていずれも少条である点などから、全体としては第Ⅰ様式中段階を前後する時期におさまるとみられる。なお、８、13 は角閃石を含むにぶい黄褐色を呈し、生駒西麓の所産とみられる。

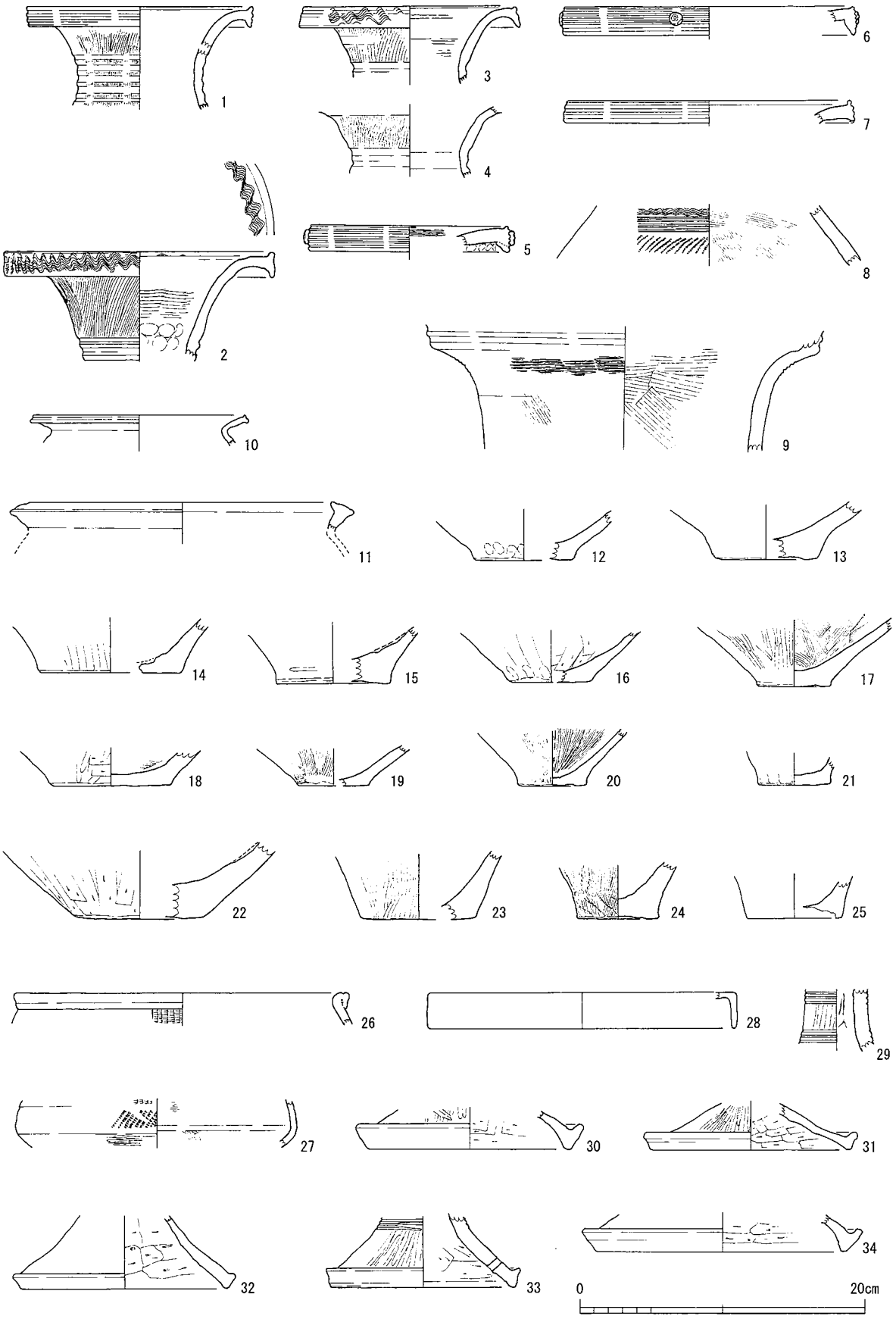
（２）弥生時代中期

壺、甕、鉢、高杯がある（第 28・29・30 図、図版 19・20)。



第27図　第５層　出土遺物１（1：4）

第28図１～７は広口壺の口縁部である。いずれも逆ハ字形に開く頸部からほぼ水平にのびる口縁部を有する形式である（口径＝１：15.5cm、２：18.6cm、３：推定14.8cm、５：13.6cm、６：推定20cm、７：推定20.3cm）。１は外面ハケ、内面をナデにより調整し、頸部と口縁端部に凹線を施す。２は外面を粗いハケ、内面はナデ及び横方向のハケを施す。頸部下端に３条の凹線を認める他、口縁端部と内面に櫛描波状文を施す。２、３は同一個体の可能性がある。口縁端部の上方へのつまみ上げは小さい。口縁端部に波状文を有する。５は復元口径に



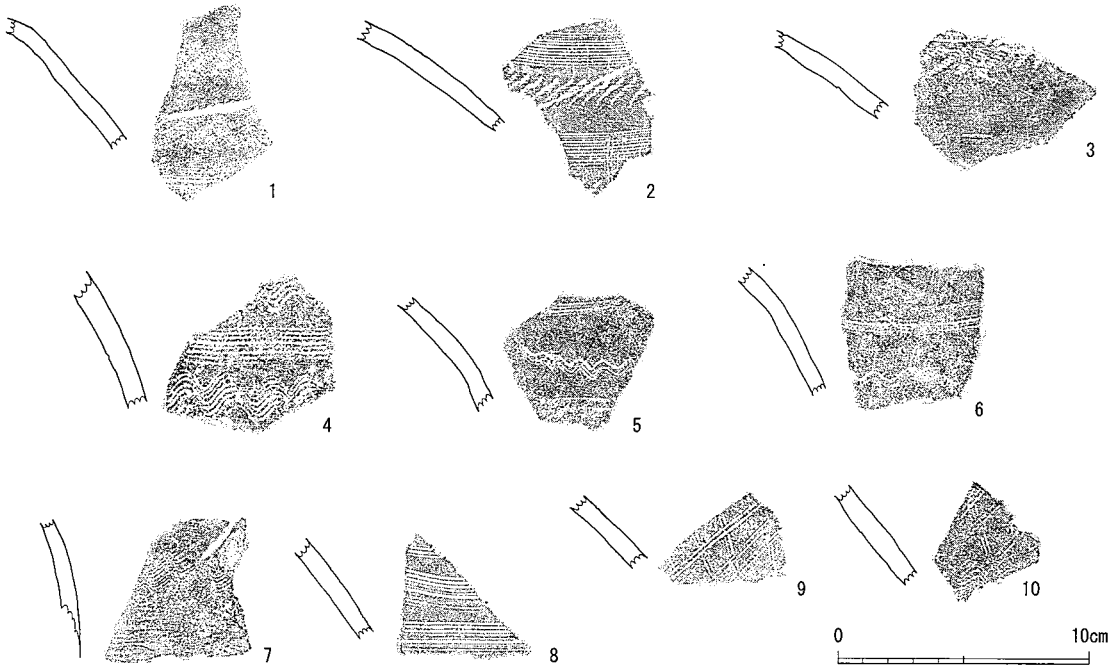
第28図　第5層　出土遺物2（1：4）

比して頸部が細いタイプである。口縁端部に凹線と円形浮文、上面にミガキを施し、端部に１個のみ竹管文を認める。６、７もほぼ同様の形態で、６には円形浮文を伴う。８は肩部の破片で、外面ナデ、内面ハケ調整、外面には櫛描による波状文、直線文、列点文が施される。９は有段口縁を有する大型の壺で、残存最大径 27.8cm。内外ともハケ調整を施し、頸部屈曲部の外面上端には水平方向のタタキの痕跡をとどめる。口縁部下端に幅広の凹線２条を認める。

10、11 は甕の口縁部で、10 の推定口径 14.7cm、11 は推定 22cm を計る。10 は口縁部がくの字に屈曲する形式のもので、器壁が薄く、口縁端部には１条の凹線が施される。11 は口縁部が短く屈曲する大型の甕で、端部は内面にやや引き伸ばす。12 ～ 25 は壺もしくは甕の底部である。内外にケズリを施すもの、粗いハケ調整を施すものがある。12 は生駒西麓の胎土を有する。

26 は有段口縁をもつ鉢で、推定口径 22cm、短く外側に折り返した口縁外面を水平に強くなで、体部との境に浅い段をなす。体部上端に櫛描廉状文を施す。27 も同様の形態と見られ、脚台を伴う可能性がある。推定体部径 19.6cm、体部下半でやや丸みを帯びながら屈曲し、底部外面はミガキ、内面はハケ、体部外面に同一原体によるとみられる櫛描廉状文及び列点文を施す。器壁は薄い。２点はいずれも生駒西麓の胎土を有する。

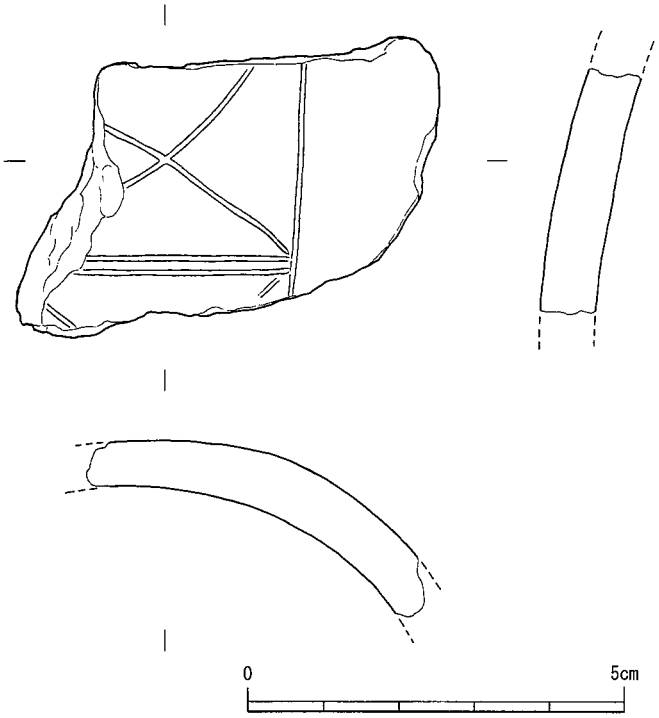
28 ～ 34 の高杯では、垂下口縁をもつ 28 は推定径 21.7cm で、垂下部のみ残存する。端部外面はヨコナデのみで、一切の装飾性を省略する。29 は脚柱部で、縦方向のミガキ調整ののち上部５条、下部４条の篦による深い沈線を施す。この種のものには鋸歯文など篦描文を伴うものが多い。30 ～ 34 は同種の脚部である。30 の底径は推定 13.7cm、31 は 13.8cm、32 は 14.4cm、33 は 12.5cm、34 は推定 17.2cm。いずれも外面を縦方向のミガキ、内面は水平方向の粗いヘラケズリを施す。ハ字に広がる脚端部はやや内弯ぎみに接地し、端部上端を強くつまみ上げる。33 の上部にはヘラによる沈線３条、脚端部近くに径４ミリの透かし孔２個を認める。



第 29 図　第５層　出土遺物３（1：3）

その他、櫛描文を伴う壺破片が相当量出土しており、転磨の少ない資料を中心に第29図にまとめた。１、２、３は列点文に直線文や波状文を伴い、４、５、６は直線文と波状文の組み合わせ、８は直線文を３条、９は斜格子文、10は斜格子文と波状文が施されている。

以上のほか、第５層最下部（流路）から出土した器種、時期ともに不明の線刻土器がある（第30図）。幅６cm、高さ3.9cm、厚さ0.7cmの小破片で、色調は浅黄橙色（10YR2/3）を呈する。胎土には３mm以下の長石、石英等の砂粒を多く含み、他の前～中期の土器と差はない。破片上部の直径は約９cmで、下方にあまり広がらず、傾きは急である。表面に×印を中心とするヘラ描文があり、上下２段に×印、その間に水平の直線を２本、右端にほぼ垂直の直線を１本刻む。前期壺の木葉文が簡素化された文様とも捉えうるが、土器自体の直径が小さいこと、傾きが急角度であること、文様が全周しないことなどから、壺の肩部ともみなし難い。鐸身全体に×を刻む瓜生堂遺跡例などを参考に銅鐸形土製品なども可能性として想定されるが、銅鐸形土製品が幅、高さとも６cmを前後する小ぶりなものが多いのに比べると本例はやや大きい。類似資料の増加に待ちたい。



第30図　線刻土器（1：1）

以上にとりあげた弥生時代中期の土器（線刻土器は前～中期）は、にぶい黄橙色（10YR7/2～7/4）、赤褐色（5YR4/6）等を呈する地元産のものが大半を占めるが、角閃石を含むにぶい黄褐色（10YR4/3）を呈する生駒西麓の胎土を有するものが少量みられる（26・27）。時期的には森田編年による摂津Ⅳ様式２～３段階に相当し、第４次調査地点出土のⅣ様式の遺物と共通する。前期が出土するにも関わらず、第24図９など一部を除くとほぼⅡ・Ⅲ様式を欠落し、しかもⅣ様式末～Ⅴ様式前半の資料が皆無である点から、当遺跡の前期集落からの継続性やⅤ様式後半期への連続性は、現時点の資料からみる限り確認できない。

（３）弥生時代後期後半～終末期

壺、甕、台付甕、鉢、高杯、手焙形土器がある（第31図１～29、図版21・22）。

１～６は壺である。１は有稜の口縁部で、口径17.7cm。逆ハ字状に開く口縁部の中位に浅い稜をなし、それより上位に粗雑な櫛描波状文、端部には小さな刺突文を２列にめぐらす。内面は丁寧なミガキ調整を行なう。２は二重口縁の大型壺で、稜部分の径は17.6cm。口縁部中位に明瞭な稜を呈し、外面はナデ、内面はミガキで調整する。直立する頸部と球形の体部を持

つものと推定される。３は頸部径 9.4cm で、ここでは壺頸部として取り上げた。頸部下位とみられる位置に刻目突帯を付加し、外面は丁寧なミガキ、内面はハケのちナデを行なう。突帯の付加後、直下に雑な櫛描波状文を施す。頸部と体部との屈曲部に突帯を付加する例はみられるが、突帯を屈曲部より上方に付加し、その間に施文を行なう例は珍しく、壺と断定するにはやや難がある。４は小さな底部を有する壺破片で、外面はミガキ、内面は板ナデを施す。５は尖底の壺底部で、外面はミガキが施される。６は底径 4.4cm の、やや上げ底ぎみの台状の底部を有する。

７～ 14 は甕である。畿内通有のタタキ甕に加え、受口状口縁のものや、庄内式の特徴を有するものなどがある。７はほぼ完形に近い甕で、口径 13.6cm、器高 16.8cm、底径 1.8cm の小さな上げ底ぎみの底部をもつ。体部径と口縁部径はほぼ等しく、口縁部の屈曲はやや緩やかで、端部は丸くおさめる。体部外面は粗いタタキ（３本／１cm)、下部はタタキのち板ナデによる。内面は縦方向のハケ、上部は横方向の板ナデを行なう。粘土紐の継ぎ目が顕著に観察され、タタキの不整合と合わせ、おおむね体部下半とそれより上部の２段階の分割成形が想定できる。煤は底部付近にはなく、底部からの高さ 3.5cm より上に付着する。この土器は第６層直上の出土位置から、本来は遺構に伴うものであった可能性が高い。８～ 10 は通有のタタキ甕で、口径 13.8cm ～ 14.5cm。体部外面から一部口縁にかけてタタキ、内面はナデを行なう。口縁端部は丸くおさめる。11 はくの字に屈曲して開く口縁部で、端部を上方につまみ上げ、外側は幅の狭い凹面をなす。口径 16.7cm で、外面にタタキの痕跡を認める。12 は受口状口縁を有する甕である。直線的な肩部から大きく水平に開く口縁部を有し、口径 13.8cm。口縁端部は上方に引き伸ばして受口状につくり、外側は強いナデによる凹面をなす。体部外面はナデ調整前の縦方向のタタキの痕跡がかすかに認められ、内面はハケ調整である。北近畿の影響とも見られるが、胎土、色調ともに他の土器と特段の差異は存しない。13 は直線的に開く薄手の口縁部破片で、端部は小さく折り返し肥厚している。庄内式の範疇に属するものと見られ、今回出土した弥生時代後～終末期の土器の中では、最も新しい様相を示す。14 は底径 8.2cm で、台付甕の脚台部と見られる。中実につくられ、底部下面はやや上げ底ぎみ、体部下端にタタキの痕跡を残す。井戸１の台付壺（第 22 図 14）と同様、東海地方の影響であろうか。15 ～ 20 は甕の底部である。このうち 19 は、底径 5.1cm の大きめの平底から体部がやや外弯ぎみに立ち上がり、外面にわずかにタタキの痕跡を残すものの、ナデで消されている。にぶい橙色を呈し、他の土器と若干胎土を異にするなど、在来の甕底部とは様相を異にする。21 は突出度の強い底部で、タタキの痕跡をわずかに認める。22、23 は壺の底部とみられる。

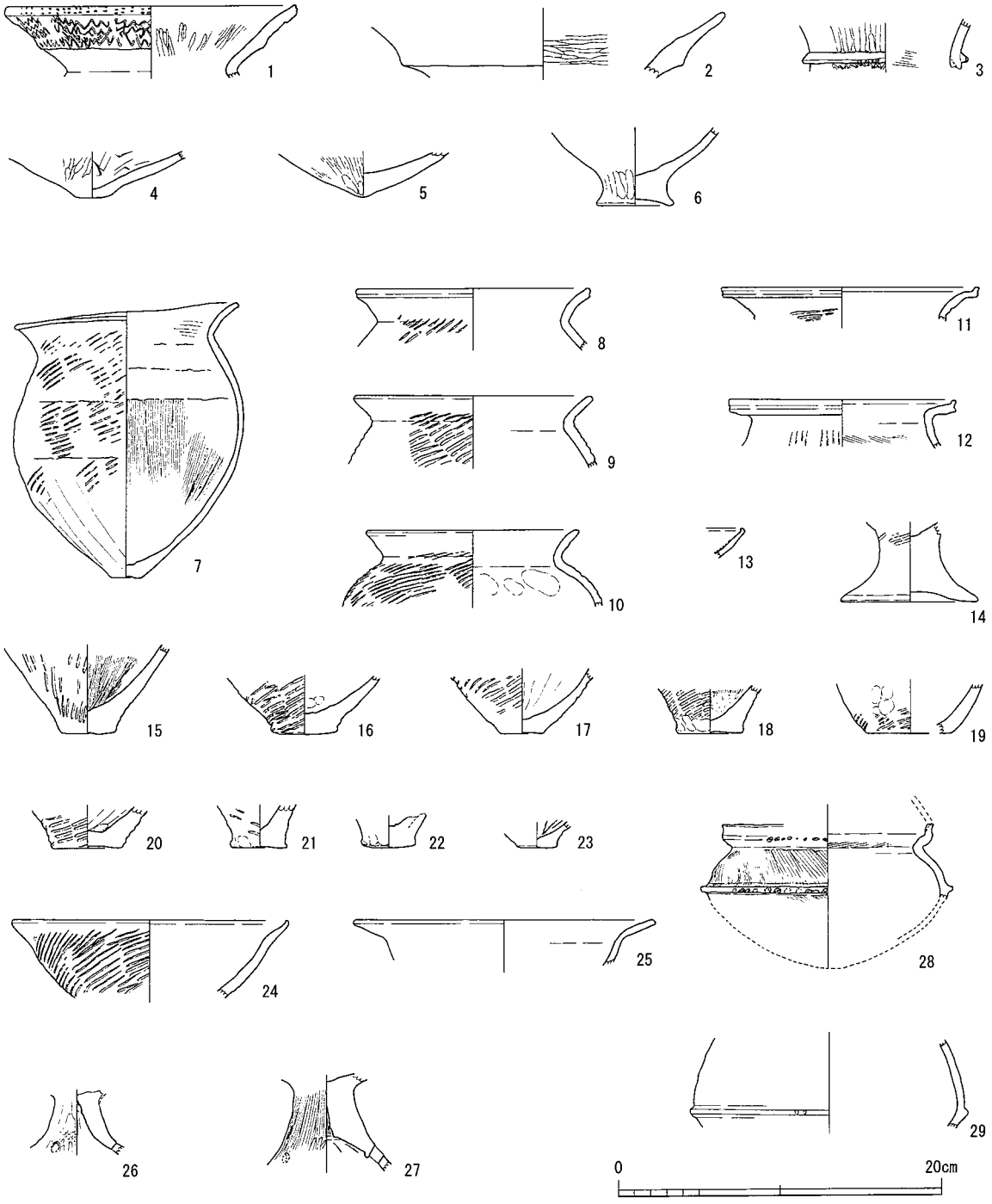
24、25 は鉢である。口径 16.7cm で、緩やかに内弯する体部からわずかに外反する口縁部を有し、口縁端部は上方につまみ上げる。体部外面はタタキ、内面はナデによる。25 は口径 18.2cm で、丸い体部から口縁部が屈曲してのび、端部は面をなす。内外ともナデ調整が行なわれる。26、27 は高杯の脚部である。ともに径約６㎜の孔を３～４方向に開ける。28、29 は手焙形土器である。28 は口径 12.8cm。体部中位に刻目を施した突出度の高い突帯を巡らす。張りのある肩部から口縁部が外反し、端部を上方に引き上げ、下端に刻目を施す。外面は粗いハケ、内面はハケ、ナデにより調整する。29 は体部推定径 17.2cm で、下半部に刻目を施した突帯１条を巡らす。28 とは形態を異にし、体部上半部の立ち上がりが高く、突帯部分で大き

く屈曲して下半部がすぼまる。磨滅のため調整は内外とも不明。

（4）古墳時代中期

土師器及び須恵器があり、中期後半～末葉のものが大半を占める。

土師器（第32図1～30、図版22･23）　壺、甕、甑、高杯、製塩土器、円筒形土器、移動式竈、土錘がある。在来の土器様式を踏襲するものの他、半島由来のいわゆる韓式系土器や、須恵器の製作手法を導入したとみられるものも存在する。



第31図　第5層　出土遺物4（1：4）

１～３は壺である。１は、推定径27cmの有段口縁を有する大型の壺とみられる。垂直に立ち上がる口縁部は、下端部外面に２本の沈線を入れて突帯状にみせ、口縁端部にも沈線を入れるなどメリハリをつける。端部は内外に若干拡張する。２は、口径約４cmの小形丸底壺で、やや尖りぎみの底部と丸い体部をもち、口縁部が内弯して屈曲する。体部外面はハケのち下半のみ細かいミガキ、その他はナデ、ヨコナデによる全体として丁寧な調整がみられる。３は、口径7.9cm、残存高11.6cmの直口壺で、体部外面は細かいミガキ、口縁部外面は縦方向の太いミガキ、内面は全体をナデ調整による。２、３は、その形態と細かく丁寧なミガキを多用する点で他の土師器に比べ古相を認める。

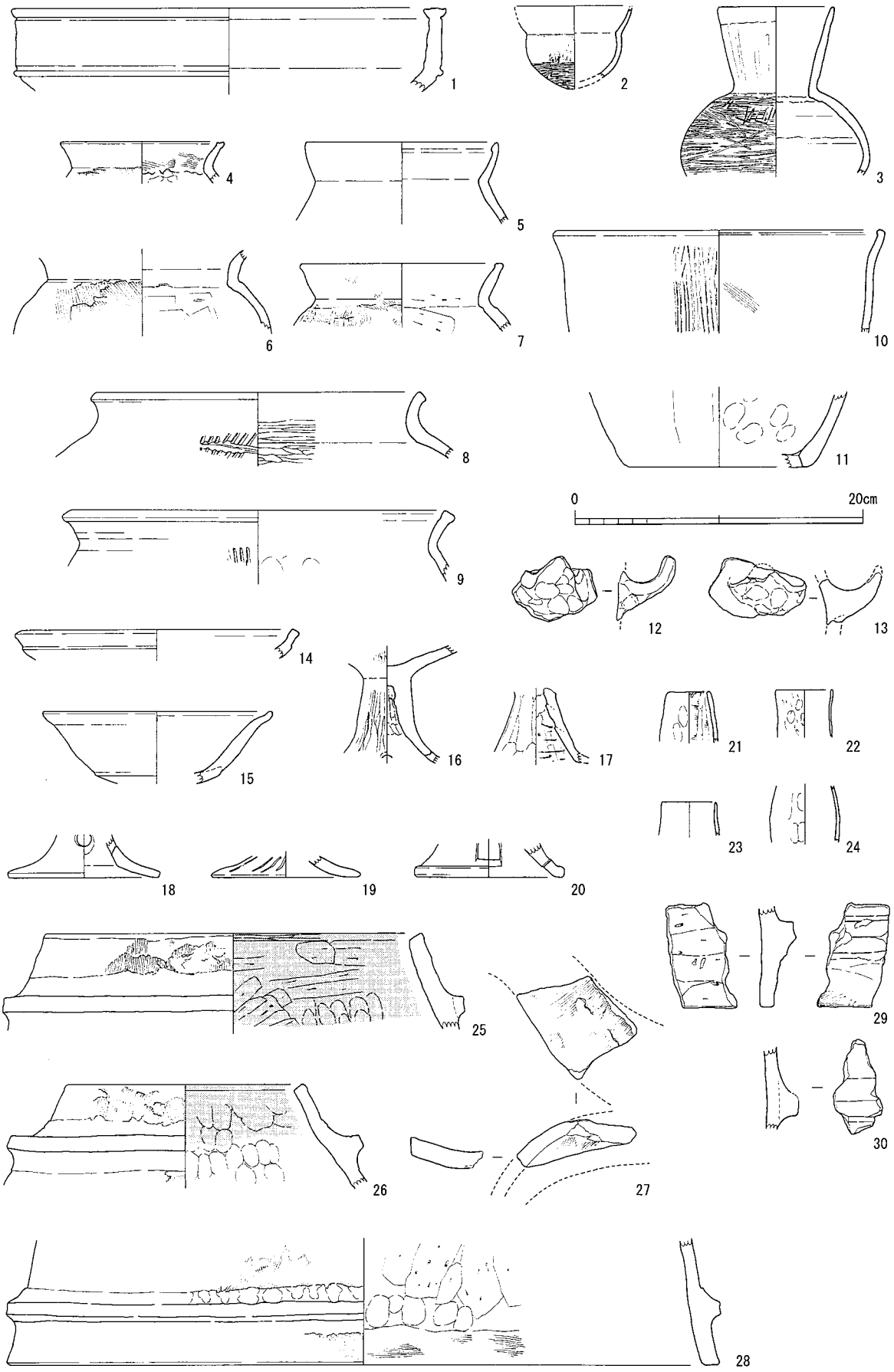
４～７は布留式の系譜を引く在来の甕である。４は口径11.4cm、６は口径13.4cm、７は14.0cmで、ともに口縁端部を内傾させて若干肥厚する。このうち７は外面をハケ、体部内面はヘラケズリを施す。８、９は大型の甕で、８は推定径22.3cm、９は26cmを計る。８は張りのある丸い肩部から口縁部が短く外反し、端部は角張り平坦面をつくる。体部外面は斜めの粗いタタキ、内面は丁寧な横方向のミガキを施す。９は張りの弱い肩部から口縁部がくの字状に外反し、端部はやや拡張ぎみの面をなす。体部外面は垂直方向の粗いタタキを施す。８、９は外面に粗いタタキ、口縁部内外に回転台によるとみられるヨコナデを施すなど、韓式系もしくは須恵器製作手法の影響がみられる。

10、11は甑とみられる破片である。10は体部上半から口縁部の破片で、推定口径22cm、体部からわずかに外反する口縁部を有する。口縁端部は内部に若干肥厚し、体部外面は縦方向の粗いハケを施す。11は推定底径12.3cmで、６個程度の蒸気孔を開けるとみられる。12、13は甑もしくは鍋の把手とみられる。

14は、高杯の口縁部とみられる破片で、推定口径18.6cmを計る。器壁はやや厚く、端部直下に段を有し、口縁部が短く外反する。端部は面をなし、内外に強いヨコナデを行なうところは８、９とも共通し、特殊な器形と合わせ韓式系もしくは須恵器製作手法との関連を認める。15は有稜の高杯で、口径15.6cm、杯部高4.9cm。稜は鈍く、口縁端部はやや内弯しながら短く外反する。16～20は高杯の脚部である。16は中空で下部に向かって大きく弯曲して開き、中位に数不明の透かし孔を開ける。外面は縦位のミガキを施す。17は、ハ字形に直線的に開く中空の脚注部から端部が屈曲して開く。外面は板ナデ、内面はケズリを行なう。18は底径10cmで、17と同様、脚端部が屈曲して開く。４方にスカシ孔を開ける。19は底径10cmで、外面に暗文風のミガキを施す。20は土師質であるが、通有の形態とは異なる。ハ字状に開く脚部中位に長方形のスカシ孔を開け、形態的には須恵器の短脚高杯と極めて類似する。ただし、須恵器とみるには端部の形状や調整に若干違和感があり、また焼成不良品とも認められず、須恵器の製作手法を用いた土師器とみるのが穏当であろう。

21～24は製塩土器の破片で、推定口径３～４cm、器壁の厚さは1.5～３mmである。外面はいずれもナデにより調整し、内面は22、23が丁寧なナデ、21は工具で横方向に掻き取ったような細かな条線が認められる。

25～30は、円筒埴輪とも共通する胎土や色調を示し、突帯を有すること、器壁が厚いこと、外面ハケ、内面ケズリ及びナデを中心とした調整を行うこと、などを特徴とする。25、26は当初、内面のスス状の汚れ、突帯を庇の一部と見ることなどにより移動式竈の破片かとも推定した。



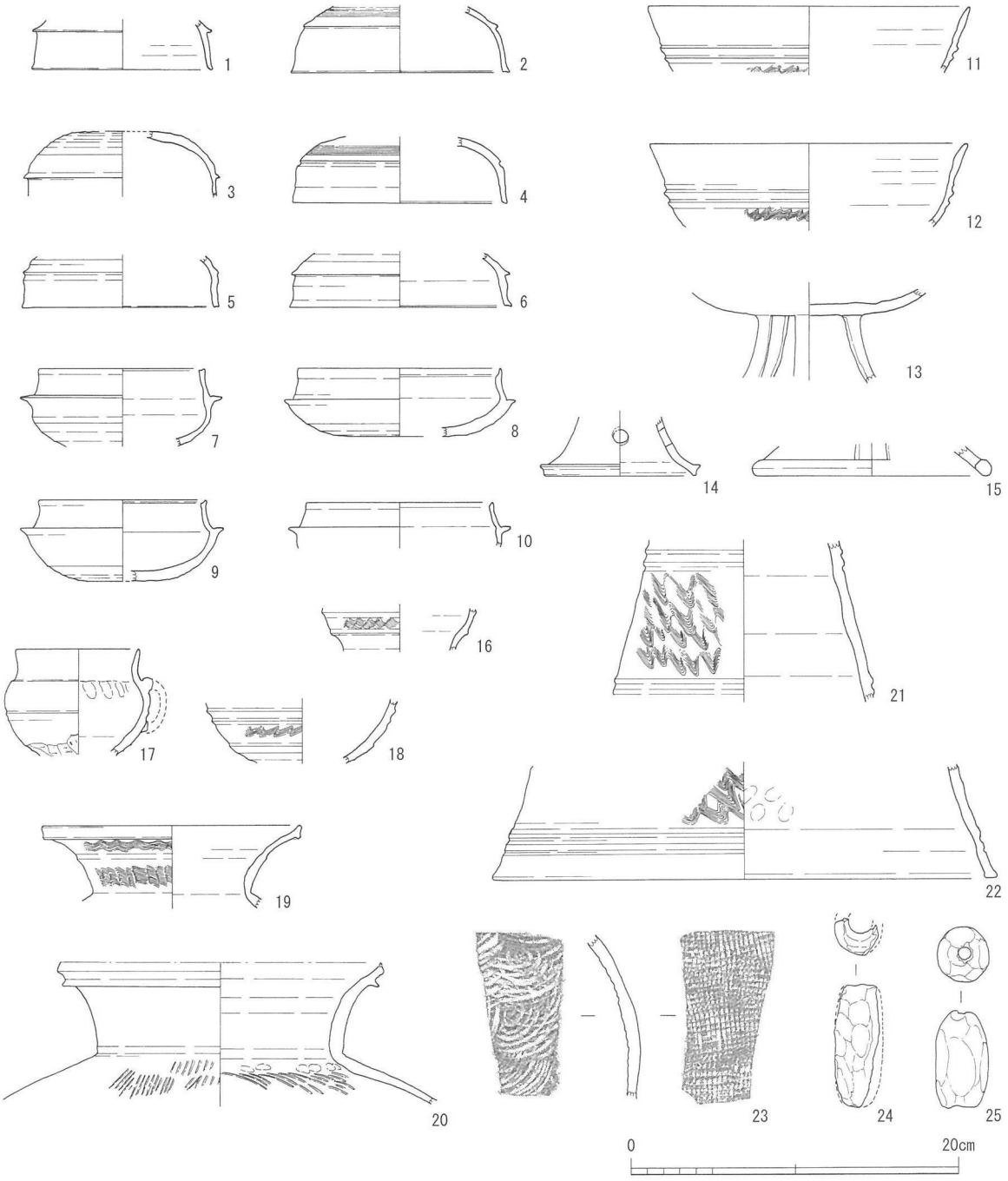
第32図　第5層　出土遺物5（1：4）

しかし、突帯の形状や器面のカーブに不自然さが見られ、なお検討の余地を残すものの、ここでは円筒形土器（筒形土製品）の口縁部と推定した。ともににぶい橙～橙色（7.5YR7/4～7/6）を呈し、25の口径16.6cm、26は口径26cmで、大小がみられる。断面台形の突帯を有し、口縁端部は丁寧なヨコナデによりきれいな面につくる。外面は細かいハケ、内面はナデもしくはケズリを行い、とくに突帯の付く内面には指頭痕を顕著に残す。２点とも口縁端部から3.3～5.5cmの範囲の内面に淡灰色のスス状の汚れが認められる。円筒埴輪と異なる点は、その傾斜角度と、端部の調整が非常に丁寧であること、外面のハケが埴輪のように一気に施されるのではなく、細かな単位で行なわれていること、などがあげられる。また突帯の断面形状や粘土紐接合面の傾斜から、成型時は上下が逆であった可能性が高い。排煙などを目的に製作されたとされる既知の円筒形土器の多くが口径11～21cmに収まるのに比して、やや大きすぎるきらいはあるが、大きなものについては土管や支柱などの用途も想定されている。27は橙～にぶい橙色（7.5YR6/4～7/6）の色調を呈し、厚さ約１cm、幅5.5cmの浅い曲面をもつ板状のもので、内外とも比較的丁寧なハケ調整を施す。端部は鋭角に仕上げられ、反対側は離脱痕を示す。形状から移動式竈の庇部とも考えられるが、雑なつくりのものが多い中で、本例は非常に丁寧につくられる。28は厚さ1.2cm、高さ幅ともに９cm前後の破片で、灰白（2.5Y8/2）～橙色（7.5YR7/6）の色調を呈し、推定底径48cmを計る。その大きさと下位に断面台形の突帯を有する点から、移動式竈の底部と見られる。外面は細かいハケ、内面は底部付近を横方向のハケ、それより上には粗いケズリが施され、底部下端は非常に丁寧なつくりである。突帯の形状や、その上面に連続した指頭痕がつくなど、円筒埴輪との共通点が多い。突帯の断面形状や指頭痕の位置から、25、26と同様、成型時は上下が逆であったと推定される。同様な移動式竈の例は寝屋川市長保寺遺跡からも出土している。29、30も胎土、調整などから移動式竈の破片とみられる。第33図24、25は土錘で、管状もしくは楕円状を呈する。24は長さ7.5cm、幅2.8cmで、径1.2cmの孔を開ける。25は長さ6.0cm、幅3.1cm、孔の直径0.8cmである。

須恵器（第33図１～23、図版24）　蓋杯、高杯、碗、壺、器台などがある。

１～６の杯蓋は、推定口径10.8～12.6cm。概して器壁が薄くシャープな仕上げで、口縁部の立ち上がりも高く、体部は深くつくられる。口縁部と天井部を画する稜は、鋭く突出するもの（１、３、６）、やや鈍いもの（４、５）がある。天井部のケズリの範囲は80％程度のものが多いが、２、４はケズリのあとカキメを施す。口縁端部は小さな面をなすもの（１）、内傾する明瞭な段をなすもの（４、６）、水平に近い凹面をなすもの（２、５）がある。カキメを有する２、４はいずれも新しい様相が見られる。７～10は杯身で、推定口径10.2～12cm、器高4.1～4.9cmを計り、口縁部の立ち上がりは高く急角度のものが多い。口縁端部は水平に近い凹面をなすもの（７）、内傾する明瞭な段をなすもの（９、10）、内面の段から上に長く引き伸ばしたようなもの（８）がある。受部は水平に突出するものが多い（７、９、10）。底部のケズリの範囲は60～90％までばらつきがある。杯蓋、杯身の特徴から、陶邑編年のTK208～23型式に相当するものと見られる。

11～15は高杯である。11、12は無蓋高杯の杯部で、口径は19.5cm、19.2cmを計り、深い体部から口縁部が直線的もしくはやや外反して伸びる。口縁部と体部の境に２条の突帯を巡らし、その直下に櫛描波状文を施す。13も無蓋高杯と見られ、体部から脚部の破片である。脚



第33図　第５層　出土遺物６（1：4）

部には３方向に長方形のスカシ孔を開ける。14、15は高杯の脚部である。脚端部やスカシ孔の形状を異にする。

17はカップ形の把手付碗で、口径7.4cm、推定高6.9cmを計る。やや下すぼまりの丸い体部から口縁部が外反ぎみに直立し、側面に断面円形の把手を付する。体部中位に浅い突帯を巡らし、底部外面にのみ手持ちヘラケズリを行なう。18は台付碗と見られ、体部下半に２条の突帯、櫛描波状文、段を巡らす。

16、19、20は壺の口縁部で、19の口径は15.6cm、20は推定口径19.7cmを計る。16のシャープな突帯、19の口縁端部の形状、20の口縁端部直下に付けられた突出度の高い突帯などを特

徴とする。21は器台の脚部で、２条構成の突帯間に４条の波状文、長方形のスカシ孔をもつ。22は同じく器台の脚端部と見られるが、器壁は薄くつくられる。推定底径29.5cm、下位にナデによる鈍い凹線を３条巡らし、その上を波状文で飾る。脚端部は接地面を平坦につくる。23は甕の体部破片で、外面には格子目タタキが施される。

須恵器は全体として大きな時期差はみられず、いずれも杯蓋や杯身で想定されたTK208～23 型式に相当するものと見て差し支えなかろう。

（５）飛鳥・奈良時代

土師器では杯、皿、高杯、甕、須恵器では杯蓋、杯身、高杯、椀、台付壺、瑠、平瓶の他、黒色土器の椀がある。

土師器（第34図１～13、図版25）　１～３の杯は、いずれも水簸された精良な胎土を有し、橙色の色調を呈する。１は推定口径６cmで、丸い体部から口縁端部を丸くおさめ、端部内面の凹線により段をつくる。内外とも丁寧なヨコナデ調整、内面に放射状の暗文を施す。２は推定口径14.4cmで、口縁端部内面に浅い凹線を入れる。外面の一部にミガキ、内面に暗文の痕跡を認める。３は口径、傾きともに推定で、推定口径14～20cm。内外ともに丁寧なヨコナデを行ない、口縁端部は大きく内弯させる。

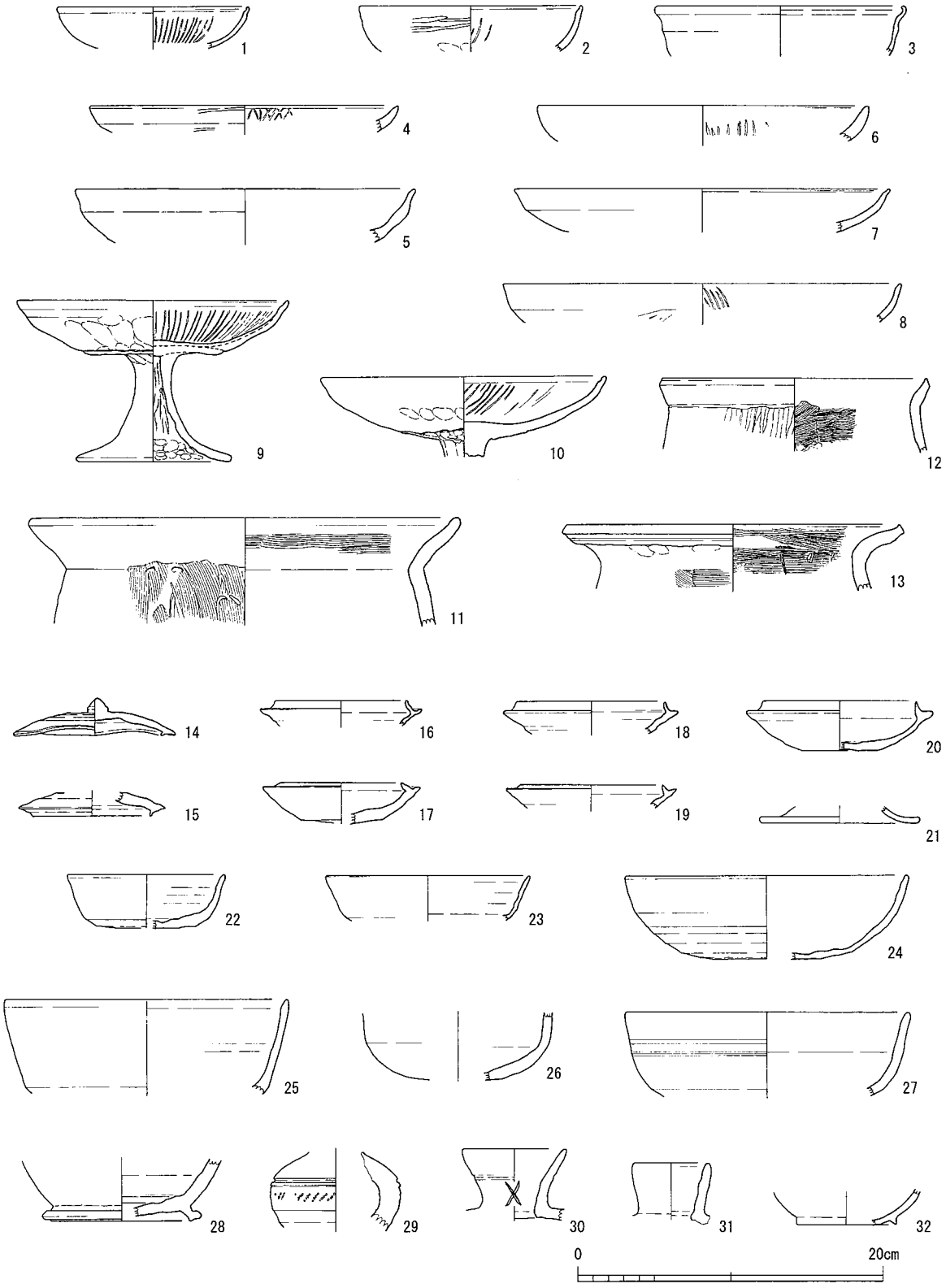
４、６～８は皿で、７の口径は24.4cm。他は小破片のため推定であるが、大きさにばらつきが見られる。器高もやや深いもの、浅いものがある。口縁端部の形状は、概して丸みを帯び、内弯気味に伸びるもの、やや外反するものなどがあり、７の内面にはかすかな凹線を認める。内面の暗文は、４が格子状、６、８は放射状、胎土は精良で、いずれも橙色を呈する。

９、10は高杯である。いずれも杯と同様、橙色の色調を呈し、精良な胎土を有する。９は口径17.6cm、器高10.4cmを計り、都城で通有に見られる形式のもので、低平な杯部に高い脚部をともなう。杯部は脚部上端に付された円盤状の底部に体部を接合し、境界に生じた段をそのまま残す。杯部外面は粗い指頭調整、内面は丁寧なナデの後、放射状の暗文が施される。脚部は中空で内面に顕著なしぼり痕を残す。10の杯部は口径18.4cmで、脚部を欠失する。体部は９に比べ整った形をしており、外面の明瞭な段もなく、調整も丁寧である。杯部内面には暗文が施される。

11～13は甕である。１は推定口径27.8cm、12は17.1cm、13は推定口径25cmで、いずれも張りの弱い体部から口縁部が外反する。口縁端部は丸くおさめるもの（11）、短く外反し外傾する端面をつくるもの（12）、大きく外弯して開き端部が面をなすもの（13）がある。内外ともに縦方向もしくは横方向のハケ調整が行なわれる。

須恵器（第34図14～31、図版25）　５は皿で、口径22cm、灰白色の色調を呈する。14、15は杯Ｇの蓋で、14は推定口径9.1cm、器高2.45cmで、頂部に擬宝珠形のつまみを有する。15は口径7.7cmで、おそらく14同様に擬宝珠形のつまみを有するとみられる。16～20の蓋杯（杯H）は、浅い体部に内傾する短い立ち上がりを有するもので、口径7.9～10cm、器高2.7～3.2cmを計る。22、23は杯Ｇで、22が口径10.2cm、器高3.5cm、23は口径13.2cmを計る。23は口径が大きいわりに器高が低く、器壁の薄いもので、新しい傾向を示す。24は口径18.2cm、

器高 5.4cm で、丸く深い形態につくり、体部下半は回転ヘラケズリによる。25 は推定口径 18.3cm、現存高 6.2cm で、底部から深い体部が屈曲して伸び、口縁部までほぼ直線的である。端部は丸いが内傾する段を有する。26 は鉢もしくは椀と見られ、最大径 12.2cm、器壁が厚く、下半に回転ヘラケズリの痕跡を残す。27 は口径 18.3cm、現存高 5.5cm の椀である。丸い体部



第 34 図　第５層　出土遺物７（1：4）

から口縁部が直線的に伸び、端部は丸くおさめる。体部中位には銅椀の特徴である２条＋３条の沈線が巡る。28 は高台の付いた壺で、底径 9cm、平坦に近い底部から体部が屈曲して伸びる。内外ともに丁寧なナデもしくは回転ナデが行なわれる。29 は瑳で、体部径 6.4cm、肩部に凹線、その下に列点文を施す。30、31 は平瓶の口縁部と見られ、30 は口径 6.6cm、31 は 4.6cm。30 は口縁部下半に×の線刻が見られる。

黒色土器（第 34 図 32、図版 25） 32 は黒色土器 A 類の椀で、底径 6.4cm、断面三角形の高台が付く。体部は丸く、底部は高台の位置より下がる形態から 10 世紀中頃以降の所産とみられる。第５層として取り上げたが、混入品とみられる。

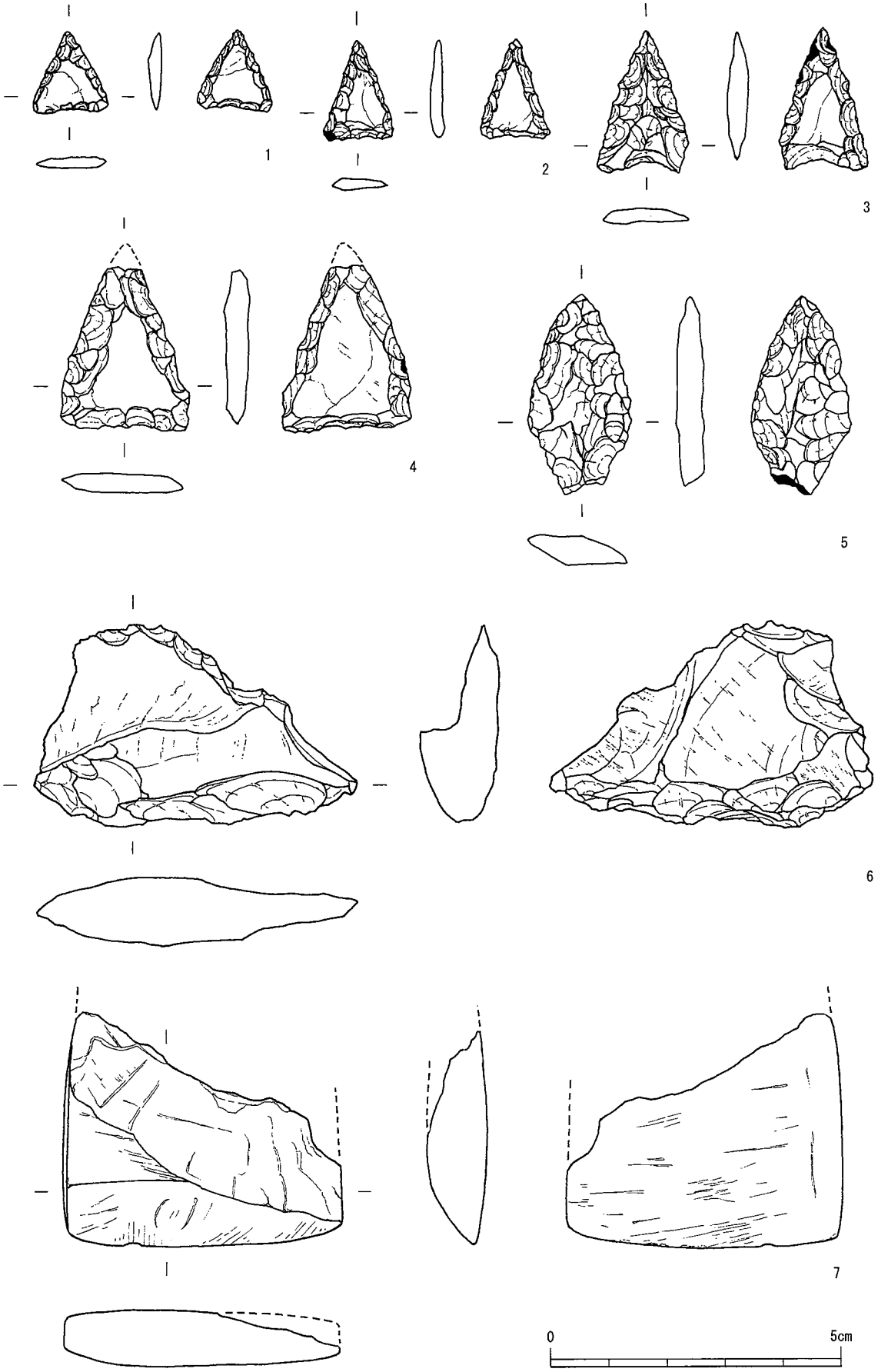
以上の古代の土器については、とくに土師器は精良な胎土や橙色を基調とした色調、製作技法から、一部に在地産を含む可能性はあるものの、大半は難波宮跡出土品などと比べても遜色のないものである。おそらく共通の生産地から難波宮を通じ、あるいは当地に直接供給されたものと推定される。土師器が示す時期は、杯や皿などに個体ごとのバリエーションが強く限定しがたいが、９の高杯や 13 の甕など特徴から７世紀後半を中心とした時期の所産とみられる。また、須恵器については、23 などやや新しい様相もみられるが、杯や椀に比較的深いタイプが多いこと、杯においては高台の付くタイプが全く見られないことから、多くが７世紀中葉～末の比較的まとまりのある時期のものと思われる。一時期とはいえ古代的な様相をもつ遺物の出土は、政治的中枢の動きとも連動した在地首長層の活動を想定させる。時期がなお明確でないものの、建物２など大型建物の性格や出現の背景を考える上で重要である。

（６）石器

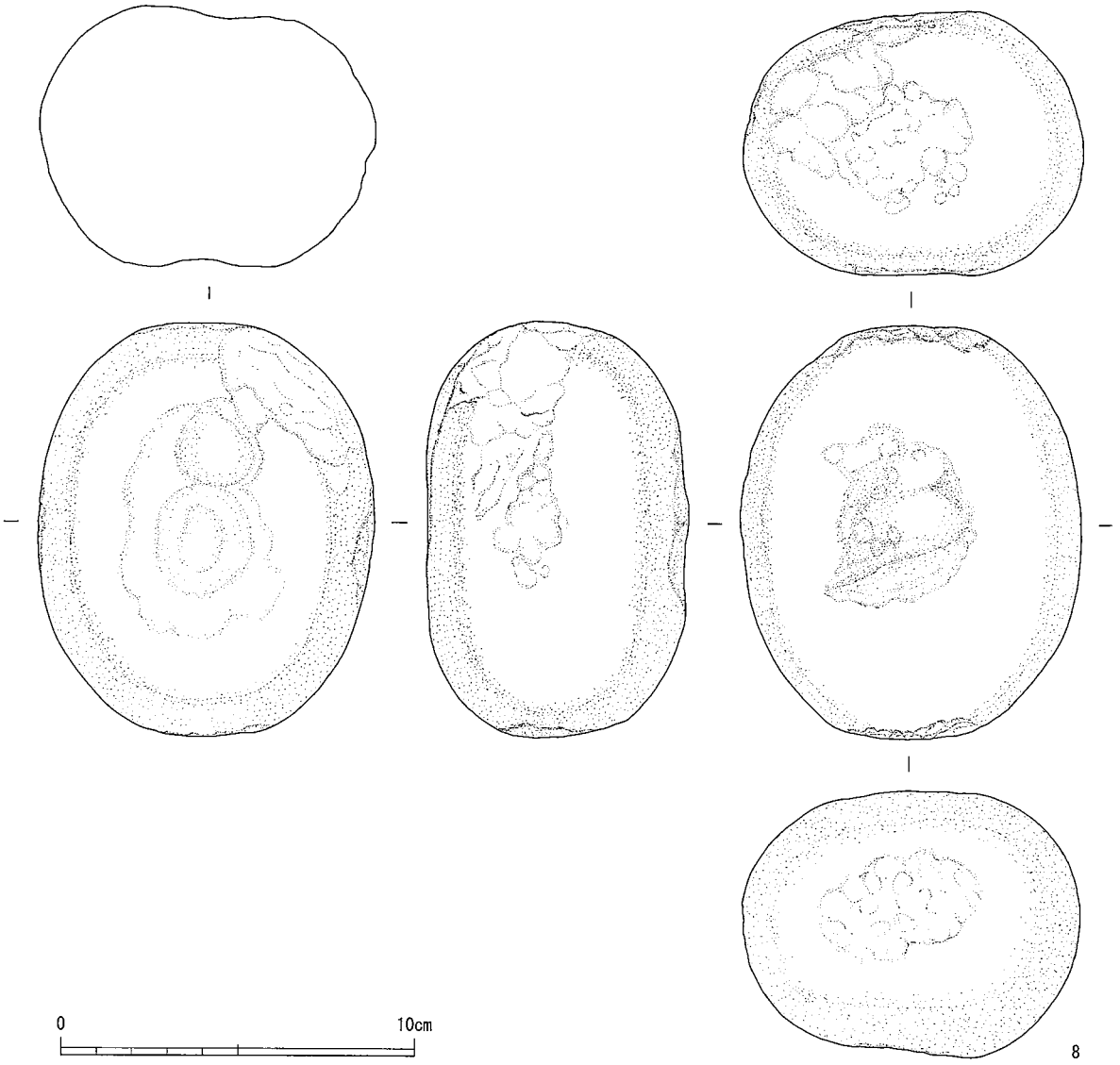
石器では石鏃、扁平片刃石斧、敲石、砥石のほか、楔形石器とみられるものがある（第 35 ～ 37 図、図版 26・27a)。出土位置は、包含層出土のものとして、４、５が第４層～第５層上層、７は第５層、９は第５層上部、10 は第５層下部、２、６は第５層最下部、１は第６層上面、遺構出土のものとして、３が第５層下部溝 11、８は第５層下部 SP-64 から出土した。

１～５は石鏃である。１は平基無茎式で、長さ 1.35cm、幅 1.3cm、厚さ 0.2cm。重量は 0.28g を計測する。２も平基無茎式で、長さ 1.7cm、幅 1.2cm、厚さ 0.2cm。重量は 0.33g を計る。１、２はともに 0.5g を下回る非常に小さなもので、縄文時代的な様相を見せる。２点とも第５層最下部以下の出土で、土器は共伴しないが層位的には整合する。３は凹基無茎式で、長さ 2.4cm、幅 1.5cm、厚さ 0.3cm。一部欠失するが重量は 0.84g である。４は平基無茎式で、長さ 2.8cm、幅 2.2cm、厚さ 0.5cm。重量は今回出土中最大の 3.07g を計測する。５は凸基式で、長さ 3.5cm、幅 1.7cm、厚さ 0.5cm。基部を欠失するが重量は 2.69g を計る。石鏃はいずれも二上山産とみられるサヌカイトを石材とする。６は楔形石器とみられるもので、現長 3.5cm、幅 5.4cm、厚さ 1.4cm、重量 21.21g を計測する。一辺（図の下）に両極打法によるとみられる剥離面を残し、左右の縁辺は潰れている。片方は大きく欠失し完存しないが、破損後の縁辺に再度剥離が加えられ、他の用途に転用されたらしい。石材はサヌカイト。

７は扁平片刃石斧の刃部破片で、現存する長さ 4.0cm、幅 4.7cm、厚さ 1.0cm を計る。側面は幅７mm の面をなし、中央部は厚さ１cm で膨らむ。刃部の角度は約 45 度で、刃先には使用に



第35図　石鏃・楔形石器・石斧（1：1）

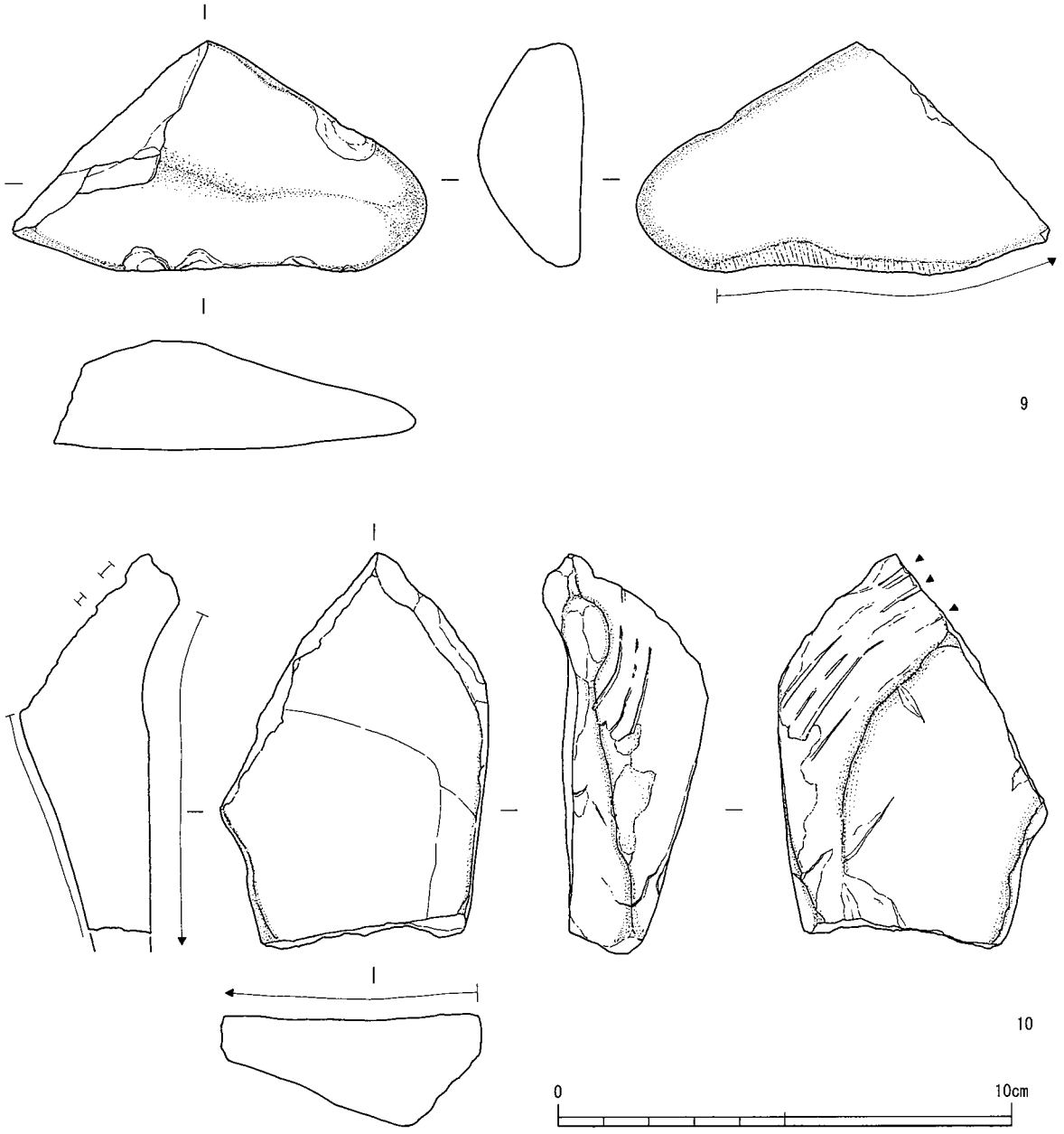


第36図　敲石（1：2）

伴うわずかな剥離が認められる。表面は風化し、明オリーブ灰色（5GY7/1）を呈するが、内部の未風化部分はオリーブ灰色（5GY5/1）を呈する。石材には縞状の節理が発達し、使用中に節理面で剥離し放棄されたらしい。

８は敲石で、やや扁平な卵形を呈する。長径11.6cm、短径9.6cm、厚さ7.3cm、重量1208.9gを計測する。台石として使用するには安定が悪く、手にもって振り下ろすハンマーのような用途が想定される。６面ともに使用痕とみられる剥離や潰れが認められ、うち一面が長さ7cm、幅５cm前後の比較的なめらかな凹面をなしているのに対し、それ以外は敲打によるとみられる径２～４mmの窪みが多く観察される。石材は花崗岩を主たる母岩とする砂岩で、粒径は0.1～0.5mmと均質で、長石、石英、チャートの他、少量の金雲母が確認される。河原の転石を採取したものとみられる。

９は自然石の一部を砥石に使用したもので、現存する長さ9.0cm、幅5.1cm、厚さ2.5cmを計る。やや鋭利な一辺に垂直方向に走る幅１mmの粗い擦痕が７cmの長さにわたり認められる。石材は粒径0.1mm未満の細かい砂岩で、河原の転石以外、段丘層中にも普通にみられる礫種である。

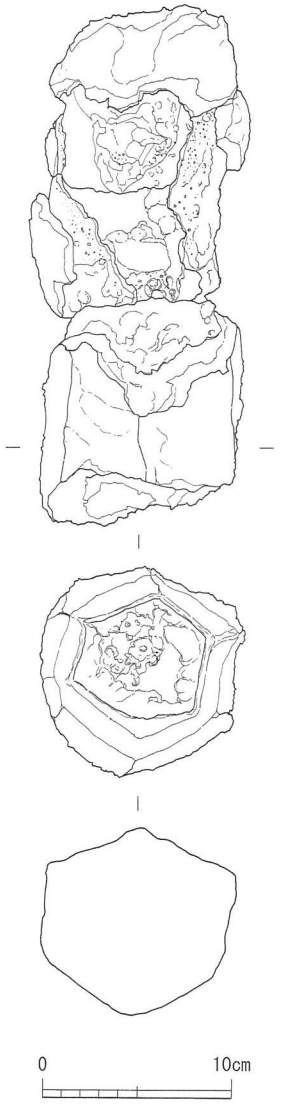


第37図　砥石（2：3）

10も自然石の一部を砥石に使用したもので、現存する長さ8.3cm、幅6.2cm、厚さ2.7cmを計る。凹面をなす一面には研磨による砥面と稜線が観察される。もう一方の面も平滑な面をなし、砥面として使用された可能性が高い。側面は粗面であるが、使用痕とみられる幅1～4mmの傷が同一方向に7本程度みられ、砥石全体がいく種類かの用途に供されたと推定される。石材は9と同質の細かい目の砂岩である。

（7）その他の遺物

焼夷弾　第1区周囲の排水溝を掘削途中、北西コーナー付近の第5層中より出土した。全面錆びで覆われ、溶融の痕跡を認めることなどから、出土時には鞴の羽口などの可能性を想定した。



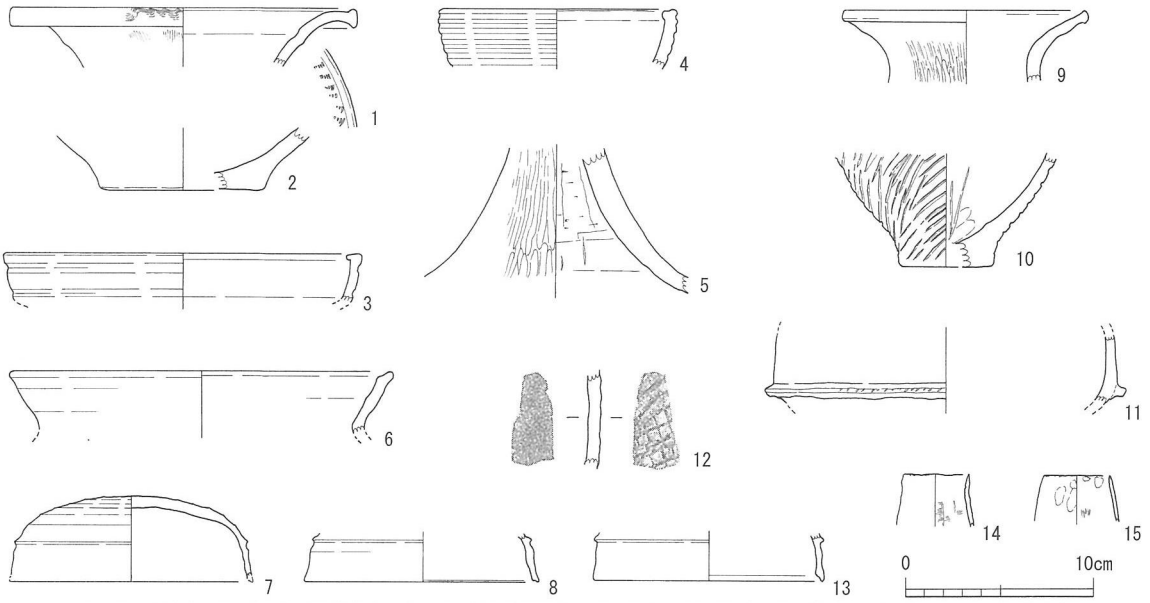
第38図　焼夷弾（1:4）

しかしながら、整理段階での観察の結果、断面が６角形を呈すること、長い筒状を呈すること、内部に溶融の痕跡を示すことなどから大戦末期の焼夷弾と判断したものである。

焼夷弾（第38図、図版27b）は、現状の長さ27.6cm、幅約10cmで、表面より２cm前後は錆で覆われ、その内側に幅７cm前後の断面６角形の金属質の部分が観察される。この金属質の内部も、部分的に錆と溶融した金属塊で満たされており、溶融物の表面には無数の細かい発泡の跡が残る。大戦末期に投下された焼夷弾にはいくつかの種類がみられるが、一般的には先端に錘が付き、後尾に断面６角形の長い鉄製の筒が付くものが多い。幅は概ね６～７cmで今回のものとほぼ同じ大きさである。

終戦直前の昭和20年６月７日から７月30日にかけて、市域では６回の空襲を受けたことが記録されている。６月15日の空襲では、今在家から利倉東、曽根、長興寺に至る広い範囲が焼夷弾攻撃の対象となり、曽根に位置する今回の調査区もそのエリアにある。出土した焼夷弾はこの時に投下されたものとみられ、当時の水田面から約１ｍの深さまで突き刺ささって第５層中にとどまり、内部の油脂がその後も燃焼を続け、本体を溶融させたものと推定される。

各遺構出土の混入遺物（第39図）　第６層上面の各遺構出土の混入遺物としては、弥生時代中期、弥生時代後期後半～終末期、古墳時代中期の須恵器・土師器・製塩土器がある。うちSP-47出土の須恵器片は、格子目タタキを有し、上述の韓式系土器とともに半島色を窺わせる。



１～５：土坑１、６～８：掘立柱建物２、９・11：掘立柱建物３、12：SP-47、10：SP-40、13：SP-39、14：SP-64、15：第５層下部

第39図　各遺構出土の混入遺物（1：4）

第４章　まとめと課題

第６次調査の結果、豊島北遺跡に関する従前からの知見に加え、いくつかの新たな事実が判明した。過去の調査成果を含め、現時点で想定される遺跡の動向などを含め概括したい。

弥生時代前期　豊島北遺跡から前期の土器が出土したのは今回が初見である。時期はＩ様式中段階を前後する時期に相当する。土器は転磨や風化の痕跡を残すものが多い反面、残存状態が比較的良好なものも多いことから、当調査区を含む至近の場所に集落が存在したことは明らかである。地形から判断する限り、北方段丘崖との間が最も可能性の高い場所である。沖積低地に所在する前期集落としては、勝部遺跡、小曽根遺跡があり、いずれも千里川、天竺川流域の中心的な集落と目されるが、豊島北遺跡は両者の中間地点ともいうべき位置に所在する。今回、二大河川流域以外の前期集落の存在をあらたに確認できたことに加え、野畑春日町遺跡や山ノ上遺跡などと同様、前期の土器を出土しながら中期以降に継続しないなどの特徴を示し、当該地域における農耕集落の定着過程をあらためて検討する材料を提示したものといえる。

弥生時代中期　前期同様、包含層からまとまりある数量の土器が出土した。様式的にはⅣ様式２～３段階（森田編年）を中心とする。第４次調査でもⅣ様式後半の土器を伴う遺構が検出されており、遺跡北東部に中期末を中心とした集落が所在したことは確実である。ただ、現資料による限り存続期間は極めて限定され、前期集落や後期後半期以降の集落との連続性は認め難い。短期の居住が想定される当集落の成立の契機として分村が想定されるが、千里川流域の拠点集落とみられる新免遺跡がⅣ様式段階に集落規模を最大化させる点から、豊島北集落もまた小曽根集落などからの分村を契機として成立したものである可能性が高い。この中期末における低地集落の北への志向は、その後段丘上に成立する曽根遺跡後期初頭集落への過渡的様相としても捉えうる。台地南端部における突如ともいうべき曽根集落成立の背景を考えるに際し、豊島北遺跡の中期集落の動向には今後とも注視する必要がある。

弥生時代後期後半～終末期　これまでに実施した第１、２、４次調査において井戸、土坑、溝など生活遺構を確認し、さらに今次調査で井戸等を検出したことにより、遺跡北東部を中心に当該期集落の所在が確実視されることとなった。一方、第３次調査で複数の円形周溝墓が検出されていることを勘案すると、段丘崖を控える北方に生活領域、南部に埋葬領域を想定することが可能となる。また、遺跡東方に接する服部遺跡でも前方後円形周溝墓を含む大規模集落の所在が知られ、両者には密接な関係が想定される。集落としての一体性の評価はなお今後の調査の進展に委ねられようが、段丘崖直下という共通した地形条件、ならびに山陰系や北近畿系の土器の出土という事実を踏まえるなら、東西方向に想定される「道」を介し、有機的につながる一連の集落であった可能性は高い。

なお、服部遺跡では弥生時代後期後半～終末期に当地域でも有数の集落や墓域が存在したにもかかわらず古墳時代集落に継続しない。同じことは当遺跡についても指摘でき、古墳時代前期に継続する穂積、利倉西、小曽根の各集落とは対照的なあり方を見せる。古墳時代開始期の変動が各地域、各集落に与えた影響は一様でなかったことを示している。

古墳時代中期　包含層（第５層）を中心にTK208～23型式の須恵器、土師器、製塩土器等が出土した。須恵器は、所属する時期や胎土、色調の特徴から陶邑産の可能性が高い。一方、土師器では須恵器技法を導入した壺、甕、高杯のほか、甑、タタキを残す甕、円筒型土器など、いわゆる韓式系の土器を含む。半島色の強い土器組成とともに、製塩土器の出土は、猪名川河岸に位置する河津の可能性の高い上津島遺跡、利倉西遺跡などとも共通する。市域ではほかにも穂積遺跡、北条遺跡、新免遺跡、蛍池東遺跡など同時期の遺跡が散見され、当該期、沖積低地や台地上一帯へ集落の分布が拡大する。大型倉庫を含む掘立柱建物群が検出された蛍池東遺跡を除くと、いずれも小規模な集落とみられるが、一方において、須恵器や製塩土器の出土は、古墳時代中期における分業生産や流通を前提とせずには考えがたい。巨大古墳の造営、さらには列島内外の諸関係をみるとき、生産性向上など政権基盤の安定確保は政権にとって不可避な課題であったとみられる。政権と親和性の高い桜塚古墳群の所在とともに、政治的ヒエラルヒーの末端に組み込まれた単位集落の広範な出現を物語るものと理解したい。豊島北遺跡もそうした集落の一つと推定されるが、今回、建物の存在を示す数個の柱穴を検出するにとどまり、集落としての具体像の解明は今後の調査に期したい。

飛鳥・奈良時代　第５層上面を検出面とする建物が４棟検出された。うち正方位の建物４は８世紀に属する。最大規模をもつ３間×７間以上の建物２の時期は、柱穴の重複関係から建物４に先行するが、柱穴に含まれる遺物は極めて少なく、第５層の下限の時期である７世紀中葉から８世紀までの時期幅の中で捉えざるを得ない。建物１、３も同様である。とくに建物２は、当該期の建物としても規模が大きく、建物１などとともに一定規模の建物群を構成し、その中心的な建物であった可能性が高い。かかる建物群出現の背景については、第４層～第５層上層から出土した７世紀の遺物が参考となる。中でも第34図９の土師器高杯などは明らかに在地産ではなく、難波宮出土のものと共通し、他の杯類も同様である。かりに建物２が７世紀の所産とすれば、律令的な様相をもつこれらの土器が、単に生産地を共有するというにとどまらず、在地と宮都の政治的な関係を直接明らかにするものとしての評価を可能にする。ただし、現時点で建物群の時期が明確でない以上、一つの見通しとして述べておくにとどめたい。

つぎに建物群の方位について。８世紀の建物４が正方位であるのに対し、それ以前の建物は西に軸を振り、正方位を採用しない。丘陵上の建物が方位を地形に合わせることは一般的にみられるが、沖積低地にあって後の条里につらなる土地区画への志向が全く認められないことに留意する必要がある。このことは、小曽根遺跡第19次調査の小区画水田（７世紀）も、正方位を採らず西へ18度振ることと同じ位相にあるものとして評価できる。一方、第３次調査の９世紀建物や今次調査の建物５（10世紀）も方位を西に振ることから、８世紀の正方位志向は突出している。いずれにせよ、当地域における本格的条里区画の施行は11世紀を待たねばならない。

平安時代　10世紀の建物１棟を検出した。単独の検出であることや、包含層、各遺構から出土した遺物の中に10世紀以降のものは極めて少ないことから、集落としての継続期間はさほど長くなかったものと推定される。また、当遺跡における９～10世紀の様相は、３次、５次調査の９世紀、５次調査の10世紀があり、地点により微妙に時期、様相が異なる。従前の知見を勘案すると、当遺跡内に相当規模の集落が展開していたとはみなしがたい状況である。

建物５以後、当地点は耕作地に変化していく。第５層上面で検出した耕作関係の溝は、いずれも第４層と同質の埋土で覆われており、第４層自体が集落廃絶以後の耕作土であることは明らかである。第４層の遺物で最も新相を示すものが建物５と同じ 10 世紀（黒色土器 A 類など）の所産であり、それ以後のものを全く含まないことから、建物５の廃絶とほぼ同時に耕地に転換した可能性が高い。

耕作に関係する溝は方位から２つのグループに分かれる。正方位を採用するもの（溝１、２、５～９）と、正方位からやや西に振るもの（溝３、４）である。出土遺物が少なく時期は限定できないが、後者は建物５と方位を概ね共通にすることから、建物廃絶直後の耕作溝とみることができる。したがって、10 ～ 11 世紀、当地点では集落廃絶後、一気に条里型の耕作プランが施行されたのではなかったようである。

なお、今回検出した溝１は、その規模と方位性から単なる耕作溝ではなく明らかに条里プランに基づく区画溝と理解され、後の近世水田区画、近現代の土地境界として永く存続した。さらに、延長を南にたどると第３次調査で検出された南北の溝につながる可能性が高く、当地周辺の基幹的な区画ライン（水路）として機能した可能性が高い。ただ、第 40 図にも示すように、その走行ラインは必ずしも航空写真や地形図から想定された坪境とは一致せず、しいていえば、坪東西のほぼ中央付近にあたる。その性格の解明は今後の調査に委ねたい。

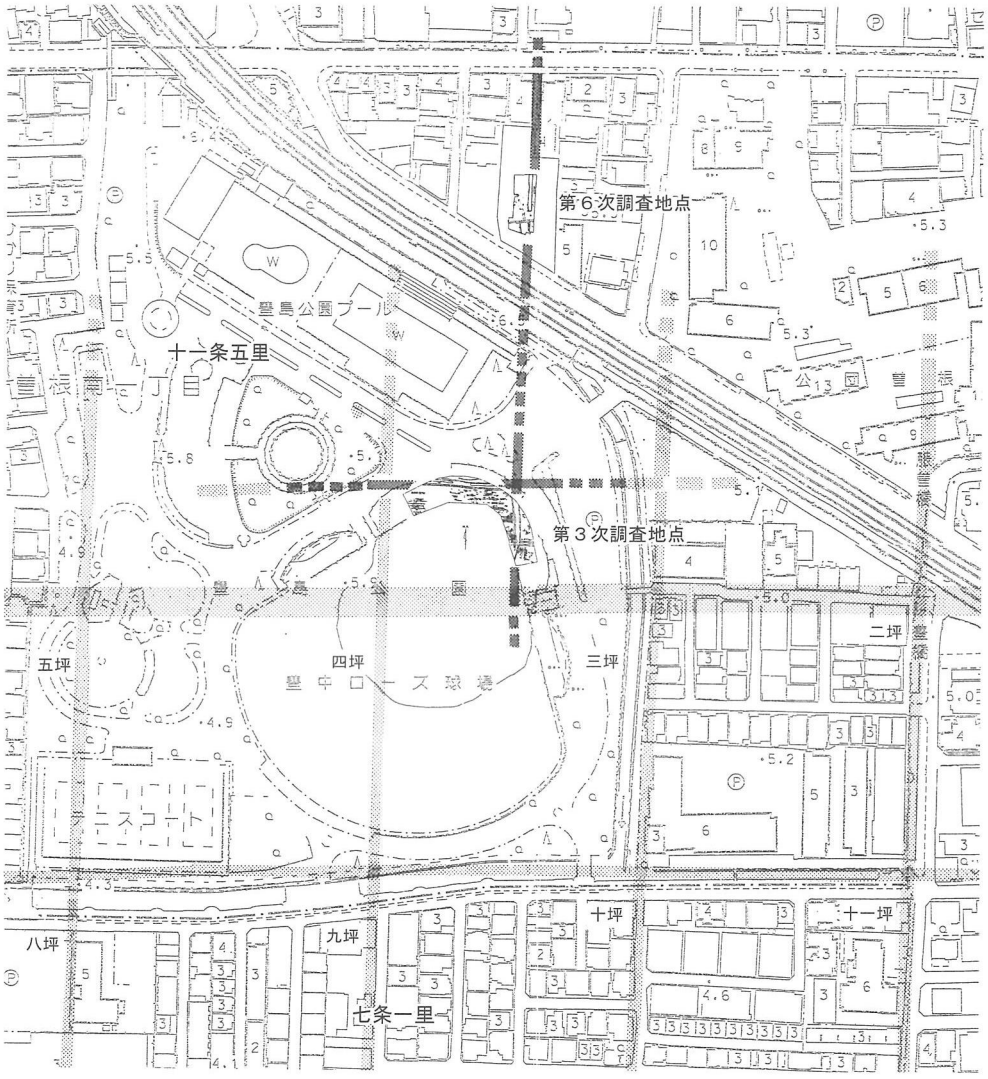
遺跡の立地とその成因について　最後に、当遺跡の立地と成因についてみておきたい。遺跡北部の段丘端部の状況を明治 18 年の仮製地形図で見ると、遺跡のすぐ北側の段丘崖を東西に分けるように幅約 80 mの開析谷の存在が注意を引く。芦田ヶ池と呼ばれるため池があったところで、現在、池は一部を残し埋め立てられ、公民館やホールなどの公共施設が建設されている。３つの枝谷から水を集めるこの谷は、豊中台地末端の浸食地形の一つであり、同様な谷地形は曽根、原田、岡町南などにも認められる。

芦田ヶ池の構築時期は不明であるが、石蓮寺村の山ヶ池が春日社荘園垂水西牧の経営に絡んで 15 世紀前半には史料中に現われることから、この池についても 15 世紀頃には存在した可能性が高い。さらに、中世後期以降、猪名川を取水源とし、豊島南部地域の基幹水路として重要な位置を占めた九名井（原田井）が、段丘縁辺を流下しながら先の開析谷の西側、曽根村付近で南側に流路を変え、天神池と称される池（豊島公園南西部）に落ちたあと、さらに南方の水田に用水を供給した。

このように、ため池や基幹水路による広域開発が行われた中世以降はともかくとしても、千里川、天竺川の二大河川のいずれの水系にも直接的に属さず、しかも九名井成立以前の豊島北遺跡の成因を考える際に、先の開析谷の存在は示唆的である。調査事例は少ないが、第２次調査で検出された水路のうち一つはこの谷へつづくとみられることから、弥生時代後期後半～終末期において、この谷の沢水を生活用水や灌漑用水として利用した可能性は十分に考えられる。弥生時代前期集落、中期集落についても、谷の沢水が有効な資源として活用され、このことが遺跡成立の要因の一つともなった可能性を想定しておきたい。

以上、いくつかの課題について述べてきた。多彩な内容をもつ豊島北遺跡の性格を明らかにするには、なお数次にわたる調査事例の蓄積が俟たれるところである。そうした中でも、弥生

時代前期集落の新たな確認と、７～８世紀とみられる大型建物の存在が明らかになったことなどは、市域の歴史を物語るうえでも極めて重要な資料となるものである。今回の調査成果が、今後の地域研究に活用されることを期待したい。



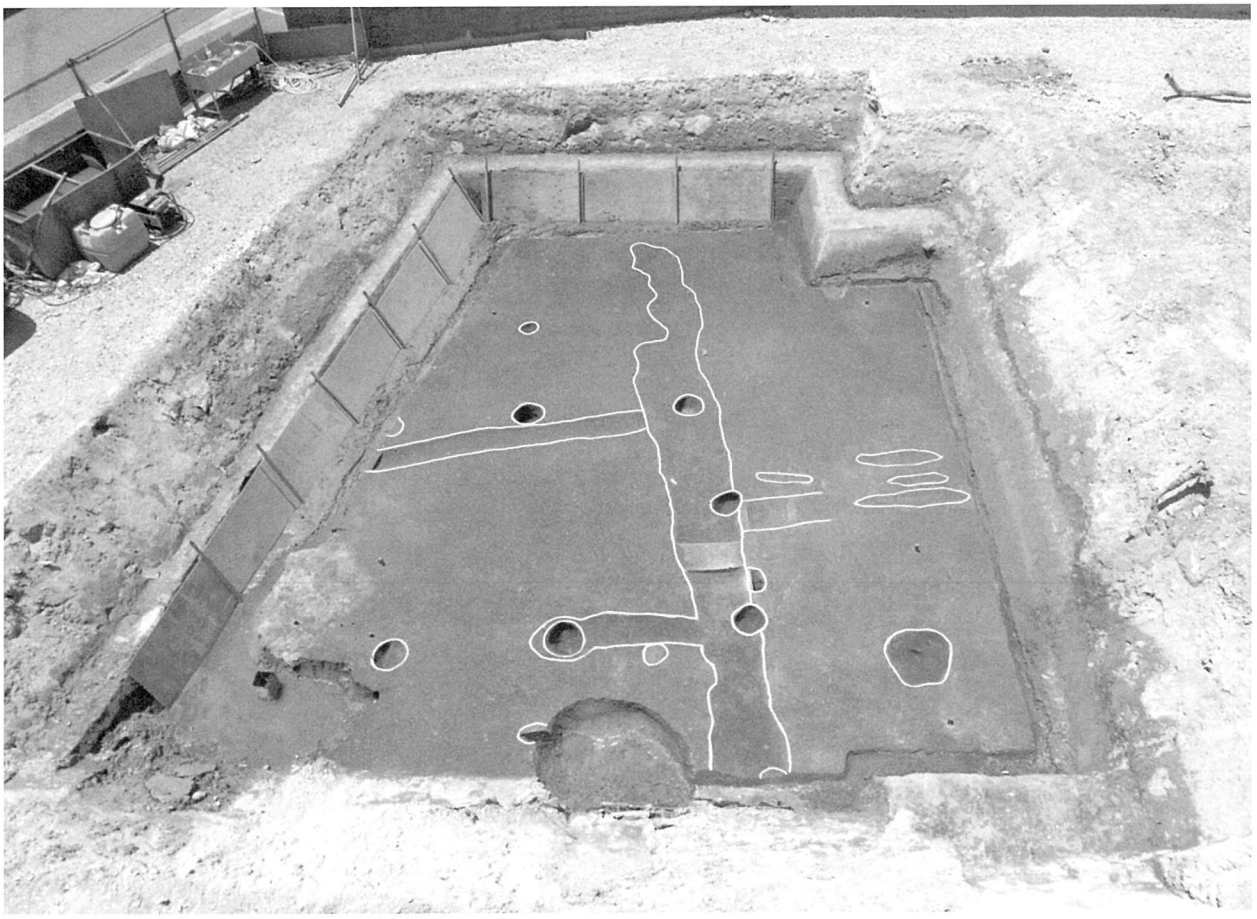
第40図　第３次・第６次調査地点と条理復元ライン（1：2,500）

※第３次調査地点北端で検出した東西の溝に相当するラインは、七条と十一条の里境とみる見解のほか、南出真助氏の指摘にみる古道の痕跡に相当する可能性もある（南出真助「条理地割に斜交する直線道路について」『アジアの歴史と文化』1997　追手門学院大学東洋文化学会編）

写　真　図　版

図版1　第1区南部　第5層上面

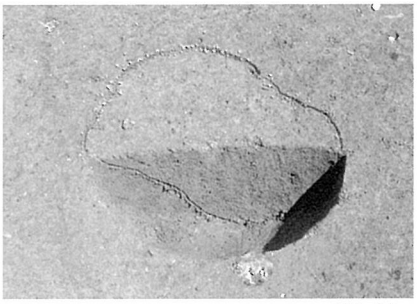
a．遺構検出状況（東から）



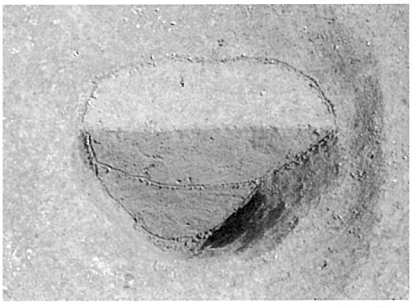
b．遺構完掘状況（東から）

図版2　第1区南部　第5層上面

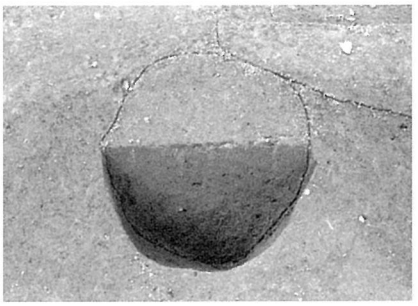
a．遺構完掘状況（南から）



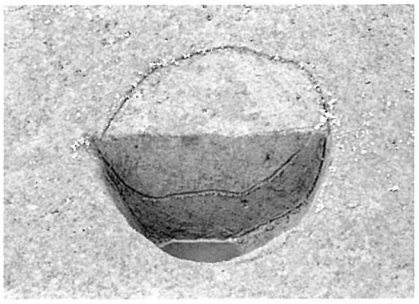
SP-44



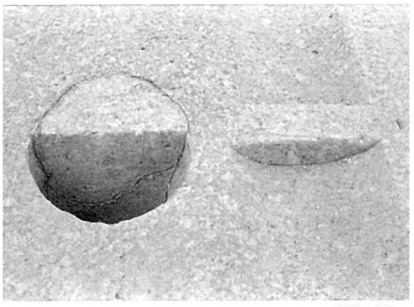
SP-45



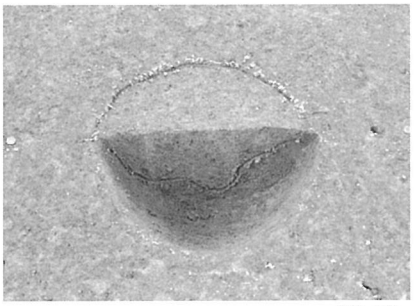
SP-47



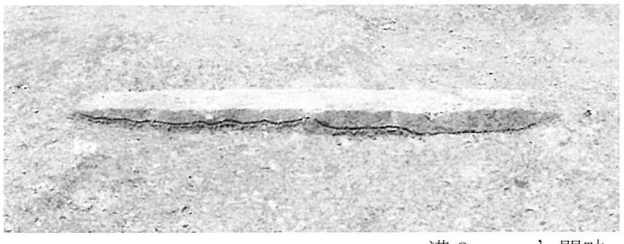
SP-48



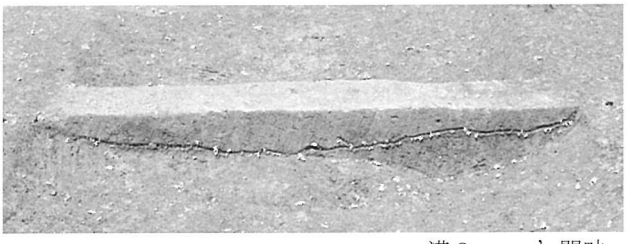
SP-49



SP-52



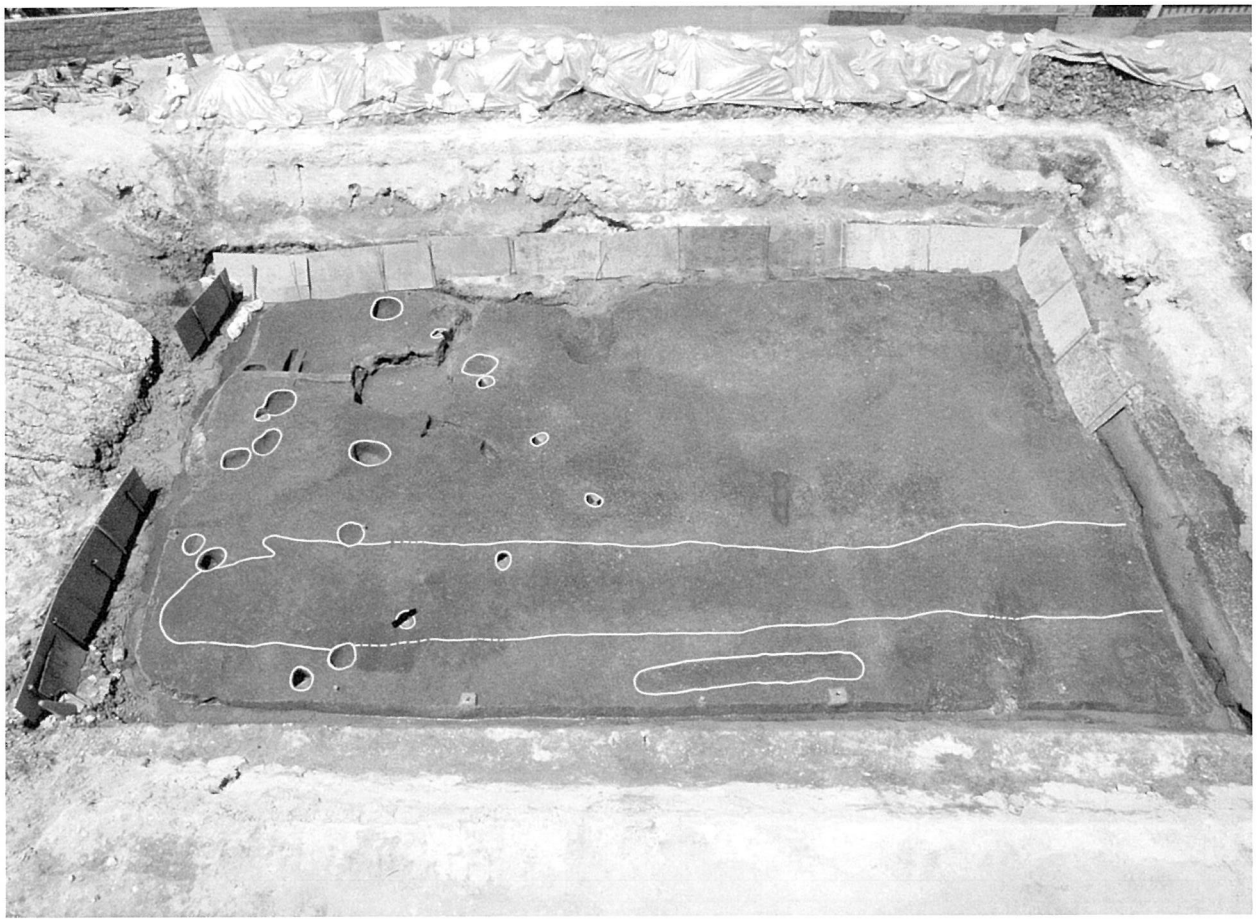
溝３　a-a’間畦



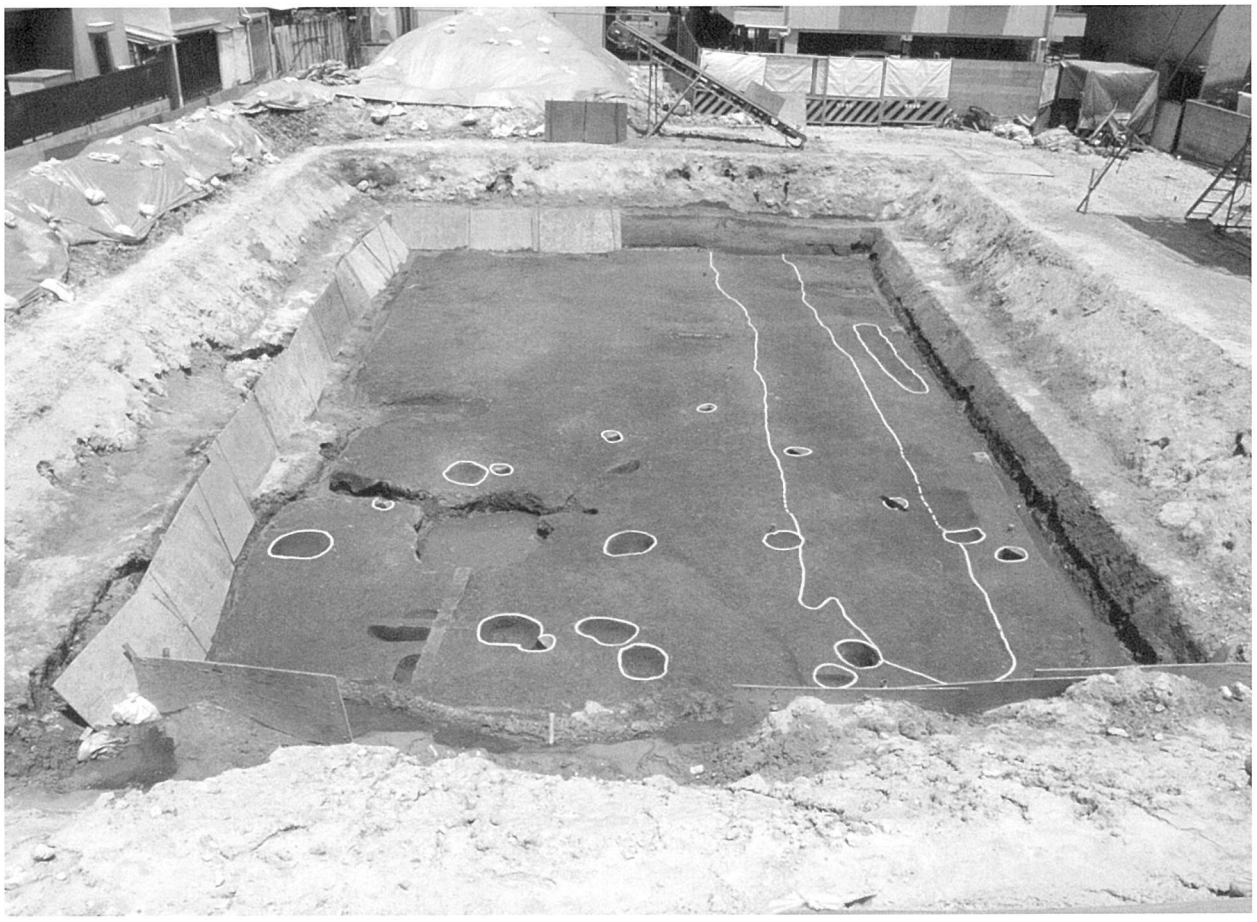
溝３　a-a’間畦

b．柱穴・溝　断面

図版3　第1区北部　第5層上面



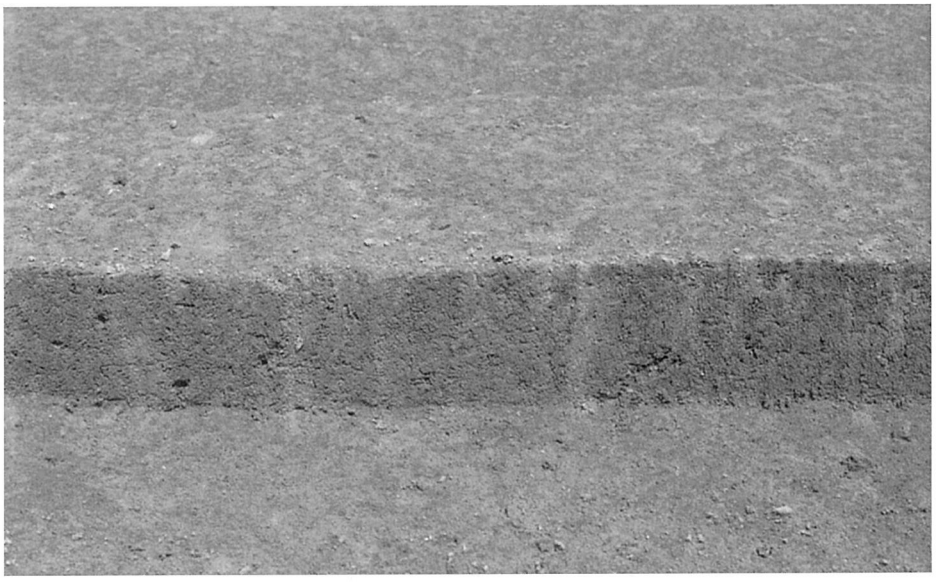
a．遺構検出状況（東から）



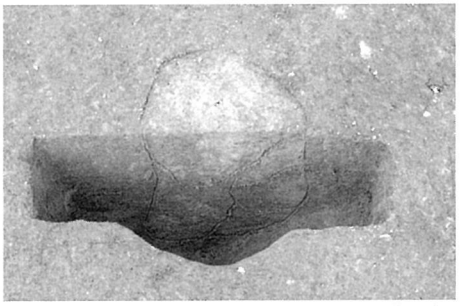
b．遺構完掘状況（南から）

図版4　第1区　第5層上面

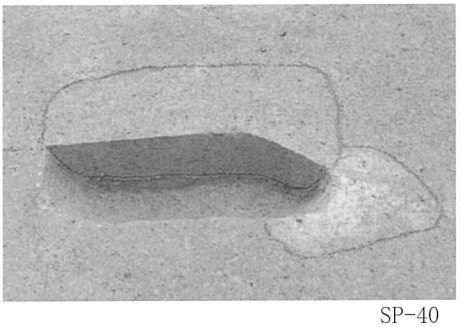
a．第１区北部　植物根株跡（西から）



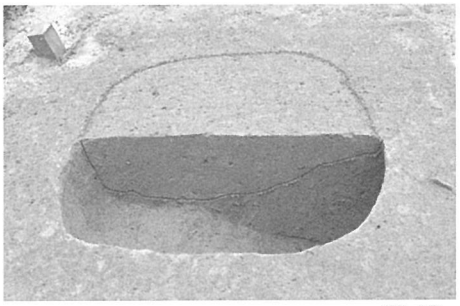
b．第１区南部　根跡断面（西から）



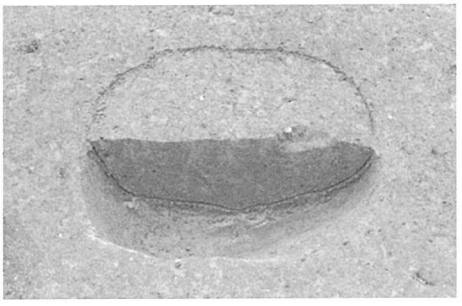
SP-10



SP-40



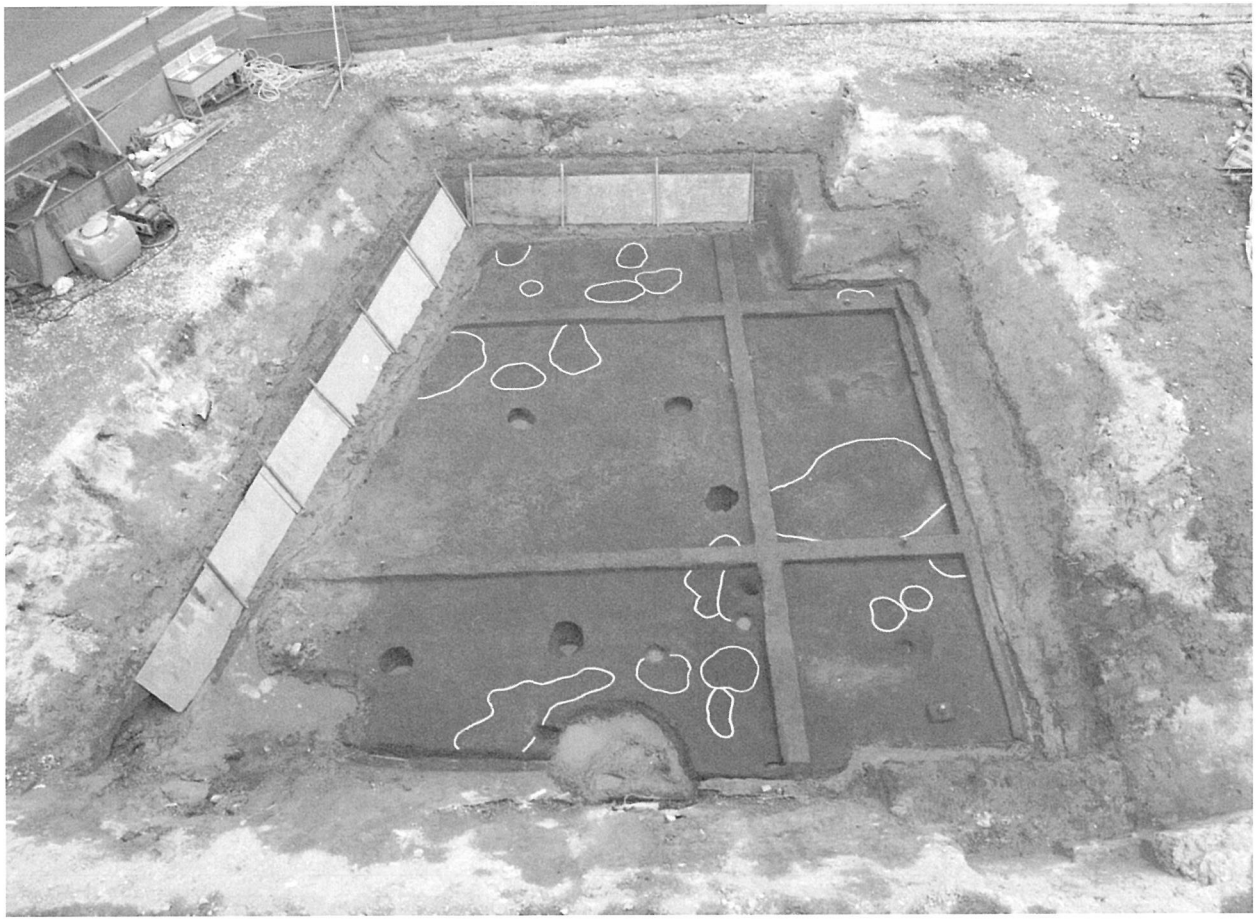
SP-26



SP-31

c．柱穴等断面

図版5　第1区南部　第6層上面



a．遺構検出状況（東から）

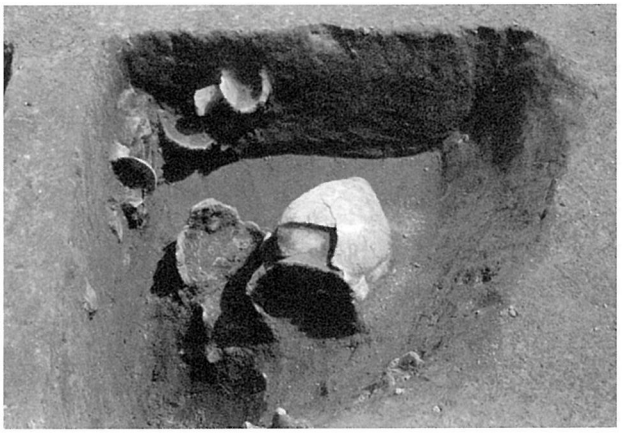
b．遺構完掘状況（東から）

図版6　第1区南部　第6層上面

a. 井戸1検出状況（東から）

b.　同　完掘状況（東から）

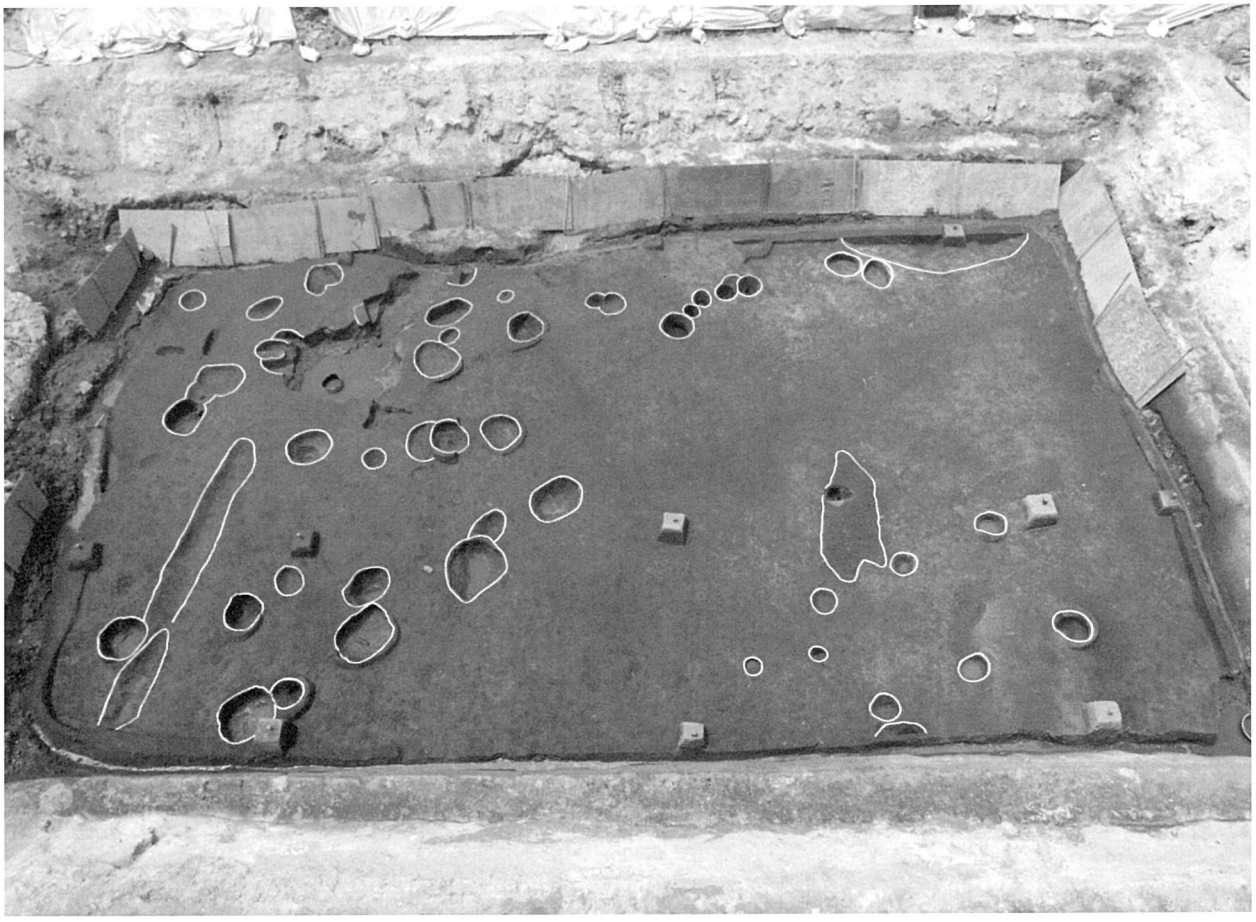
c.　同　遺物出土状況（北から）



d.　同　遺物出土状況（北から）

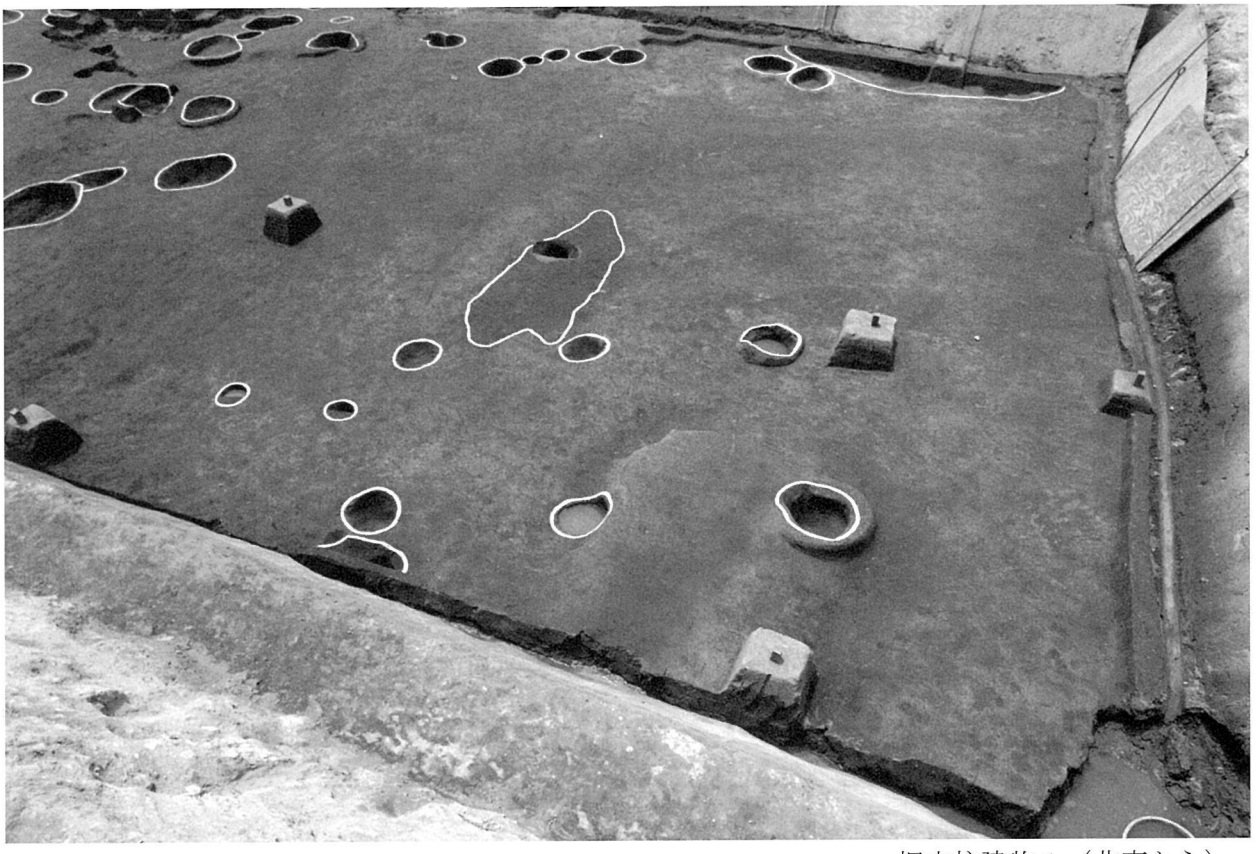
図版7　第1区北部　第6層上面

a．遺構検出状況（東から）



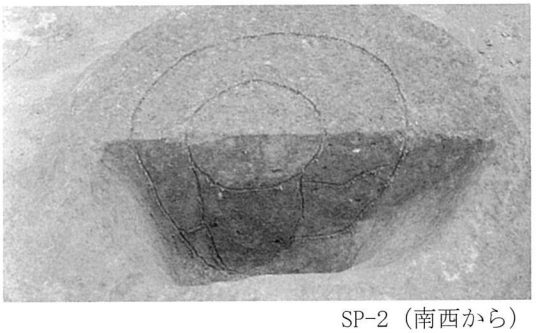
b．遺構完掘状況（東から）

図版8　第1区北部　第6層上面

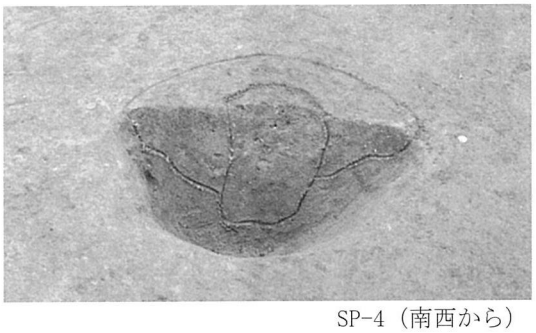


a．掘立柱建物１（北東から）

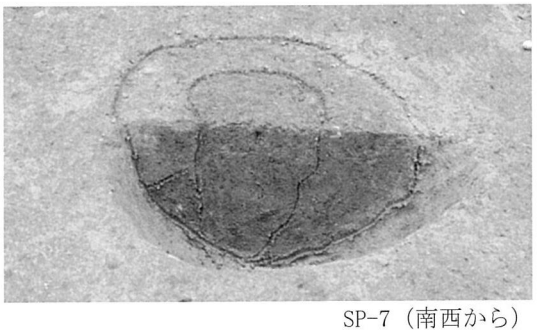
SP-1（南西から）



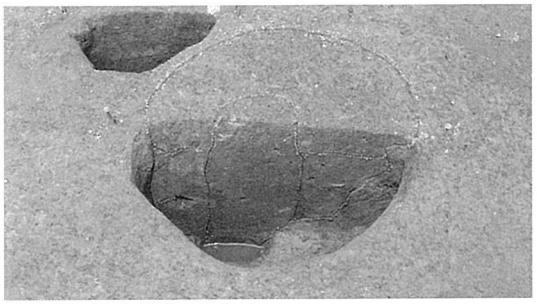
SP-2（南西から）



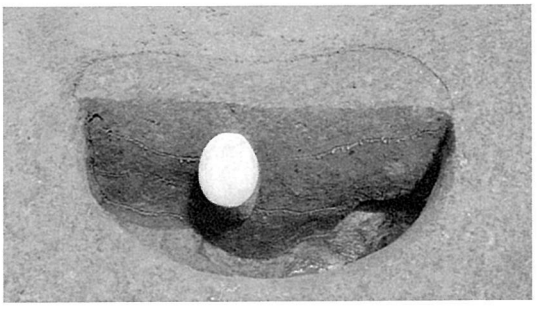
SP-4（南西から）



SP-7（南西から）



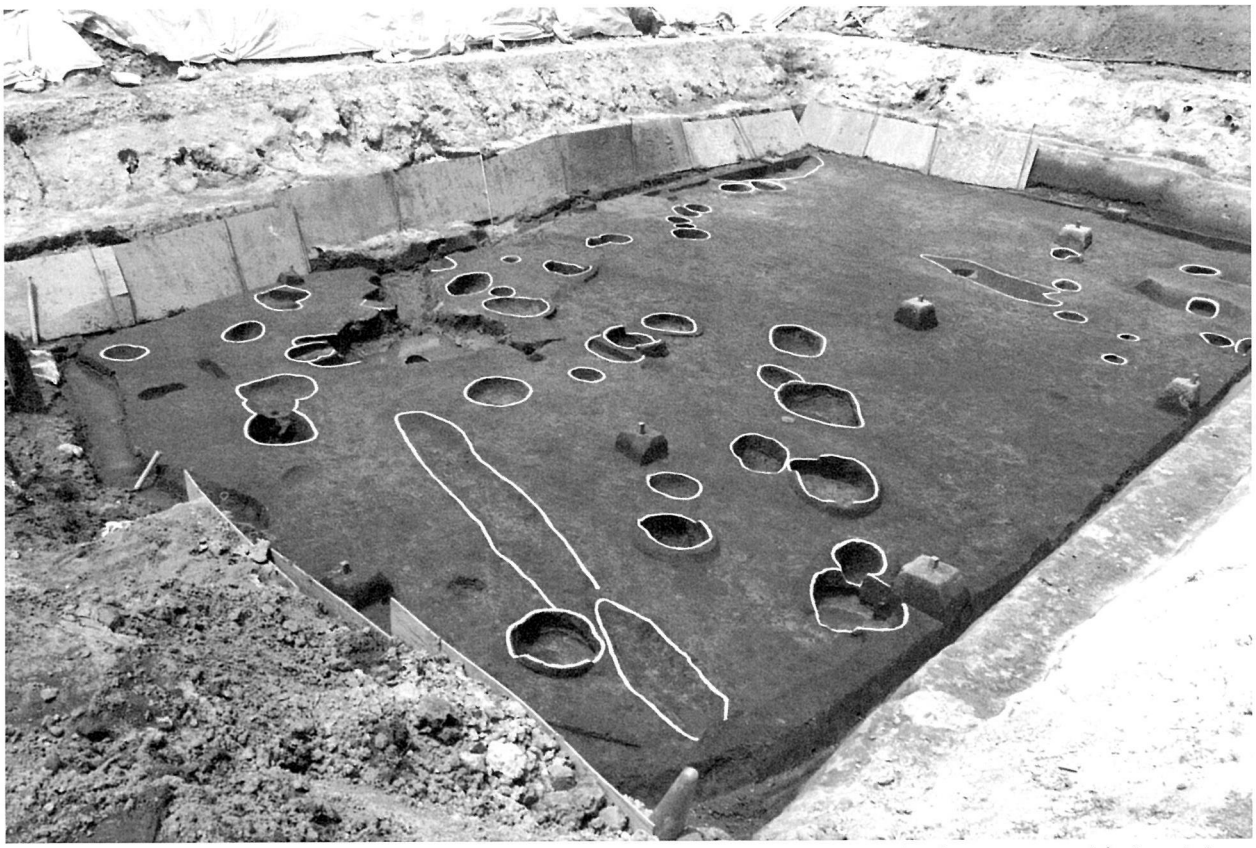
SP-61（南西から）



SP-64（南西から）

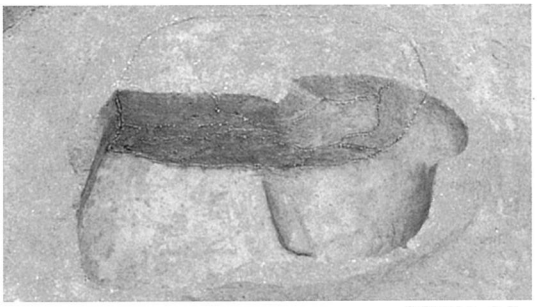
b．掘立柱建物１柱穴断面ほか

図版9　第1区北部　第6層上面

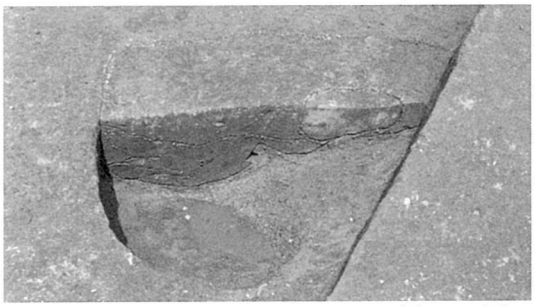


a．掘立柱建物２ほか（南東から）

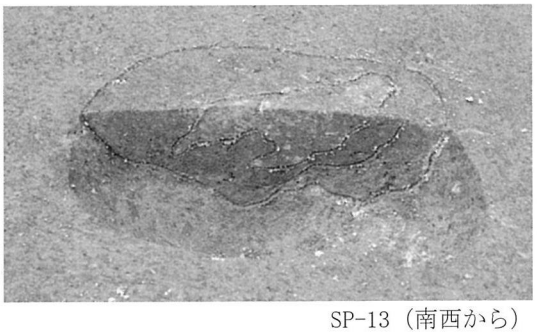
SP-9（南西から）



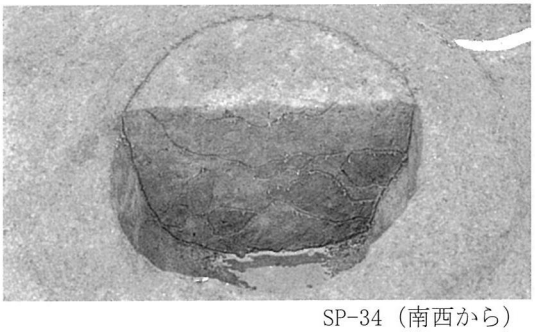
SP-10（南西から）



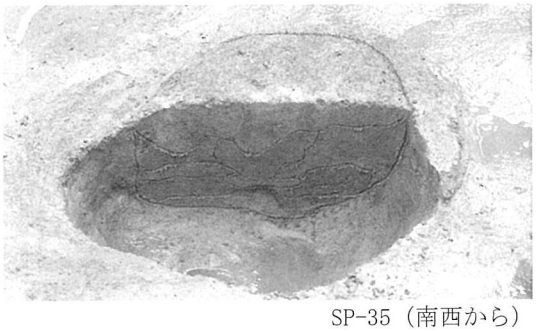
SP-11（南西から）



SP-13（南西から）



SP-34（南西から）

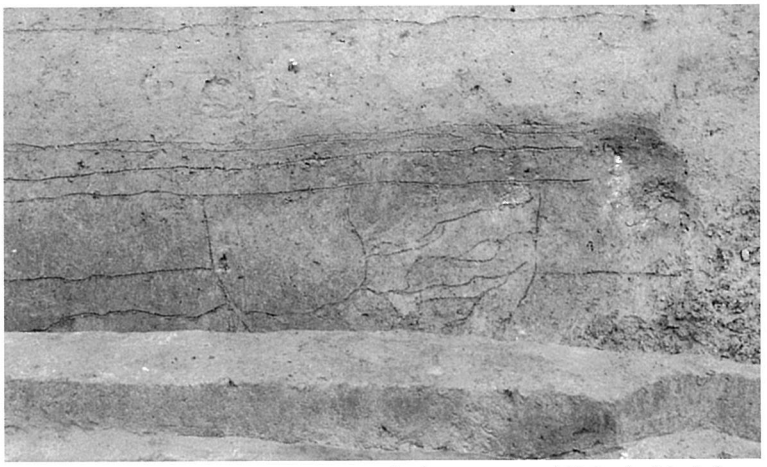


SP-35（南西から）

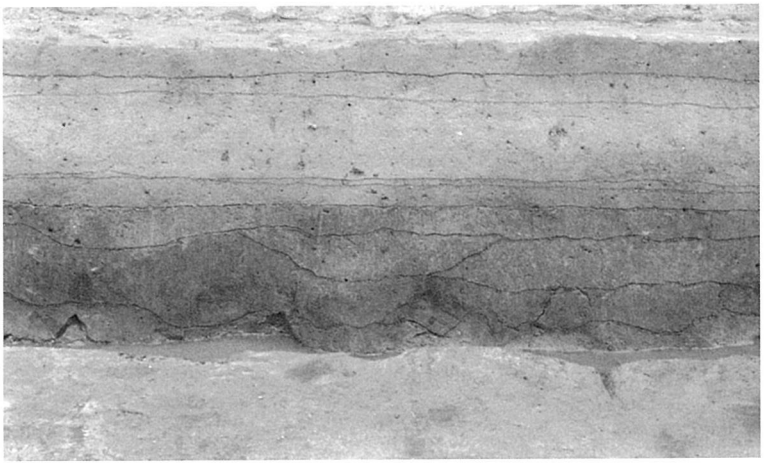
b．掘立柱建物２・３柱穴断面

図版10　第1区北部　東壁

a. 東壁断面（南西から）

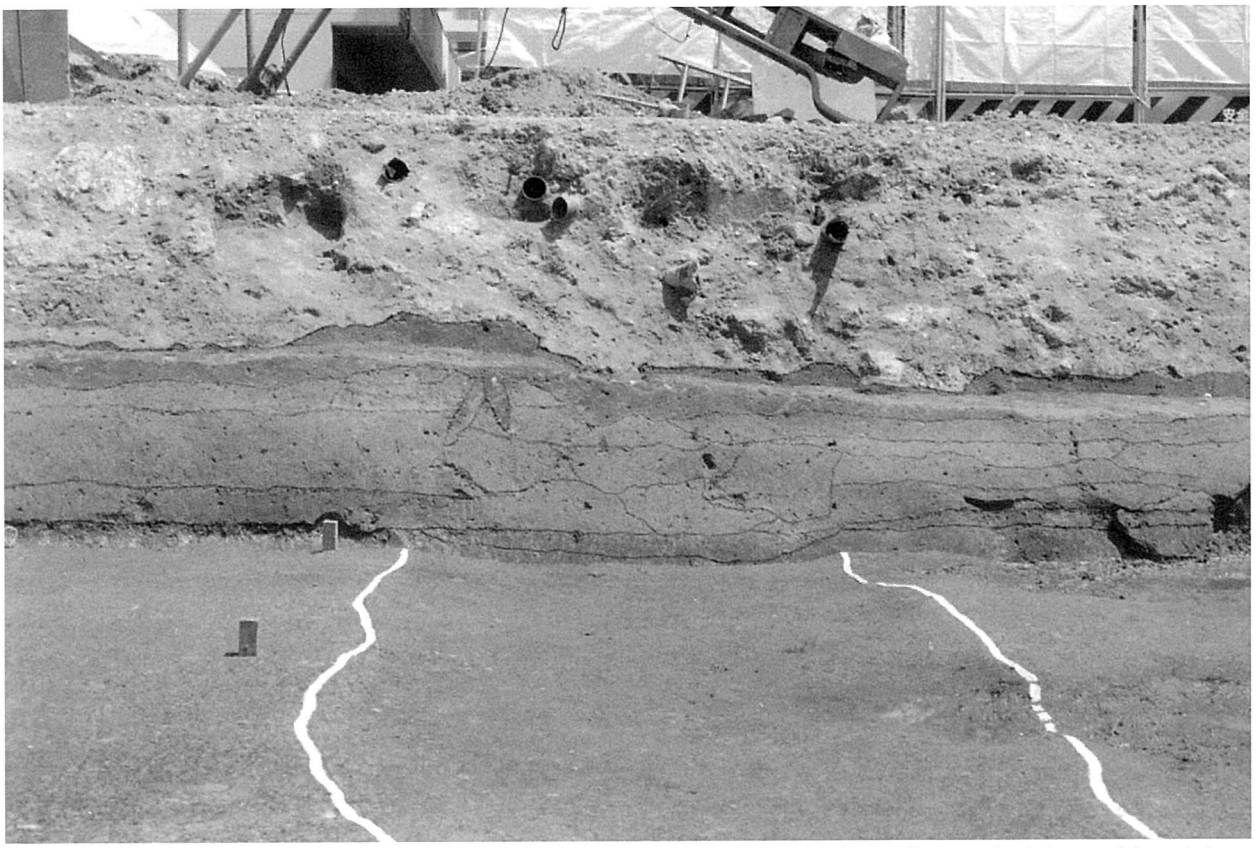


b. 同　細部　SP-36 付近（西から）



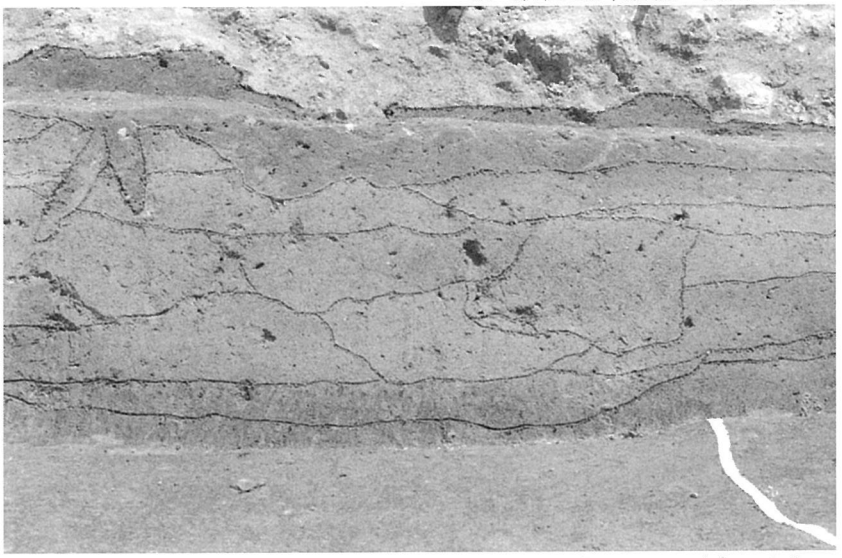
c. 同　細部（西から）

図版11　第1区北部　北壁



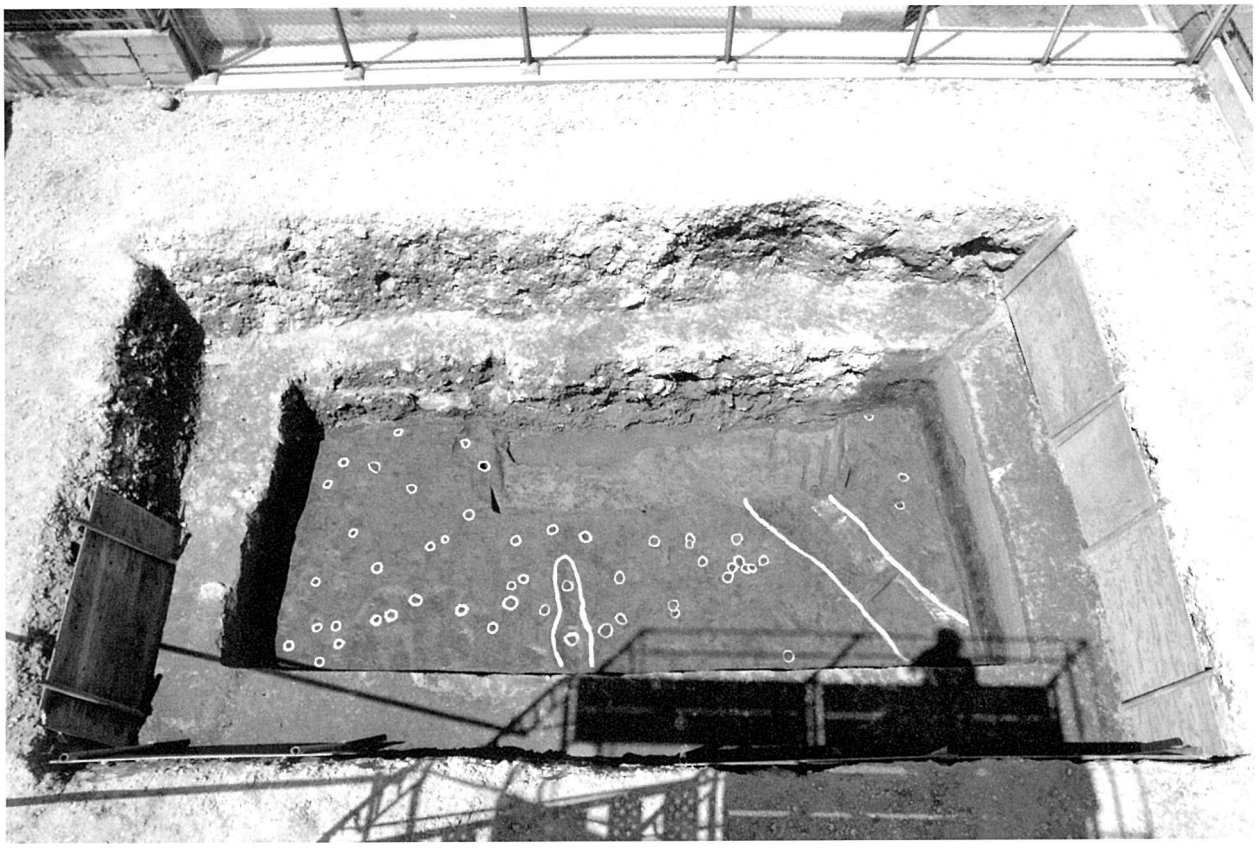
a．溝１と北壁断面（南から）

b．水田畦畔断面（南から）

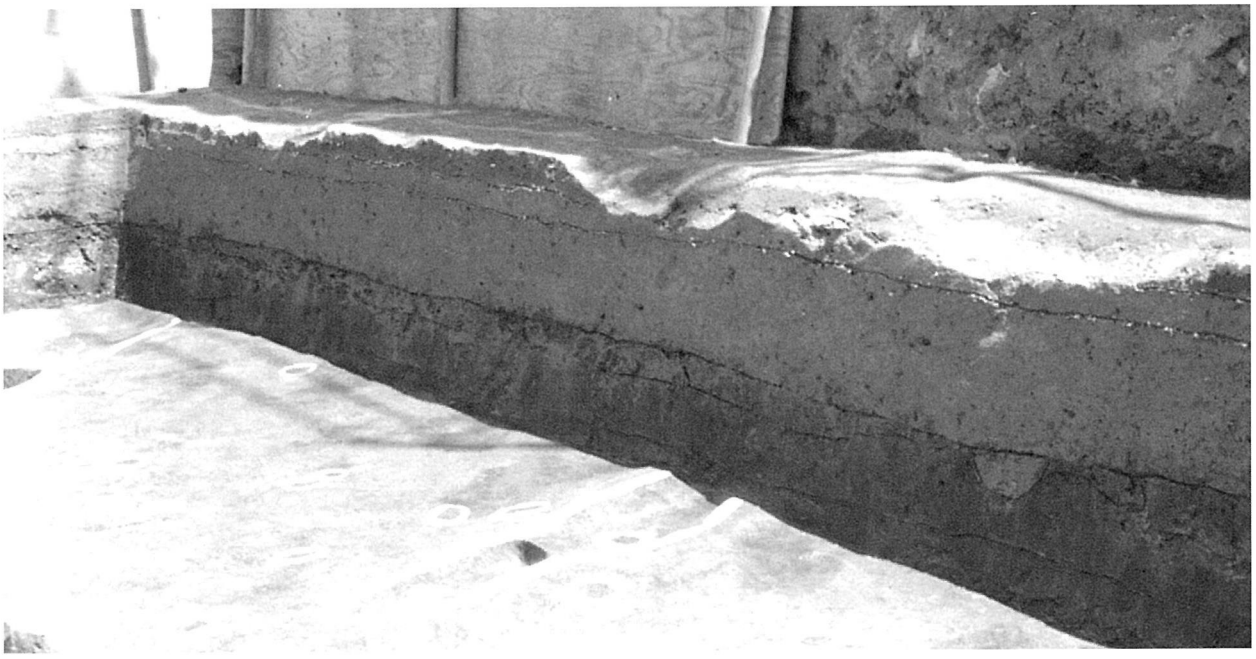


c．溝１断面（南から）

図版12　第2区　第6層上面

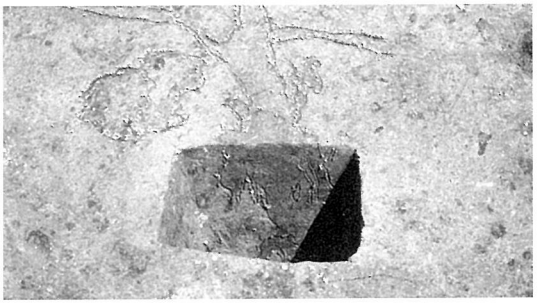


a．遺構完掘状況（南から）

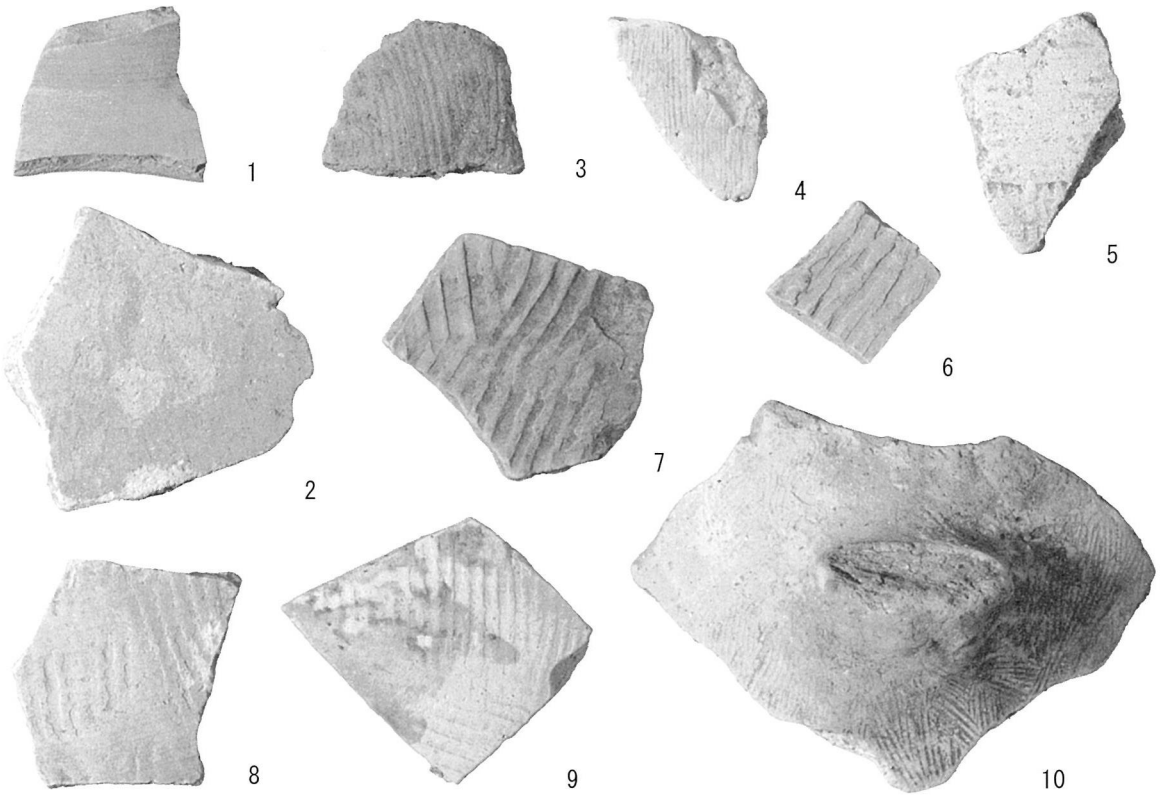


b．南壁断面（北西から）

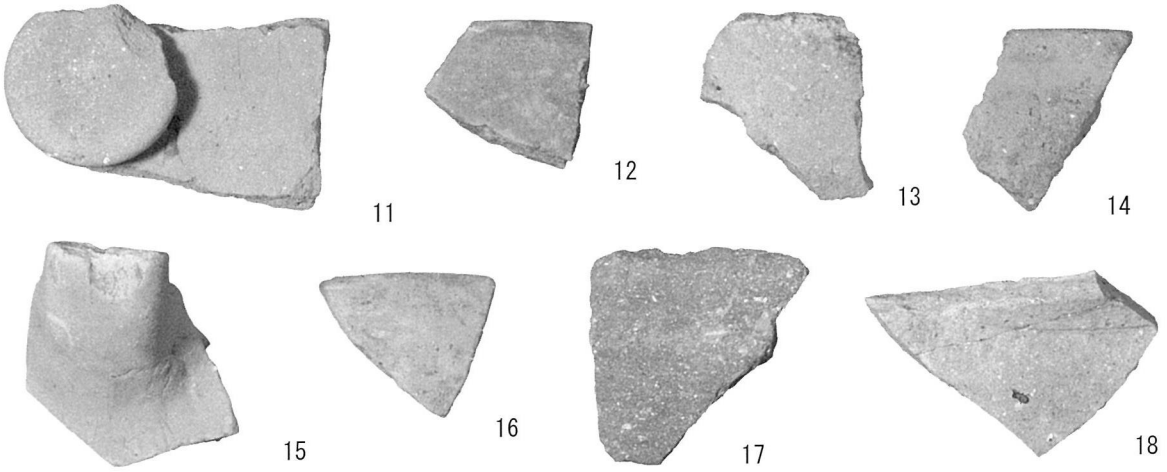
c．植物根跡断面



d．同（c 断面）

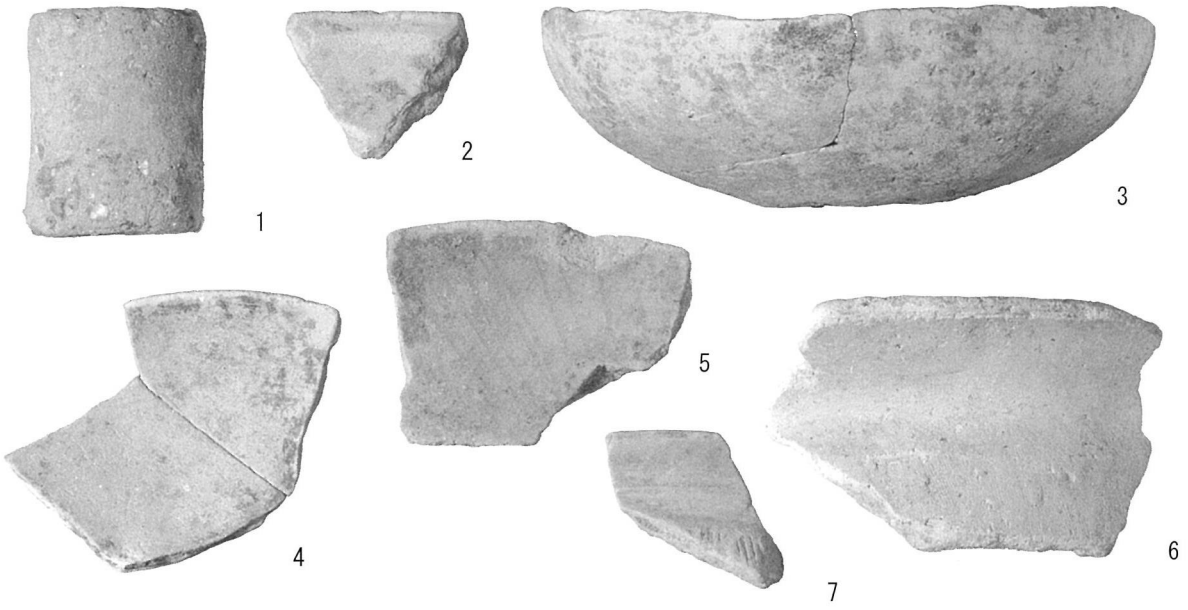


a．掘立柱建物２（第 11 図）

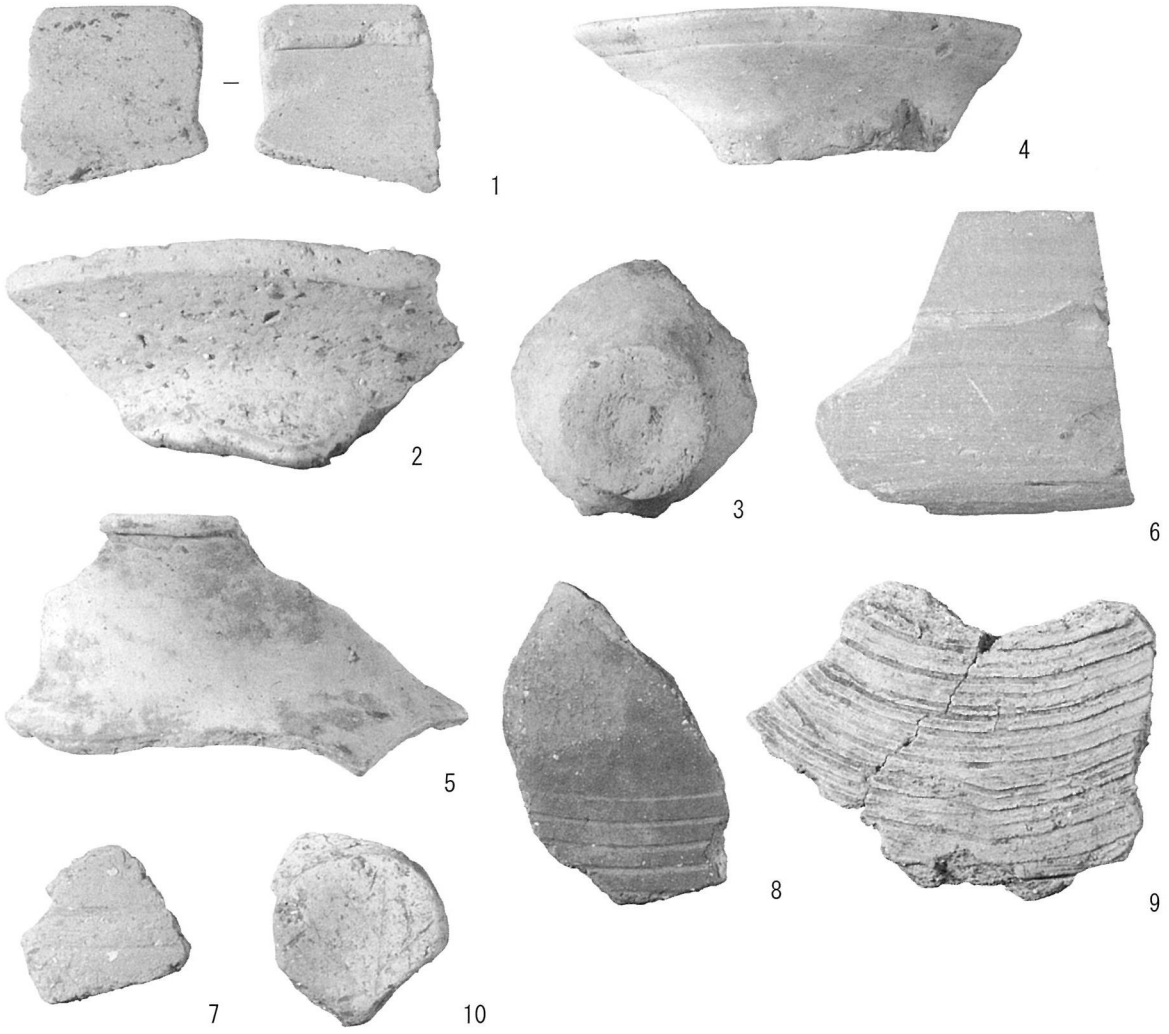


b．掘立柱建物４（第 11 図）

c．掘立柱建物５（第 15 図）

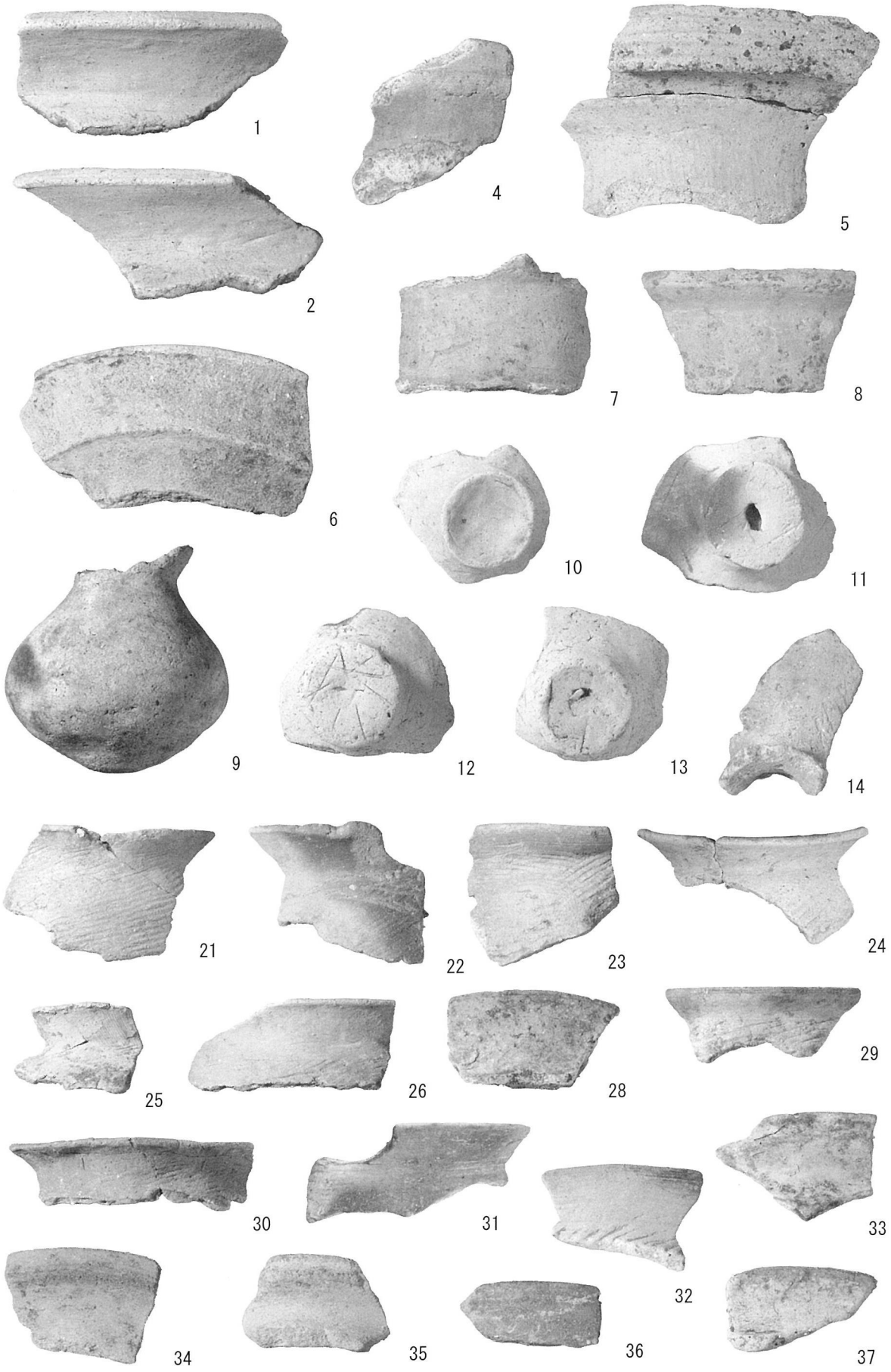


a．溝１～４（第 18 図）



b．第５層下部～第６層上面遺構（第 24 図）

図版15　井戸1出土遺物



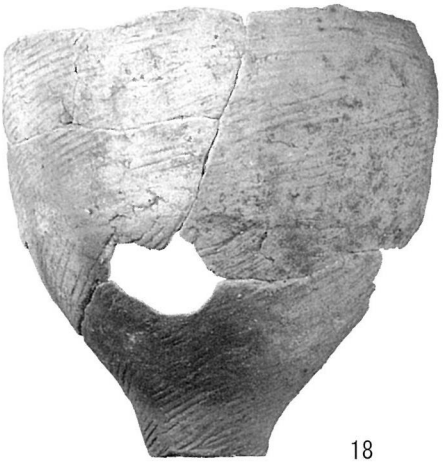
a. 壺・甕（第22図・第23図）

図版16　井戸1出土遺物

15

16

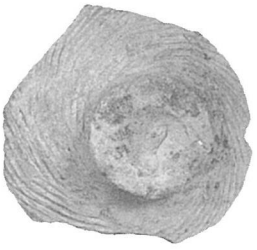
17


18

19

38

39


40

41

a．甕（第22図・第23図）

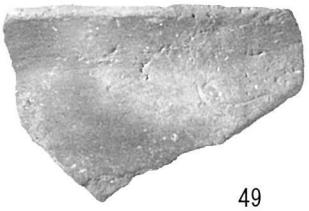
42

43

44

45

46


49

48

50

51

52

56

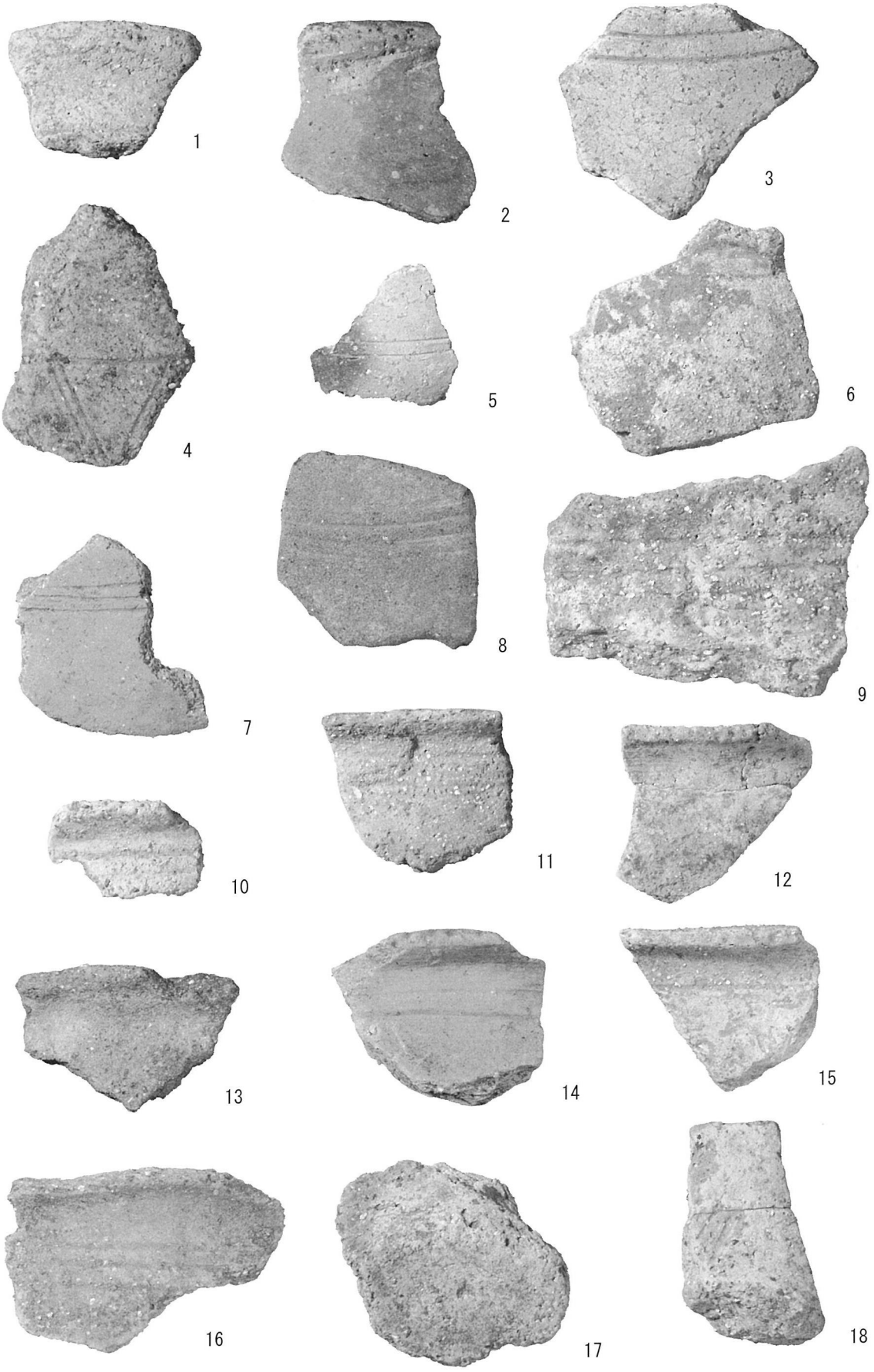
53

54

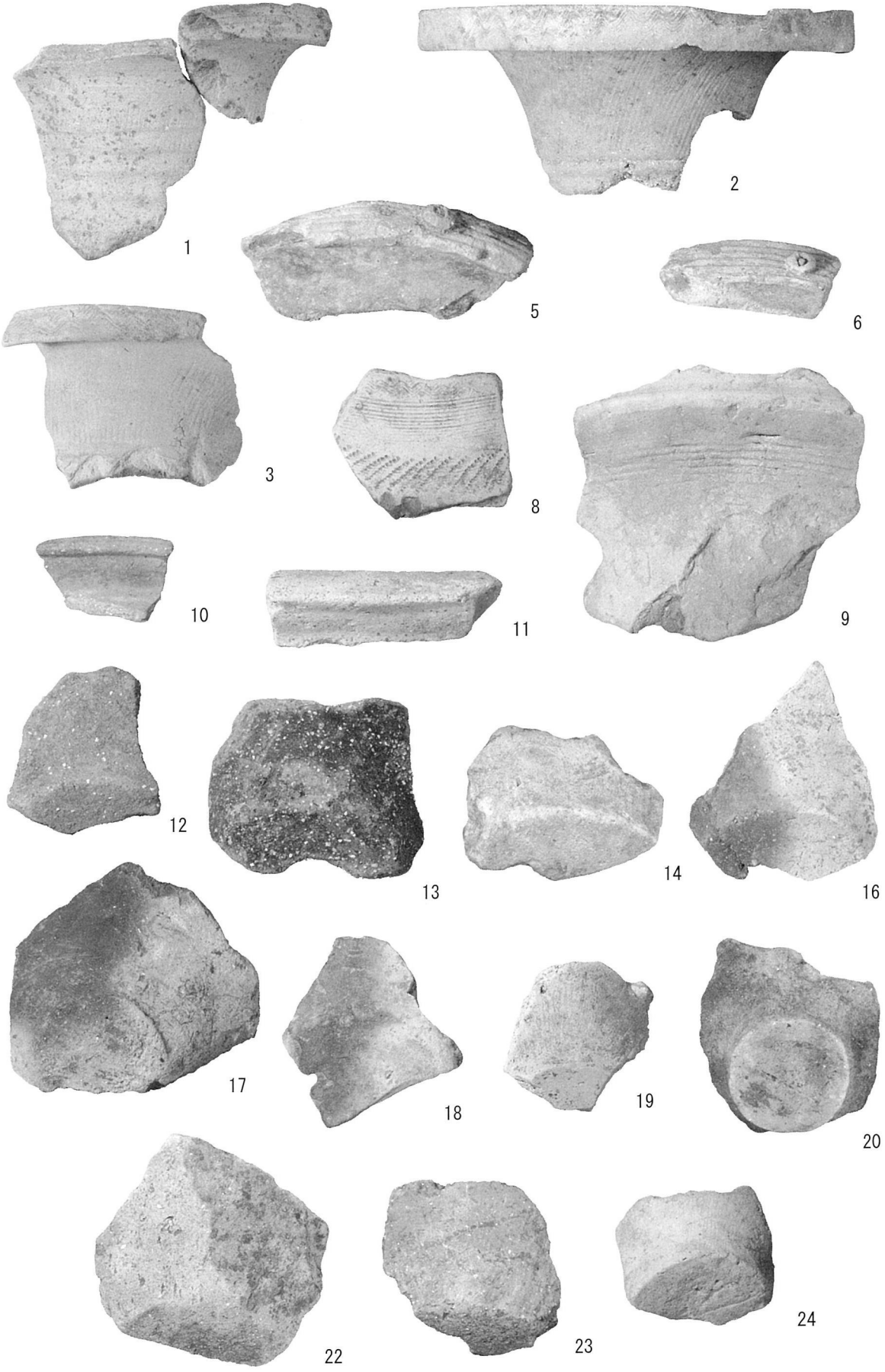
57

a. 鉢・高杯（第23図）

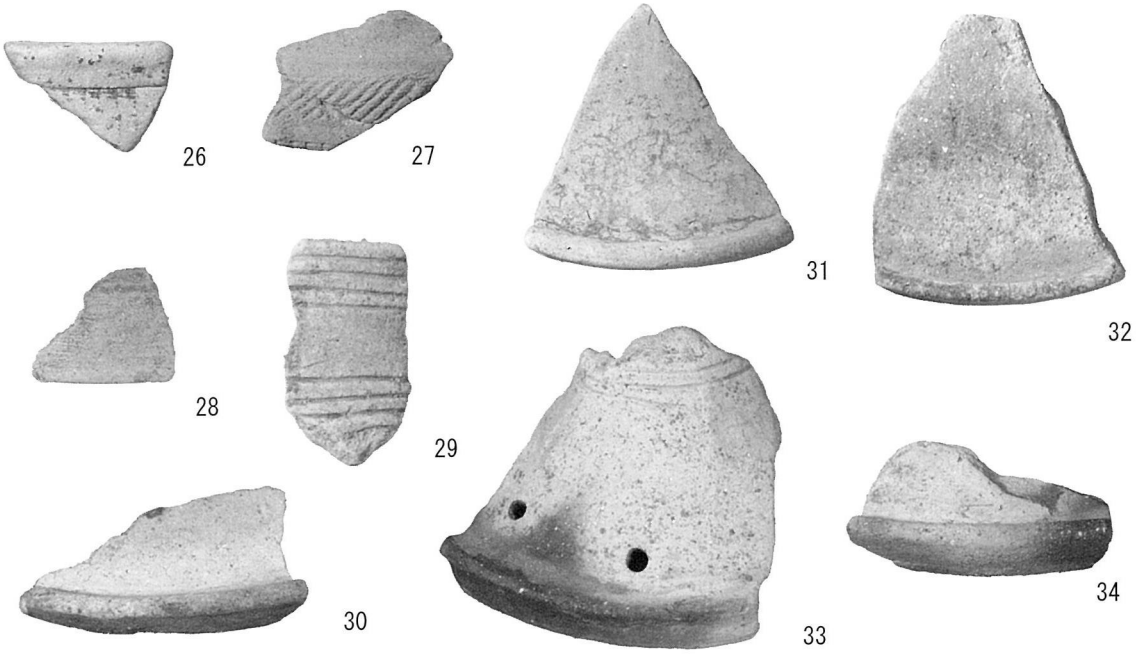
図版18　第5層出土遺物



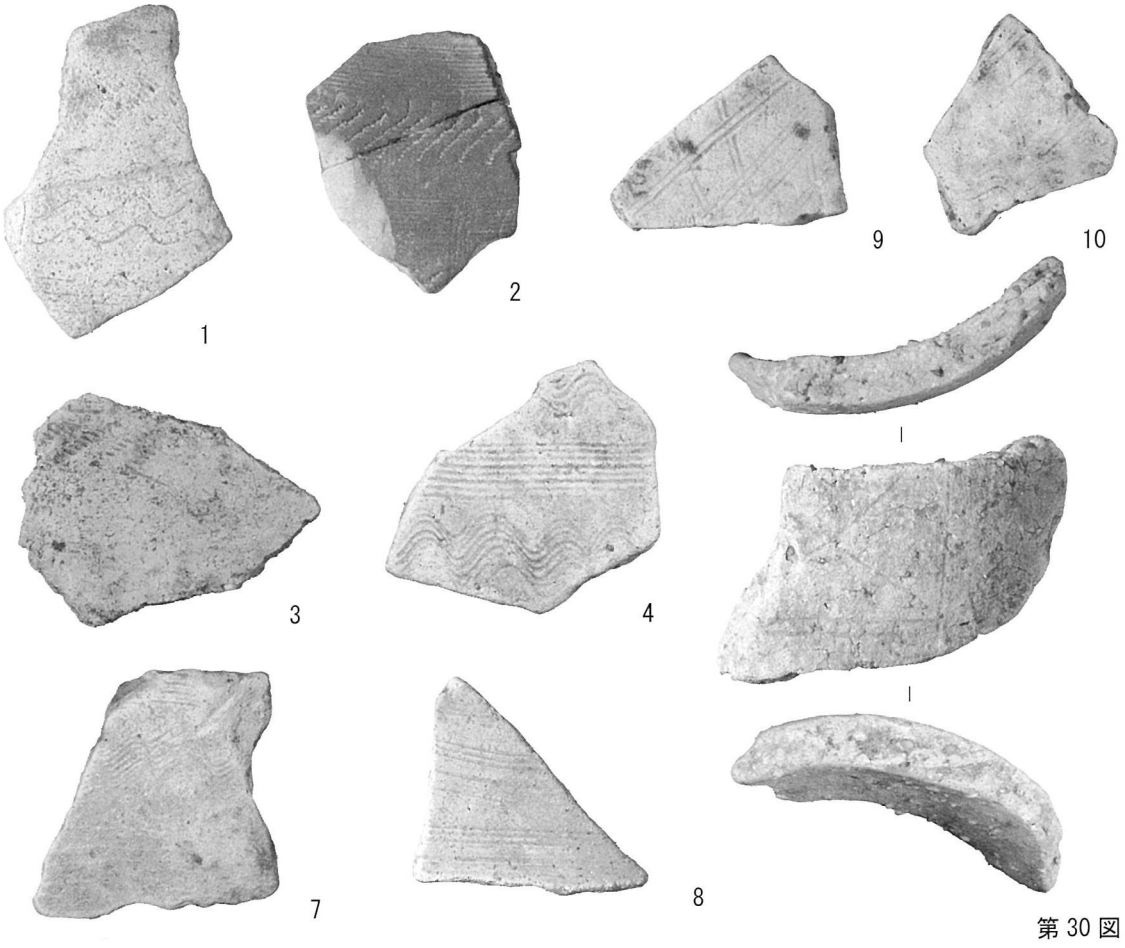
a．弥生時代前期（第27図）



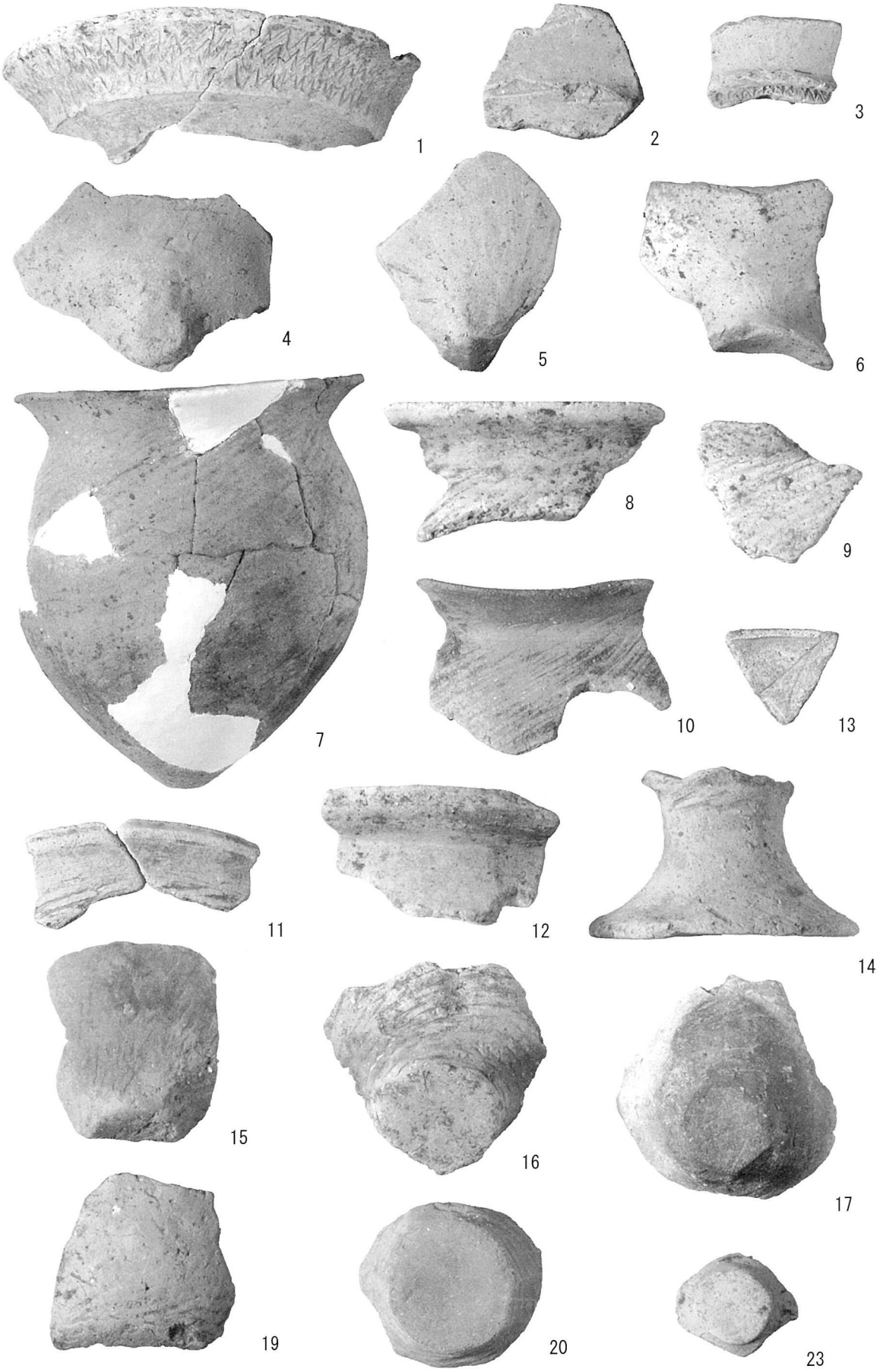
a．弥生時代中期　壺（第28図）



a. 弥生時代中期　鉢・高杯（第28図）

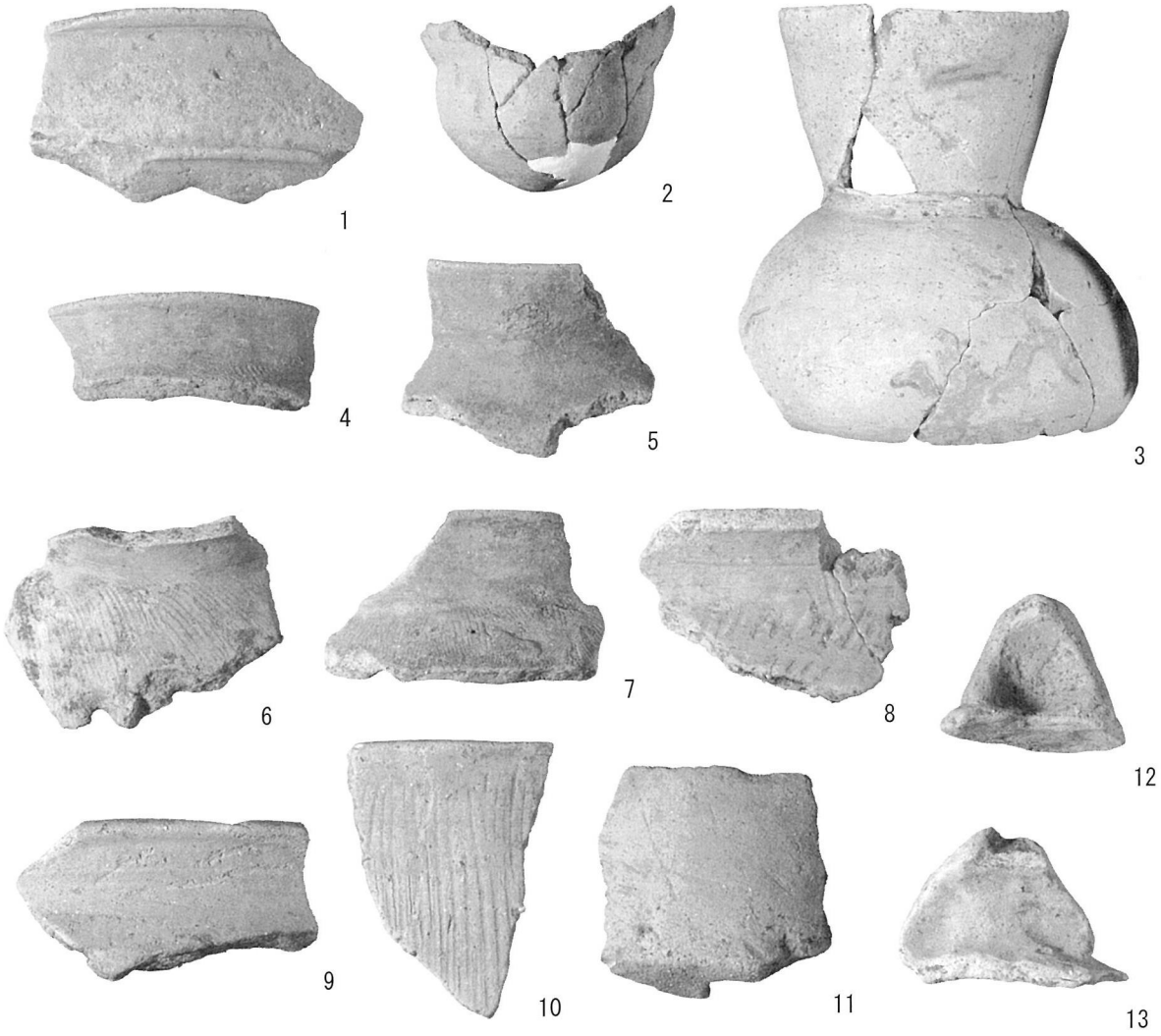


b. 弥生時代中期　施文土器・線刻土器（第29図・第30図）

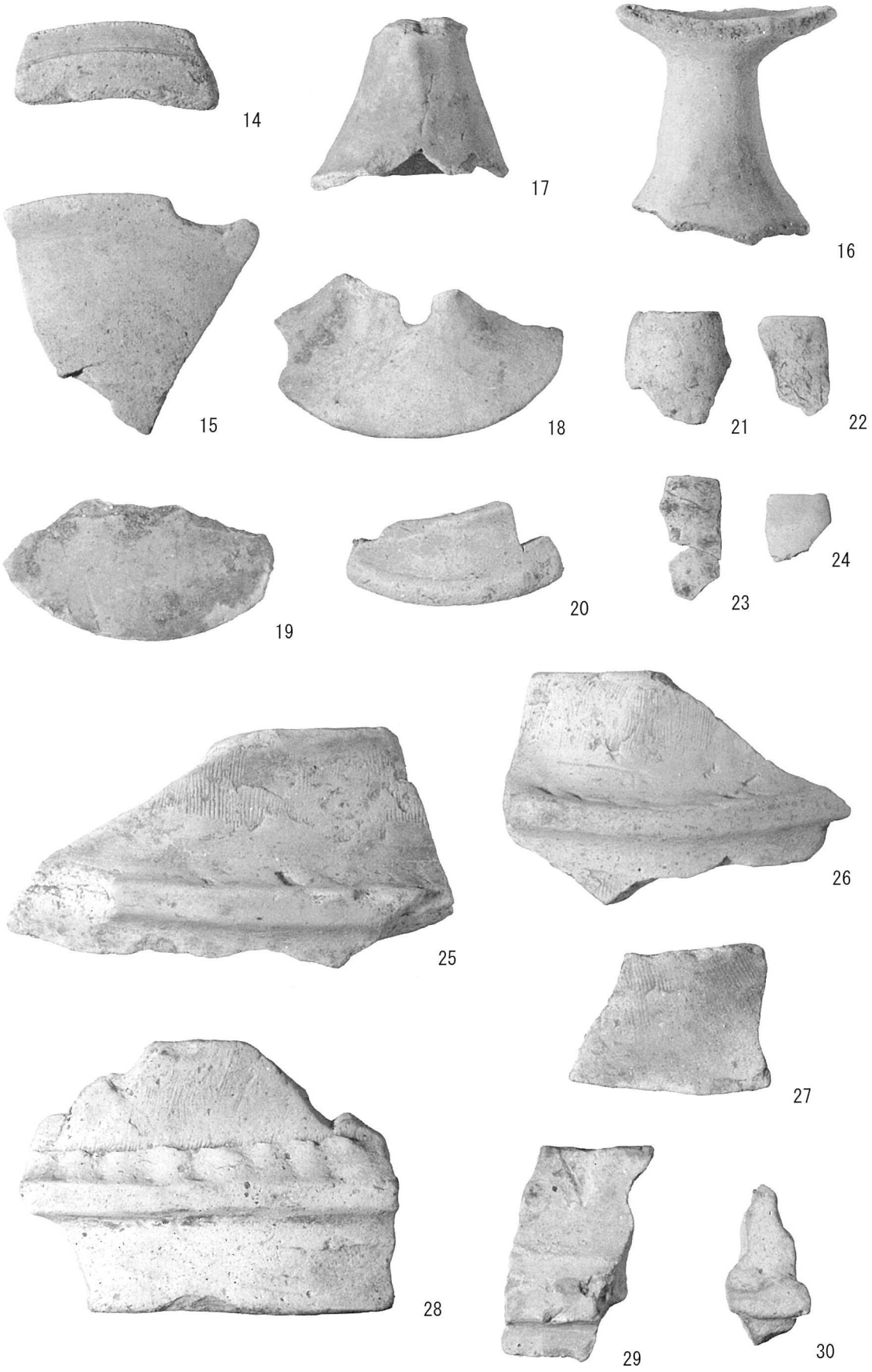


a．弥生時代後期後半～終末期　壺・甕（第31図）

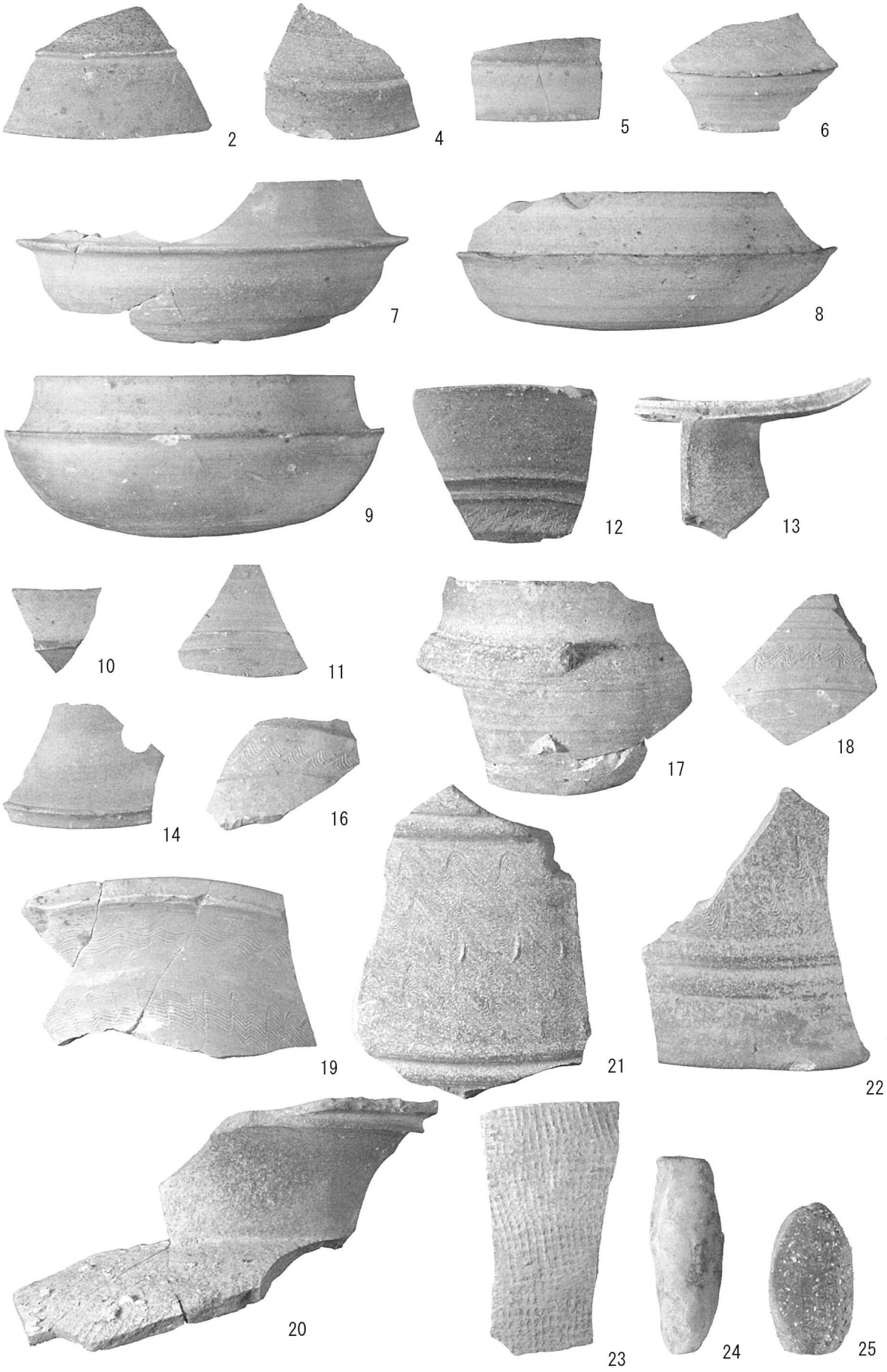
a. 弥生時代後期後半～終末期　鉢・手焙形・高杯（第31図）



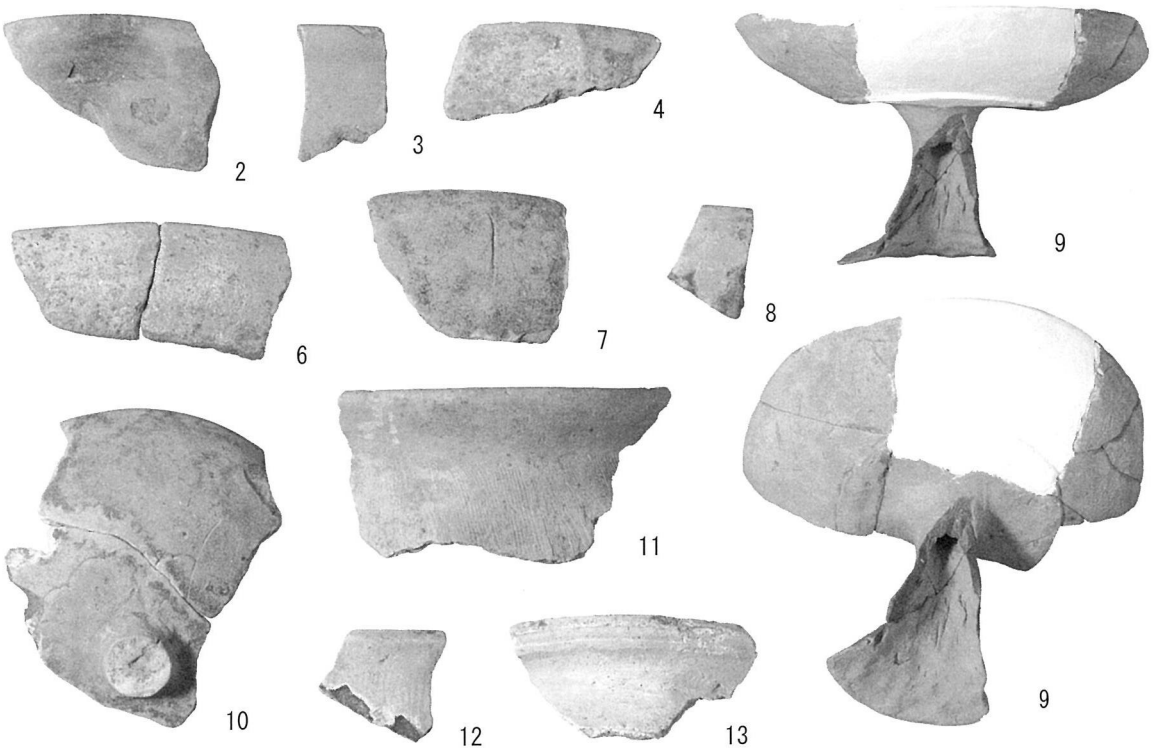
b. 古墳時代中期　土師器（第32図）



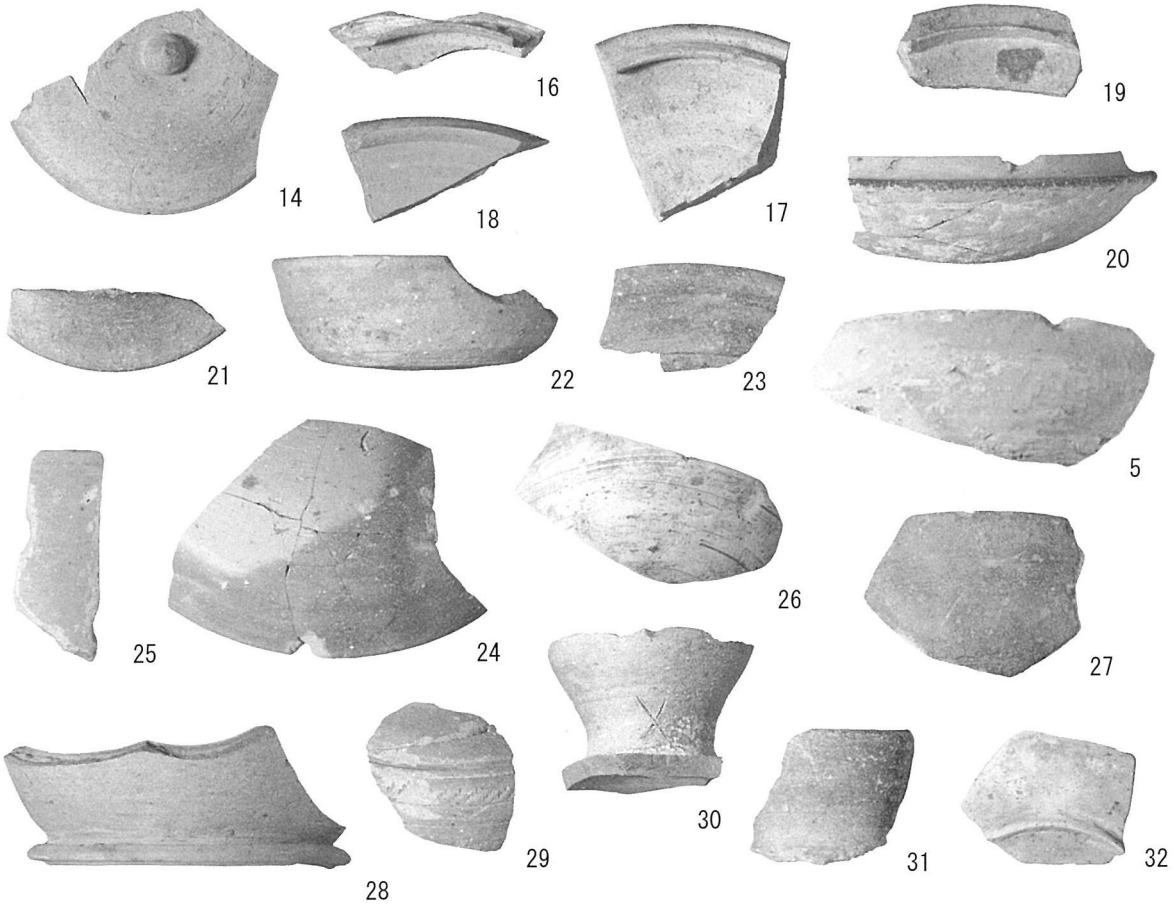
a．古墳時代中期　土師器（第 32 図）



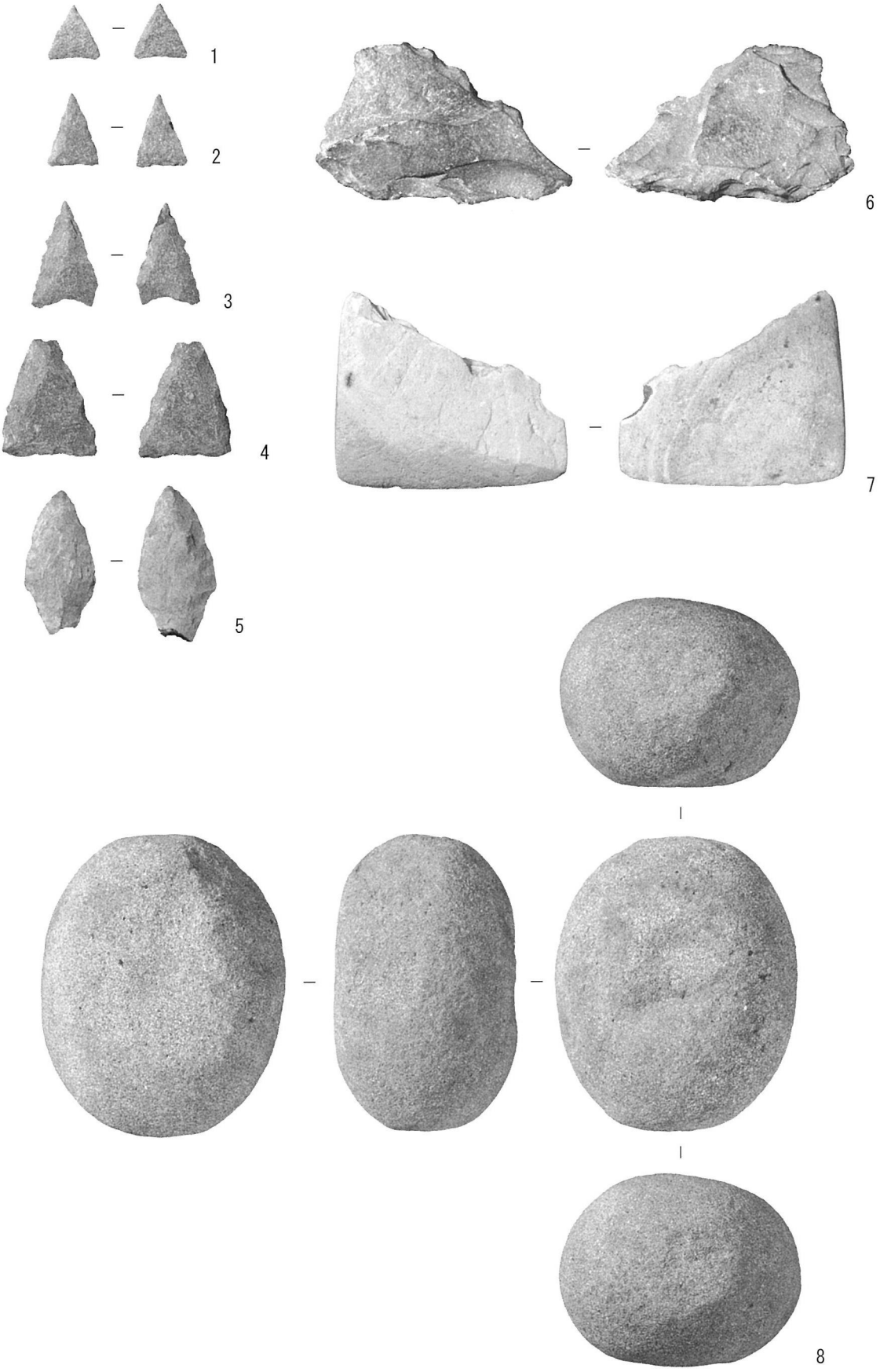
a. 古墳時代中期　須恵器・土錘（第33図）



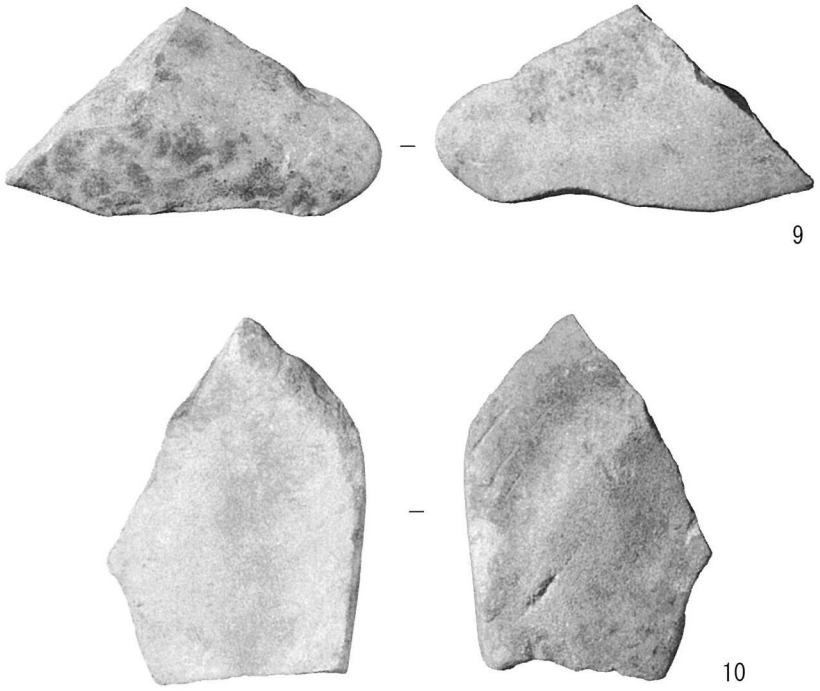
a. 飛鳥・奈良時代　土師器（第34図）



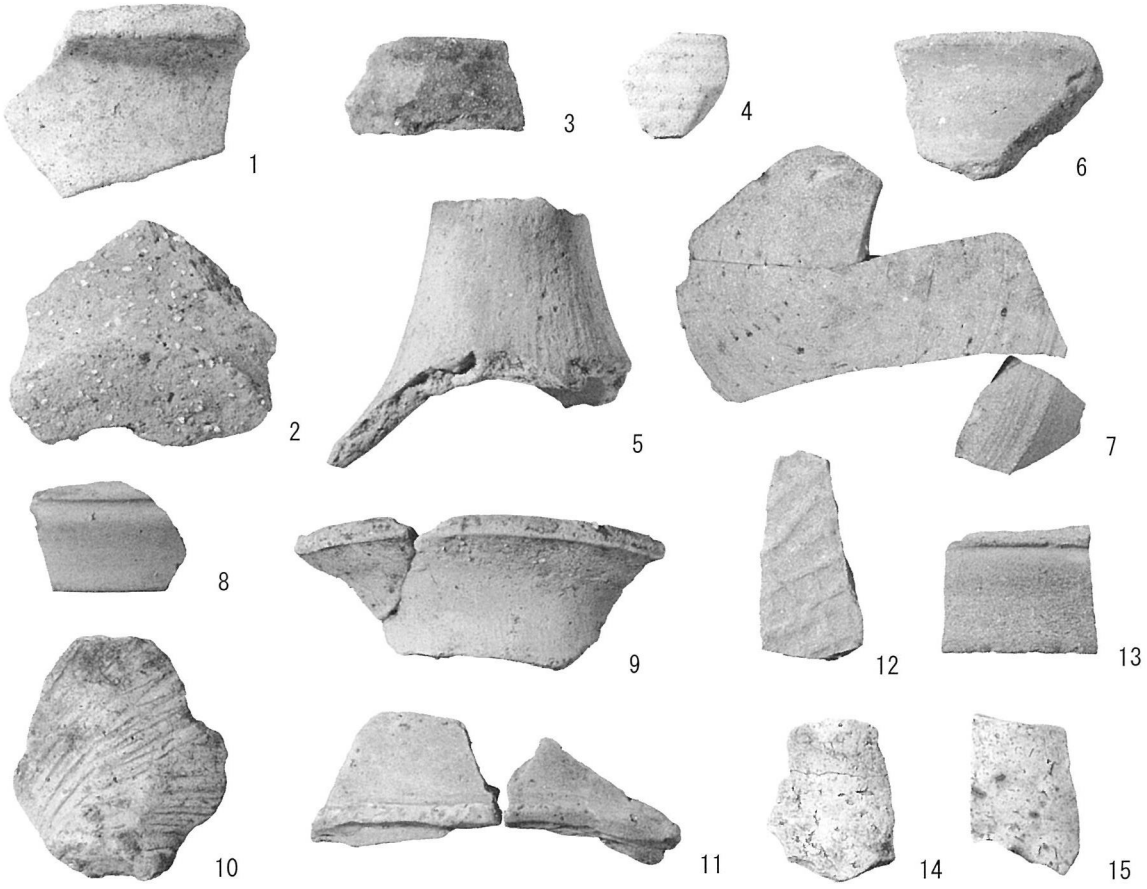
b. 飛鳥～平安時代　須恵器・黒色土器（第34図）



a. 石鏃・楔形石器・石斧・敲石（第35図・第36図）



a．砥石（第37図）　　b．焼夷弾（第38図）



c．各遺構出土の混入遺物（第39図）

報 告 書 抄 録

ふりがな	てしまきたいせき　だい６じはっくつちょうさほうこくしょ
書名	豊島北遺跡　第６次発掘調査報告書
シリーズ名	豊中市文化財調査報告
シリーズ番号	第69集
編著者名	服部聡志
編集機関	豊中市教育委員会
所在地	〒561-8501　大阪府豊中市中桜塚3丁目1番1号
発行年月日	平成27年（2015年）3月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
てしまきたいせき 豊島北遺跡	とよなかしそねひがしまち 豊中市曽根東町6丁目38－1 他６筆	27208	（市）53 （府）47	34° 45′ 53″	135° 28′ 23″	2013.5.13 ～ 2013.7.31	454㎡	共同住宅建設工事

所収遺跡名	種別	主な時期	主な遺構	主な遺物	特記事項
豊島北遺跡	集落	弥生時代前期・中期後半・後期後半～終末期	後～終末期の井戸、柱穴	弥生土器（Ⅰ、Ⅳ、Ⅴ末～庄内式）、石鏃、楔形石器、敲石、砥石	前期の初出資料、井戸内終末期一括資料など
	集落	古墳時代中期後葉～末	柱穴、土坑	土師器、須恵器、土錘、円筒型土器	中期末の集落と韓式系土器
	集落	飛鳥・奈良時代	掘立柱建物、土坑、溝	土師器、須恵器	大型掘立柱建物、宮都型土師器
	集落	平安時代	掘立柱建物、溝	土師器、黒色土器	条里型区画溝

豊中市文化財調査報告書　第 69 集

平成 27 年（2015 年）3 月 31 日　発行

豊島北遺跡　第６次発掘調査報告書

発行　　豊中市教育委員会
編集　　地域教育振興室　文化財保護チーム
印刷　　株式会社中島弘文堂印刷所